

ピースボート「地球一周の船旅」 航海日誌(1～30回)

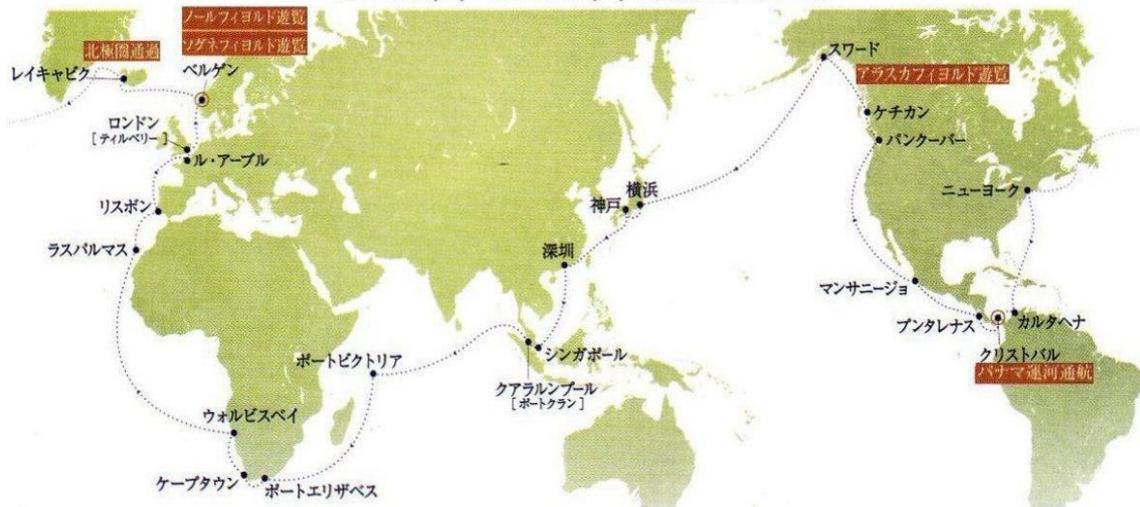
ピースボート地球一周の船旅(Voyage117) 航海日誌・全60回		
1	4月15日	ビルような巨船に乗船
2	19日	一直線で200m超の船室廊下
3	〃	最初の寄港地・深圳(シンセン)で事件勃発
4	21日	船長主催の歓迎会
5	22日	船上で「学校給食世界一」を講演する
6	24日	初めて知ったシンガポール歴史の真実
7	25日	オブショナルツアーの選択
8	27日	インド洋の日の出
9	29日	船内でPCR陽性者が出る
10	2日	世界で最も美しい海のセーシェルに寄港
11	3日	イベルメクチンの真実を知らない人が多い
12	4日	囲碁・将棋大会への参加
13	5日	船の揺れと酔い
14	7日	天空に広がる満点の星に感動
15	10日	アフリカ南東部の大都市ポートエリザベスに接岸
16	12日	荒れる合流海域に巨船も翻弄される
17	15日	乗船一か月
18	〃	世界最古のナミブ砂漠に感動
19	17日	南半球は太陽が西から昇る!?
20	19日	ガーナで野口英世に会えないのは残念
21	20日	沖縄返還の密使・密約のすべてを語る
22	22日	運動会順延でクルーズディレクターにインタビュー
23	23日	洋上・大運動会の開催
24	26日	11日ぶりに見えた陸の明かり
25	27日	カナリア諸島で食べたスペイン料理
26	28日	オカリナのレッスン始まる
27	30日	延々と続く待ち行列に仰天
28	1日	学校で習わなかったから知らない
29	〃	ノルマンディーに上陸
30	3日	ロンドンで記録的な大渋滞に巻き込まれる
31	5日	憧れの巨大な遺跡列岩を見に行く
32	〃	悲喜こもごもロンドン後遺症
33	6日	冷涼明麗なスカンジナビア半島に接岸
34	7日	ヨーロッパ最大級の氷河が作るフィヨルドを船上から見学
35	9日	白夜の船内生活
36	10日	動く地球表層の岩盤(プレート)の上に立つ
37	14日	船内の大劇場で乗船客主体のイベントを開催
38	17日	広島県から参加した元教員ご夫婦
39	〃	7人の「ウクライナ・ユース・アンバサダー」が乗船
40	19日	自由の女神から始まったニューヨーク寄港
41	〃	NYジャズクラブの雰囲気浸った初日の夜
42	20日	ハドソン川のクルーズ観光に参加
43	25日	パーミュタトライアングルに突入
44	27日	コロンビアに惹かれたあそこ
45	29日	年中気温30度を超える熱帯雨林の国へ
46	30日	朝の食卓にのぼった世界一住みよい国
47	3日	陽気な歓迎と高い物価
48	5日	新札発行の肖像が変わった
49	6日	世界一周旅行の仕組みを知る
50	11日	オーバークラウドツアーの興奮を再び知る
51	12日	メキシコから1週間かけてカナダのバンクーバーに接岸
52	13日	アラスカのケチカン(Ketchikan)に上陸
53	14日	アラスカ湾に浮かぶおびただしい氷塊を見る
54	18日	崩れるハーバード氷河を見る
55	〃	劣化し続ける国家と組織を講演
56	19日	アラスカ・スワードへ最後の上陸
57	22日	空き家を改装してびっくりさせた中日ご夫妻
58	23日	濃霧と時化と強風で荒れるアリューシャン列島の海
59	25日	総括その1 105日間の船旅の仕組み
60	28日	乗船客とスタッフを入れて総勢1500人

PEACE BOATに乗船し世界一周の旅に出る その1

2024/04/15

航路図・航路日程

2024.4.13(土)～2024.7.26(金) [横浜発着105日間]



ビルのような巨船に乗船しました

乗客2000人、平均年齢70歳代半ばの客船「パシフィック ワールド号」(PEACE BOAT117)に乗船して、105 日間の世界一周の旅に出ました。

4月13日、土曜日、横浜港の大栈橋を出港した PEACE BOAT117(以下、PB117 と表記)は、神戸港で乗船客を乗せ最初の寄港地、中国の深圳に向かいます。

航路は上の地図で見ると、アフリカ大陸の喜望峰をぐるりと回って北上し、イギリス、フランス沿岸からスカンジナ半島さらに、レイキャビクからニューヨークへ向かいます。北米大陸を南下してパナマ運河を経て太平洋へ。メキシコ沖から北上してカナダ、アラスカを経てアリューシャン列島沿いに日本へ向かい、7月27日に横浜港に帰ってきます。

船は7万9千トンと言いますから戦艦大和と同等以上の排水量です。15階建てのバカでかいホテルが海上を移動していく感じです。左右の舷に分かれて配置さ

れた船室は、ホテルと同じようにずらりと窓際に並んでいます。その廊下は一直線に200メートル以上のまっすぐで細い廊下ですから、一番向こうは人間が豆粒ほどのサイズでしか見えません。

船室、つまり乗船客の部屋の扉に、小さな白板で外出先(といっても船内のどこかですが)を書いたメモ用紙が張り出されていたり、簡単な連絡メモなどを張り出している部屋もあります。乗船客とクルーの身分はすべて把握され、しかも全員が「身柄拘束」されています。その上外からは誰も侵入できない船内ですから、セキュリティは万全というわけで、きわめてオープンムードになっています。

一晩かけて14日の日曜日に神戸港に接岸しました。ここで新たに船客を拾って日本を離れ、いよいよ世界一周の旅に出ます。接岸すると手が届くような距離の向こう側に、見送りする人々が多数いるのでびっくりしました。お顔もはっきりと分かる距離ですから、お互いに目線が合うと手を振り合っただけで、出会いと出港の挨拶をします。

賑やかな出港のイベントが終わると間もなく、ポワーツと腹に響くような汽笛が何度か鳴り、巨船は静かに岸壁を離れていきます。すると双方が手を大きく振って、しばしの別れを惜みます。筆者も知らない人々に向かって手を振り、それにこたえて岸壁の人たちも手を振ってきました。徐々に距離が開いていくだけで、例えようもない心細い感情が湧き上がってきます。

岸壁での別れは、誰もが感傷的になるのかもしれませんが。旅立つ人としばしの別れというのに、岸壁で涙を拭いている光景も見えます。そのとき筆者は、戦争に駆り出されていった人々の別れの有様を思いおこし、胸に突き上げてくるものがありました。死地への旅を送った人々と戦場に向かっていった人たちのことです。

岸壁を船が徐々に離れていったとき、兵隊さんとその恋人や肉親たちはどれほど別れを惜んだことか。その別れを包むように、いま聞こえてくるむせび泣くような汽笛が流れていったのです。

複雑な感傷に浸りながら、神戸港を魅惑的に囲む美しい夜景を飽かずに眺めました。こうして筆者の旅路は始まりました。

PEACE BOAT に乗船し世界一周の旅に出る その2

2024/04/19

一直線で 200m超の船室廊下

左右の舷側に並んだ船室は、外から見るといかにも豪華客船という風景ですが、中に入って驚いたのは、船室が左右に並んだ一直線廊下の長さでした。全長 330メートルの巨大な客船ですから、真ん中に背骨のように伸びた一直線の廊下が 200m以上あっても驚くことはありませんが、その廊下を見た瞬間、向こうの端が小さく点になっており、人の姿も見分けがつかせませんでした。



左右の壁はすべて、ホテルと同じような船室になっており、そこに個室から、2人、3人、4人部屋と並んでいます。筆者は、1人部屋の並びですが、入ったところ 15平米はありそうで、大きなダブルベッドを備えた広い部屋であり、大きな窓も気に入りました。

乗船客の出会いの会があり参加してみました。席の近隣同士がたちまち仲良しグループを形成し、話題はどんな部屋で何人で参加しているかということになり、誰言うともなくそれぞれの部屋を見せてもらう「部屋見学会」となりました。

相部屋の楽しさと難しさ

中部地方から参加した女性は、窓なしの2人部屋でした。2つのベッドが並んだ、ま、行ってみれば大きめのツインルームの感じであり、中央にバカでかい鏡があります。その時点では、相部屋の方がまだ部屋に来ていないとのことでしたが、どこかの誰が来るかは未定とのこと。

しかし事務局は、年齢がほぼ同じであり、双方の希望なども勘案して相部屋の人を選ぶそうですが、相性がいまいかどうかは実際に生活してみないと分からないらしい。相性が悪いと最悪の旅になるそうで、事務局が最も腐心するメンバー選びということでした。

バルコニーは海と隣接する贅沢でした

2人部屋でもバルコニー付きの部屋に案内されると、広さは変わらないのにバルコニーに出て見ると途方もなく開放的な気分になりました。海と直接ふれ合うことは素晴らしい環境であることを知りました。

3人部屋、4人部屋も見せてもらいましたが、間取りと天井の高さ、他人との間隔などに設計者の工夫が見て取れて、それなりに生活環境としては満足できる間どりになっていました。





バルコニーに出てみると海風の快適さに驚きました

3人以上の相部屋は、若い人たちが比較的多いと聞きましたが、確かに学生たちの合宿気分を思い出させるグループも見えており、外国人も混じった華やいだ雰囲気でした。若者たちと雑談を交わしましたが、ショックを受けたのは「日本はもうダメです。みんなそう思っています」という言葉です。3人いた女性がみな、そう言っとうなずきます。

そうなったのは、私たち壮年以上の日本人の責任でもあるのです。3人のうち1人は学生、2人はボランティア活動をしているとのこと。再会を約束して別れました。

交流会で東京人が少ないのはなぜなのか

乗船客の住所別・地域別で交流する会にも出て見ました。都道府県や地域別に分けての交流ですが、東京からきた人の出席者が少ないことに違和感がありました。全員の参加ではないので、大勢参加しているはずの東京からの人は、こうした交流会は出ないか苦手なのか。大都会人の「疎遠で無関心・無関係」に徹する状況がここにも出ているようにも思いました。

もう一つ意外だったのは、お一人参加者が多いことでした。正式な発表はないのですが、7, 8 割が単独で参加しているようであり、ご夫婦とおぼしきペアは意外と少ない感じでした。

PEACE BOAT に乗船し世界一周の旅に出る その3

2024/04/19

最初の寄港地・深圳(シンセン)で事件勃発

神戸港を出てから 2 日余で中国の深圳に接岸しました。最初の寄港地であり、ここから中国人乗船客が多数、乗ってきます。

深圳は常に、中国近代化のトップ引きとなって発展している大都市で、広東省の省都でもあります。ほぼ 10 年ぶりの訪問なので、都会の様相がどのように変わったか期待していましたが、港の周辺をバスと徒歩で 2 時間ほど回っただけなので深圳の全貌は窺いべくもない短時間でした。



深圳の港の一角は観光客で賑わっていました

経済特区で売り出した都市ですが、筆者の専門分野の知的財産施策でも、常に特区扱いで新施策が導入され、たびたび北京の中央政府の先を行く知財推進政策や

助成金制度などを断行し、話題になってきました。往時の深圳発展の出来事を思い出しながらビールを一杯飲み、さて船に帰還する時間になって「事件」が勃発しました。

日本の VISA カードは使えない

レストランに入るとき、受付の女性に VISA カードを見せて、これで勘定はできるかと聞いたところ、問題ないという回答。そばにいた男性従業員も、同意の意思表示です。

簡単なおつまみとビールで、こちらはいい気分です。昔、中国ではビールを冷やして飲む習慣がなく、飲むときはあらかじめ冷やしておくように注文したことを思い出しました。ビールを常温で飲むのは旧ソ連のロシアも同じでした。いまは黙っていても、冷えたビールが出てきますが。

さて、船に帰るバスの時刻も迫ってきたところでお勘定となり、カードを挿入して暗証番号を入れたところで拒否されました。何度やっても受け付けない。筆者は、現金ゼロ、クレジットカード一枚だけで下船したのでさあ、困った。中国では、日本のクレカは使えないことが多いとアドバイスを受けてことを軽視していた失敗です。

とっさに北京に駐在している、JST(国立研究開発・科学技術振興機構)の米山春子さんを思い出し、WeChat で連絡するとうまくつながりました。WeChat は、中国独自の SNS です。日本のラインのような存在であり、中国圏に入ったとたん、国家の方針で PEACE BOAT の Wi-Fi は繋がらなくなり、ラインもメールもまったく使えません。命の綱は WeChat だけなのです。筆者は、このサイトができた当時から使っているので、大助かりでした。

「文無し」の事情を米山さんから話すように、レストランの女性にスマホを手渡しました。米山さんが自分のデジタル口座で支払うことを申し出て、なんなくこの事件は解決となりました。

JST 時代、春子さんとは中国総合研究センターで、日中科学技術交流、さくらサイエンスプランなどで日中両国の反日・反中勢力を乗り越えながら交流推進に取り組んだいわば同志です。こういうときこそ、一番頼りにする仲だったのです。地獄に仏とはこのことです。

筆者は飲み逃げ同然で急いで帰りのバスに駆け込みました。その直後、北京にいる米山さんと深圳のレストランが通信のやりとりをし、いとも簡単に勘定が払われたのです。その勘定書きの WeChat 画面をバスの中で見たときは、感動しました。「やったね、中国！」という気分でした。

日本でもこういうことができるのでしょうか。寡聞にして知りませんが、ネット社会、デジタル時代の実用化では、中国の方が日本を超えていったことは 10 年ほど前から知っていました。ああ、中国が先を行くと何度も思ったものです。キャッシュレス時代の先頭を切った国であることは、間違いないことを自分の体験で確認したような気持ちでした。

PEACE BOAT って何だ

出発前、船に乗る話をすると決まっ聞かれるのが「PEACE BOAT って何だ」という言葉です。ピースボートって聞いたことはあるが、それがどのような組織で運営されているのか。拠点は日本なのか外国なのか、旅行会社なのか NGO なのか。筆者を含め、多くの人が曖昧なままになっています。



船の全景を撮影するのは無理。船尾の方だけ入れました

この機会に急いで調べて、筆者なりに分かりやすく整理してみました。

- イタリアで建造された客船「パシフィック ワールド号」を 41 年前に組織された日本の国際 NGO・PEACE BOAT がチャーターして運営する「船旅で世界の人と人をつなぐ」活動です。
- 船のサイズは、7 万 7400 トン、全長 261m。15 階建てビルを乗せたような巨船で、2か所で数台のエレベーターを動かし、4 層吹き抜けのアトリウム空間は、船内とは思えない豪華な空間です。
- 一流ホテル並みの設備を備えており、教養、娯楽、趣味、スポーツ、音楽など広範囲なプログラムが常時、走っていて乗船客を退屈にさせません。PEACE BOAT スタッフが、すべてサポートしていますが、乗船客が自主的に企画したイベントも目立ちます。
- 船舶を利用して世界中を航海し、異なる文化や国々の人々との交流を促進します。参加者は、船上でのワークショップやディスカッション、文化交流イベントなどを通じて、相互理解や国際協力の重要性を学びます。
- 1983 年の出航から今回の 117 回航海まで延べ 8 万人の人々が世界中の 250 を超える港に停泊して大自然や世界遺産を見学、それぞれの国や地域の人々と交流してきました。世界の平和、人権、地域紛争、核や環境問題と真摯に向き合うリベラルな姿勢が強く、国連の特別協議資格を持っています。
- 今回の Voyage117 の乗船状況は、大まかにまとめると次の通りです。

20 か国・地域以上にまたがる乗客 1300 人とスタッフ 600 人が乗船。

乗客の男女比は 7 対 3 で女性優位。

乗客の年齢別構成は以下の通りです。

30 歳以下 18%

31-60 歳 10%

61-79 歳 63%

80 歳以上 9%

最高齢は 95 歳で 2 人

平均年齢は、筆者の想像では 70 歳代前半かなと思います。

自由な雰囲気健康談する

乗客同士は、非常にフランクな付き合いです。レストランに行けば、案内人が相席させて客同士のコミュニケーションが自然にとれるように配慮しています。名刺交換などの挨拶もなく、自己紹介を印刷した名刺や紙を出す人もいますが、それはまれです。筆者も知人のアドバイスで自己紹介の名刺を PC で作成して持っていますが、それを出す機会はほとんどありません。

口火となる話題は、出てくる料理や食べ物から始まり、決まって健康の話、病気の話へと発展します。年配者が多いので自然そういう流れになりますが、面白いのは健康を自慢する人はおらず、大体はいかに健康維持が難しいかを語って聞かせ、相づちをうち、距離感がなくなり、それから話題は世の中の出来事へと発散していきます。

自分の経歴や体験を話す人はまれですが、話せば決まって興味があり引き込まれていく内容なので、座は一気にまとまり散会するときには 10 年の知己になるという雰囲気です。

社会的地位や学歴や職歴などとは無関係で、お互いにフラットな立場で自由に発言できる不思議な空間を作っています。



さらば深圳



船の最後尾から深圳に別れを告げました

ここまで書いたところで船は深圳を離れて一路、シンガポールへと向かいました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 4

2024/04/21

船長主催の歓迎会

深圳で乗船した中国の人たちを迎えて、1300 人の乗客が一通り揃い、船長が主催するウエルカムセレモニーが船のど真ん中の 7 階ふき抜けの大ホールで開催されました。船上とは思えない規模と豪華さ、歓待するスタッフの立ち居振る舞いもそれなりに洗練されています。船長からのウエルカム・ドリンクのシャンペーンが配布され、式典が始まりました。



ウエルカムセレモニーは吹き抜け大ホールで華やかに展開されました

前日の船内新聞で、「思い思いのおしゃれをして」参加してくださいという呼び込みがあり、会場に行ってみると和洋それぞれに着飾った女性陣の華やかに圧倒されました。男性陣もそれなりに「趣向」をこらしており、筆者はタキシードに帽子をつけて出席しました。社交ダンスを 20 年間習ってきたので、燕尾服もタキシード

もそれなりに着こなしてきたつもりですが、久しぶりのタキシードを身につけるとビシッと姿勢がよくなるのがいいところです。



映画「風とともに去りぬ」のヒーロー、Rhett Butler を気取ったつもりでした



式典は日・中・英の 3 か国語の通訳が入るのですが、日本人が大多数、そこへ互いに顔では見分けがつかない中国、台湾、韓国からの乗船客が混じり、あちこちに西洋人の顔立ちの人が散見しています。互いに運命共同体の船に乗った family ですから、言葉は交わさなくても、そこはかたなく同胞・仲間・同志・戦友・・・という意識が芽生えてくるから不思議です。

歓迎のバンド演奏やらスピーチと花束贈呈など一通りの式典が終了すると、ダンスパーティが始まりました。

式典後はダンスパーティで爆発

筆者が社交ダンスを始めたきっかけは、友人の整形外科医の助言からでした。膝関節から下肢全体に老化現象が見え、あぐらもかけない硬直化が顕著になって来たとき、脚を使うダンスがいいと薦められたのです。最初は、東京・日比谷の東宝ダンスホールで習っていましたが、その教師の紹介で、江東区門前仲町の毛塚ダンスアートアカデミーの会員となり、本格的に習い始めました。

社交ダンスはタンゴ、ワルツ、スローステップ、ルンバ、チャチャチャなど種目がいろいろありますが、どれひとつとっても際限なく奥が深いものです。習い始めて徐々にこの「道楽」の深淵をのぞき見ては、ため息をついてきたものです。

船上での記念ダンスパーティは、端的に言うと「イモ洗い」の様相でした。ともかくも船でダンスを踊ってみたいという気持ちがあるためでしょうか。華やいだ会話と笑いが会場全体を盛り上げ、ま、言ってみれば高齢者の合コンでしょうか。

タキシードで決めてきたのに、完全に浮いています。ステップなどというものではなく、足踏みしては誰やらの足を踏んだり蹴ったりの有様ですが、それがまた途方もなく楽しく愉快ですからどのお顔も幼児の時代に戻っていました。

日本と遮断された閉空間を楽しむ

新聞、テレビなど情報と手段がないので、日本国内と国際的な動きは、この1週間、完全に遮断されています。スマホとPCを持っているので、Wi-Fiにつないでネット情報は国内と同じ環境で見聞できますが、大きな制約がありました。Wi-Fi接続は船を通じてやるので、その料金がバカにならない。乗った当初は、誰もがWi-Fi接続を求めてサポートデスクに殺到しましたが、つないでみると国内と同じ環境になりますが料金が高い。

料金はスマホやPCに流通するデータ量に比例してかかりますが、YouTuberなどで映画を見ればあっという間に数千円になるという噂を聞いて、みな尻込みを始めました。きめ細かく使用するたびにセットしたり切ったりすれば節約できますが、これが面倒だから時間とともにスマホ・PCから離れて行ってしまおう。

こうなると、完全自由時間。しかも3食、昼寝付きでタダ。実際はそれなりの料金を払っているのを忘れて天国気分。こうして船旅は、一週間で過ぎていきました。



毎日、沈み行く太陽をデッキから眺めています

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 5

2024/04/22

船上で「学校給食世界一」を講演する

PEACE BOAT では、毎日、多数のイベントが展開されています。各種スポーツ、趣味・道楽、映画、教養、音楽、語学、料理その他諸々のテーマです。朝 7 時から夜 10 時ころまで切れ目なく、船のどこかで多数のイベントが同時進行で走っています。

その中でも異彩を放っているのが自主企画です。これは乗船者が企画立案し、PEACE BOAT 担当者の OK をとり、会場を確保し、船内新聞で告知してもらって参加者を集めるもので、前日の夜に部屋に配布されて来る新聞案内を見て、翌日、それぞれ興味あることに行動を起こすというものです。



筆者はこの機会に、日本の学校給食は世界一のソフトパワーであることを知ってもらい、食育推進の理解度を高める活動を船の上でやってみることに挑戦しました。

と言うのも、船の乗客はそれなりに社会的活動をやってきた方であり、年配者が多いので今の学校給食を知ってもらうことで社会的な認知度が広がるだろうという思惑です。学校給食甲子園を知ってもらい、主催者の認定 NPO 法人 21 世紀構想研究会の活動にも触れたいと思ったのです。

フリースペースとして一番広い場所を確保しましたが、果たしてどれくらい聴者が来るかまったく未知数でしたが、フタを開けてみれば約 100 人を超える方々が出席したので、びっくりしました。

日本人で学校給食を体験しなかった人はいません。年代によって献立の中身が違っているだけで、脱脂粉乳、コッパンから始まって、今風の料理に至るまで驚くほど進化してきました。その有様と学校給食の重要性をまず理解してもらうために、2 枚のスライドをお見せすると、関心は一気に高まりました。

ご存知ですか？ 日本の学校給食は世界一

学校栄養士の数	1万2100人(栄養教諭55%、学校栄養職員45%)
質の高い調理員	4万5476人(うち54%が常勤勤務)
完全給食の実施率	小学校・98.6% 中学校・83.9%
学校給食の実施形態	委託給食51% 単独校の調理49%
給食費(月額)	小学生・約4千500円 中学生約6千円
学校給食の摂取基準	世界にない栄養素(タンパク質、脂肪、ビタミン、目ねらるなど)のきめ細かい摂取基準
学校給食調理場の衛生管理	世界で一番厳しい調理場の衛生管理
食育という教育施策	世界に類がない食文化教育

出典：文部科学省

学校給食の現状を見出しだけで紹介し、続いて学校給食摂取基準で示されている栄養管理について紹介しました。

今の子どもたちは、カロリー、タンパク質、脂肪、塩分を摂り過ぎています。家庭料理と外食が摂り過ぎの原因であり、それがやがて生活習慣病に結びついていきます。子どもが摂りすぎと言うことは大人も同じだということになります。

その一方で各種ミネラル、ビタミン、食物繊維などは不足しがちになっています。

**献立は栄養士の資格を持っている人だけ
家庭・外食で採りすぎる栄養素を学校給食では抑える。
不足しがちの栄養素を学校給食で補充している。
この重要な役割を国民のほとんどが知らない。**

学校給食の摂取基準

	学校給食の基準	備考
エネルギー	33%	とり過ぎない。肥満児予防
タンパク質	12～20%に抑える	家庭ではとり過ぎ
脂肪分	25～30%に抑える	とり過ぎない。肥満児予防
塩分	33%未満	とり過ぎない。肥満児予防
カルシウム	50%に補充	家庭では不足しがち
鉄	摂取の確保に努める	家庭では不足しがち
ビタミンB1	40%に補充	家庭では不足しがち
ビタミンB2	40%に補充	家庭では不足しがち
ビタミンA	50%に補充	家庭では不足しがち
マグネシウム	50%に補充	家庭では不足しがち
食物繊維	33%以上補充	排便実態に合わせて調整

学校給食では、摂りすぎになる栄養素を抑え、不足しがちの栄養素を補充する献立を作っています。栄養教諭がその基準を守るために必死になって献立を作成し、しかも美味しいものを出さないと子どもたちに食べてもらえない。加えて最近の物価高で、食材は軒並み値段が上がり、四苦八苦して予算内で献立を作っているのです。

食べるものに事欠いた戦後間もない時代は、コッペパンに脱脂粉乳、それに簡単なおかずだけという献立であり、船上客の大方がこの時代でした。それから時代を追って、日本の経済発展と歩調を合わせて学校給食の献立も激変していきます。

やがて飽食の時代になり、家庭環境も両親が働くようになって家族団らんの食卓は徐々に姿を消して行きます。子どもの睡眠不足と朝食抜きが問題点として浮上り、ファストフードの普及と子どもの健康が語られる時代になってきました。

そうした時代背景の中でも学校給食の栄養管理は徹底しており、ヘルシーな食事は肥満児出現で世界最低の実績を誇り、諸外国からは「日本の長寿国家は学校給食に原点あり」とまで、言われるようになってきました。

2005年に制定された食育基本法と栄養教諭制度のスタートで、食と健康を学び世界の食文化を知り、健康に生きていく基本行動と知識を身につける教育がいま、確かに根付いてきました。その実情を知ることで人それぞれが健康を考え、100歳時代に近づいていく状況を改めて認識しましょうというのがこの講演の狙いでもありました。

最後に、こんなに栄養管理ができた美味しい給食になった最大の功績者は誰か、質問しました。

学校給食をここまで進化させた最大の功労者は誰でしょうか？

1	栄養教諭
2	調理員
3	児童・生徒
4	生産者
5	保護者
6	一般教員
7	自治体
8	その他

正解は3の児童・生徒です。子どもたちはまずければ食べません。学校給食での食べ残しは献立を作り調理している栄養教諭と調理員の最大の課題になっています。美味しく食べて完食すれば、調理場だけでなく保護者も生産者も学校関係者はみな喜び、国民全体の健康保持にもつながっています。

最後の問いかけの内容と正解は、聴者の皆さんにも意外感があったようで、ここで学校給食の理解度がさらに高まったように感じました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 6

2024/04/24

初めて知ったシンガポール歴史の真実

4月22日に筆者は初めてシンガポールを訪問しました。これまで何回も行くチャンスがあったのに、この小さな島国に行くことはできなかったのも、いわば憧れの地でした。シンガポールに特に興味があったのは、教育・研究施策がしっかりしており、科学技術の研究開発でも常に世界の上位にランクされている優れた施策を展開していることにありました。大学ランキングでも、常に日本の大学の上を行っています。



それともう一つ興味の対象は、太平洋戦争中、マレー沖で日本陸・海軍の攻撃で撃沈されたイギリスの戦艦プリンスオブ・ウェールズと巡洋艦レパルスの歴史に触れたいという思いもありました。2隻の戦艦撃沈の報告を受けたチャーチル首相が、言葉を失ったと言われていました。シンガポールは、大英帝国にとって難攻不落と言われたアジアの一大拠点だったのです。それを10日あまりで日本軍に降伏し、チャーチルはここでも「英国軍の地上最大の降伏だ」と語ったということです。

船から上陸・訪問する前日、船内で「昭南島～日本軍占領下シンガポール」というタイトルで野平晋作さんの講演会がありました。船の中では最も大きな座席数を持つプリンセスシアターでの開催ですが、筆者はこのとき、別のセッションに出ている都合で、最後の方だけに参加しましたが、非常にためになる講演でした。

会場は満席の盛況であり、最後に日本が未だにシンガポールに謝罪していないのではないかという意見を巡って、会場の人たちが激しく討論している場面に出くわしました。

昭南島とは、シンガポールをイギリスの占領・統治から奪い取った日本軍が命名して使ったこの地の名称です。シンガポールの歴史をほとんど知らなかった筆者は、イギリス統治から日本統治へ、そして戦争に負けて再びイギリス統治に至った歴史的な経過と、日本軍の侵攻時に行った現地の抗日義勇軍に対する攻撃と、民間人も巻き込んだ抗日華僑殲滅作戦の虐殺行為などを知って驚きました。

先進的で豊かな国になったシンガポール

シンガポールに足を踏み入れて見ると、この国の先進的な豊かさを肌で感じました。建物が瀟洒であり、働く人々の仕草と表情が垢抜けしていました。店頭に並ぶ商品の値段を見ると、日本より物価高かなと思いましたが、デフレ・円安で、もがいている日本の現状がこの数字でも分かりました。

ただ、街を走っている車のメーカーは、日本車が多く目につき、続いてヨーロッパ車、そして韓国車と続いていました。

世界の遺産である植物園



シンガポールの世界的に有名な植物園は、管理が行き届いた素晴らしい規模と展示内容でした。世界の各地域の植物コレクションが約 6 万点展示されており、最大の観光スポットです。本来なら 1 日ばかりで見学する場所でしょうが、こちらは 1 時間足らずの駆け足で回る「爆走見物」でした。

川船に乗船して川を上下するクルーズに乗りました。川風が心地よく、両岸に並ぶ新旧バランスよい景観もいい感じでした。疲れた足を休ませるためにお茶をしているとき、何の脈絡もなく、太平洋戦争のシンガポール戦を思い出していました。

筆者の知識は若いころに読んだ記録、伝記ものなどに限られていますが、日本が太平洋戦争に負けたきっかけは、シンガポール戦の勝利と戦艦プリンスオブ・ウエールズ、レパルスの撃沈勝利にあったという皮肉な史実を思い出しました。シンガポールで勝ったことが、あろうことか太平洋戦争で負けた原因になったのです。

戦艦撃沈の勝利では、日本海軍の海上からの戦闘機爆撃が有効だったことを示したもので、アメリカはこの戦況にいち早く目をつけました。戦艦や空母を撃沈するのは戦闘機爆撃が有効であると確信し、ミッドウエー海戦でこれを実行して大戦果をあげたということです。

それから戦況は急激にアメリカ優位に傾き、日本の敗戦に至ったということでした。日本は戦艦大和に代表されるように巨艦主義にこだわり、近代戦への研究が足りなかったのです。科学技術で劣等国家だった日本が、今なお政治の世界では科学音痴が続いており、国家としての限界を見るような気持ちです。

旅行で訪問した国に足を踏み入れると、過去の史実を思い出してしばし感慨にふけると言うことは誰にでもあることなのではないでしょうか。船で一緒になった人々と会話をするうちさまざまなことを聞いて、何も知らないできた自分に気がついて驚くことがあります。しかしそんなことは誰にも言えず、自分だけにしまい込んで船に戻ってました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 7

2024/04/25

オプションツアーの選択

今回の PEACE BOAT117 は、105 日間に 21 か所の港に停泊します。すでに中国の深圳、シンガポール、マレーシアのポートクランの 3 か所に停泊し、乗船客の多くが下船して見物に出かけました。PEACE BOAT では、乗船客の見物・見学の要望に応じて、多くのオプションツアーを用意していますが、そのコースが 1 つの停泊地で 10 個以上あることもあり、選択に迷ってしまいます。

マレーシアのポートクランに停泊したとき、同国の首都、クアラルンプールにバスで往復するツアーもありましたが、筆者は急きょこのツアーをキャンセルして、港に隣

接するポートクランに行くことにしました。首都の様相は写真などで見ると、近代的なビルが林立し、いかにも国際都市の景観ですが、それよりも港に近い地区にあるインド系住民が多いポートクランという観光地域を見学することにしました。

オプションツアーの直前のキャンセルは、50%の払い戻しになりますが、一生に一度しか来ない都市や地域を見るためには仕方ない選択です。キャンセルして、ポートクラン地域を往復するバスコースに切り替えました。これが筆者の思惑取りの見学になりました。

インド系住民の作った観光地域

巨大なモスクに隣接する駐車道路でバスを降りて見学に出かけました。大きな通りの両側の長い長いアーケードにびっしりと商店が並んでいます。住民はインド系の人々であることは一目で分かります。

店舗の入り口付近には申し合わせたように店の男女従業員が並んでいますが、特段、客寄せする様子はなく、目が合えば軽く会釈する程度です。客寄せに熱心な他の国とは大違いです。いったいこれで商売が成り立つのだろうかと心配になるほどです。

商店街の半分くらいが女性の衣料品店であり、後の半分は、食料品から雑貨類など多様な品揃えです。

女性専用の衣料品店は、どうみても観光客目当てのお土産屋ですが、どの店もほぼ同じような構えで、同じような商品を陳列しています。これでは、どの店で買い物をするのも同じだなという印象でした。

しかし女性の観光客は次々とハシゴをしながら店に入って物色する光景を見ると、女性が見た目では違った陳列商品になっているのでしょうか。男性専用の店を一軒、発見しましたが、外から見ただけで民族衣装系統の服飾類が多数飾ってあり、見るだけで結構という感じでした。



食品売り場には、多彩な調味料と香辛料が並んでいました

歩き疲れてビールでも一杯と思って気がつきました。回教徒の国なのでアルコール類は販売していません。料理は中華系が多いように見えたが、陳列棚を見るとどれもこれも食欲がわいてこない。結局、大きなスーパーに入って、日本などから輸入した加工食品を買い求め、バスの中で食べることにしました。

この地域は、港町で栄えた観光地域のようなのですが、道路、建築物などの社会インフラは貧困であり、30年前の中国の地方都市よりも遅れているように感じました。どの商店もクレジットカードは使えないキャッシュオンリーであり、大きなスーパーだけがカードを使えました。



外は気温 30 度内外、湿度も高く蒸し暑いのに船に帰るとクーラーが効きすぎて小寒い。そこで婦人用のショールを防寒用にとって羽織ることにしました。これで 1000 円ほどの買い物でした。

隣国ブルネイとの違いにびっくり

筆者は、日本のバイオ関係の企業が進出した隣国のブルネイに行ったことがあります。ブルネイはマレー系の人たちで人口 41 万人の小さな国ですが、石油・天然ガス資源に恵まれた豊かな国になっています。ホテルや商店の従業員の服装やたたずまいは、先進国とほぼ変わらず、垢抜けした人々でした。

この国も厳しい禁酒国であり、アルコール飲料はごく限られたレストラン、しかも夜だけしか飲めません。国民は豊かな生活をしており、現地に進出している日本の商社や企業の人たちは「国が豊かなので国民は働かない。この国の発展は期待できない」とも語っていました。

石油資源が枯渇した時に備えて、政府は次世代産業育成のために外国産業の導入と育成に力を入れているということですが、肝心の国民が働かないというのですから、発展は無理という見方も当たっているのでしょう。

隣国同士なのにかくも違う文化が、それぞれの伝統と民族の中に形成され、存在していることを見て、世界の広さを感じた時間でした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 8

2024/04/27

インド洋の日の出

船の朝は早い。午前 6 時からエアロビクスが始まり、アスレチックジムがオープンして早くも、ランニングマシンに精を出している人を見かけます。

この日、4 月 27 日の日の出は 6 時 23 分です。12 階のプールを取り巻くデッキには大勢の乗船客が集まってきます。体操の前に日の出を拝み、この日の一日が始まる気分になります。



船上では毎日、企画・イベントが満載

1300 人の乗船客に退屈感を与えないために、多くの企画、イベント、カルチャー
スクールが朝 6 時から夜 11 時まで、10 か所の会場で進行していきます。最も大
きな劇場型のプリンセスシアターでは、午前と午後に映画が上映されており、この
日は「日本人の忘れ物 フィリピン中国の残留邦人」、「ナイル殺人事件」が上映さ
れ、映画の合間に高橋和夫さんの「カザと紅海」という講演会がありました。



日の出とともに始まるラジオ体操

船上では毎日、企画・イベントが満載

1300 人の乗船客に退屈感を与えないために、多くの企画、イベント、カルチャー
スクールが朝 6 時から夜 11 時まで、10 か所の会場で進行していきます。最も大
きな劇場型のプリンセスシアターでは、午前と午後に映画が上映されており、この
日は「日本人の忘れ物 フィリピン中国の残留邦人」、「ナイル殺人事件」が上映さ
れ、映画の合間に高橋和夫さんの「カザと紅海」という講演会がありました。



中央の空間を取り巻くようにヨガ教室が行われますが、連日、大盛況です

人の集まり具合を見ていると、ダンス教室はほぼ確実に盛況です。社交ダンスを始め、サルサ、ベリーダンスなど若い世代から年配者まで誰もが楽しめるようなプログラムになっているようです。船に乗っていると運動不足になりがちなので、体を動かすプログラムがそれなりに用意され、参加者もまた集まってくるという感じです。

乗船者が自主的に企画して呼びかける企画ミーティングや各種の教室も大きなスペースを適当に区切ってそれぞれが開催しているので、筆者もいくつかに参加して見ました。これまでの寄港地での旅の思い出を語り合うサークルでは、深圳でカードが使えず食い逃げ寸前で中国の友人に助けられた失敗談を披露してうけました。

船内のバス・トイレ事情

船の中で3ヶ月も過ごすので、乗船する前に多くの人から日常生活の有様を聞かれましたが、体験前ですから答えようもありませんでした。生活する部屋もビジネスホテル並みということだけで乗ってみるまでは一抹の不安感がありました。



狭い空間ですが、特段の不都合もなく使っています



部屋に案内されてみると、15平米ほどの部屋に大きな窓付き、ダブルベッド備えの部屋で、洗面台付近のアメニティは簡素で何もありません。バス・トイレもそれな

りのものです。ただバスタブではなくシャワーであり、狭い空間ながらお湯の温度は十分であり水勢もかなりのものです。就寝前や起床直後にシャワーを使う習慣はなかったのですが、これに慣れてしまうとお風呂は忘れていきました。

トイレは事後洗浄(いわゆるウォッシュレット)ではない昔ながらの様式です。30年近く使い慣れてきた洗浄トイレでない、昔ながらの自分で始末する様式に一抹の不安がありました。この解決法をほどなく発見して無事、乗り越えました。

子ども時代から慣れていたトイレの後始末、トイレットペーパーで始末するあの様式からおさらばして洗浄トイレに慣れてしまったので、昔を思い出して「挑戦」しますが、これが不安感一杯でなかなかうまくいかない。終わった後、シャワーを使って念入りに洗うよりない。しかし毎回、こんなことをやるのも面倒なのです。

ところが、レストランやエレベーター付近には必ず、誰でも使えるトイレがあります。点検してみるとここのトイレは洗浄式になっています。どう見ても日本のメーカー品と同じに見えるので不安はない。テストの状況も OK となり、それからは毎日こちらに出張して用を済ましていました。誰も使っていないのだろうかと思うほど、いつでも空いていました。



豪華なベッドと大きな窓は、ビジネスホテル以上の部屋でした

お洗濯は楽ちん外注

国内での出張時の洗濯物は、お風呂に浸かったときに簡単に水洗いしてハンガーに下げる。これがいつもの筆者のやり方でした。船でもそうなるだろうと想像してきましたが、ここでは「ランドリーバッグ」なるものがあり、何でもかんでもこの袋に詰めて出すと、1回、800円で済みます。

洗濯に出した個数ではなく、洗濯物の体積になるので、袋にぎゅうぎゅう詰めにして出しても800円。詰め込めば、それだけ割り得になるという訳です。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その9

2024/04/29

船内で PCR 陽性者が出る

レストランは、5階、6階、14階とあり、5階が和食系統、6階が洋食風、14階はいわゆるバイキング方式で好きな料理をトレイに載せて思い思いのテーブルで食べています。

5階と6階は、正式なレストランのしきたりがあり、男性なら基本的に襟付きシャツ、スーツ着用が好ましいとされています。Tシャツ、サンダルは御法度であるが、まあ普通の服装なら文句は言われない。

14階のbuffetは、どんな服装でもOKのようで、若者たちは自由な服装で歓談しています。知らない同士で同じテーブルに着くと、自然と食べながらの雑談となります。口火は「どちらから参加ですか」となる。住んでいる場所や都市を聞いてくるのだが、意外と東京からと言う人には出会わない。

そんな雑談のおりに「船内でコロナが出たらしい」という話が出てきました。コロナと言っても変異株なので、あのパンデミック騒動となったコロナウイルスではなく、

風邪症状で収まるものでしょう。PCR 検査で陽性と出た人のようですが、一応、隔離したようだともしう。

乗員スタッフも入れると2000人ほどの人が、巨大なビル構造の中にいるので、言ってみれば巨大な培養器の中にいるようなものだろう。赤道を通過したあたりだから海上の気温も湿度も高い。船内はエアコンで快適な環境になっているが、一日に一回くらい、海風を全艦に入れて中の空気を全とっかえという訳にはいかないのだろうか。乗船客はいたってのんきな会話をしており、コロナウイルスの威力もほぼなくなってきたようである。



船はいまセーシェル島に向かってひたすらインド洋を航海しています。寄港地がな

いから毎日、見渡す限り海を見て過ごすよりない。マレーシアのポートクランを出てから1週間、ひたすら海上を移動する。地球の天体位置も海図も満足になかった大航海時代の船乗りたちは、どんな気持ちで毎日を過ごしたのだろうか。

そんなことを考えながら、屋上デッキの長椅子に身を伸ばしてぼんやりしているとき、誰かが「あれは何だ！」を叫んだので皆が一斉にユビ指す方向を見ると、巨大な虹の柱がインド洋に架かっている。スマホ撮影が始まり、ひとしきり自然の雄大さをこの目で見て誰もが満足した様子でした。

PEACE BOATで世界一周の旅—その10

2024/05/02

世界で最も美しい海のセーシェルに寄港

インド洋をノンストップで5日間も航海していると、そろそろ陸が恋しくなります。海が時化になると巨船といえども揺れが半端ではありません。船内の廊下を左右によろめきながら、壁伝いの格好で歩いています。

そんなとき、水平線の彼方にかすかな島影が見え始めたときには、嬉しくなりました。徐々に近づいてきた島の様子を見ながら、手元に用意していたセーシエルの歴史と自然に眼を通し始めました。



ところがこの頃から扁桃腺に炎症を起こし始め、熱はないものの痰が喉に絡み始め、咳もよく出てきます。船内の多くの方が似たような症状をしており、マスク姿が急に増え始めました。筆者も室外に出るときはマスク着用ですが、気分は特段、悪くありません。船内の診療所は異変を訴える乗船客で満杯だという噂も聞きました。

風光明媚とはこのことか

セーシェルに接岸を始めると、海岸線の風景が徐々に手の届くところまで迫ってきました。いかにも南洋の植物相らしい、うっそうとした緑が豊かに茂っており、大きな風車はその光景を引き立てるように回っています。甲板で絵はがきになりそうな風景を見ながら、接舷の様子を見ていました。



この島を取り巻く深いブルーの海は、洋上から飽きるほど見てきましたが、島を縁取る緑の茂みと美しい海岸線は、数千万年前からの固有種で独自の植物相をつくってきたとのこと。セーシェル政府が特別に保護していると言うだけあって情緒的

光景として見ていました。ヨーロッパからの観光客が多いというセーシェルを引き立てていることが分かります。

喉の異変でツアーをキャンセルして散策

上陸して一日観光で植物園などを見学する、バスツアーに申し込んでいました。しかし翌日には大事な船内講演があるので、症状を悪化させてはと考えた末に、断腸の思いでツアーをキャンセルし自室で静養することにしました。

そうは言うものの、接舷して次々と上陸した乗船客がツアーに出て行く姿を甲板から見ているうちたまらなくなり、上陸して港の周辺を散策することにしました。シダ類の目立つ植物景観と南洋の鳥たちが、セーシェルにいることを印象づけてくれます。ああ、巨大な亀の公園に行きたかったなあ、などと思いながら散策していましたが、それにしても人の姿が少ない。商店やレストランは軒並みクローズです。

思わず、今日は日曜日かなとカレンダーを確認したほどですが、メーデーの休みと分かり、ツアーの人々はどうなったかと思いながら、ただ一軒オープンしていたスーパーで軽食を買い込んで船室に戻りました。

日本人はやっぱりお風呂です

汗だくになって船の戻り、思いついてサウナに行くことにしました。最上階の下の12階にサウナがあり、隣接してジャグジーと小型の円形プールがあります。プールは別に長さ15メートルほどのコースプールがあり、まだ未体験ですがそろそろ行ってみたいと思っていました。



上が小型円形プール。下がジャグジープールで、水温 28 度から 30 度くらい。ジャグジーは水温 38 度ほどで、ぬるめの風呂程度。いつまでも入っていたくなるような快適さでした。

サウナをたっぷり使って汗を流し、誰もいないジャグジーで写真だけ撮って帰りました。



PEACE BOAT で世界一周の旅—その 11

2024/05/03



イベルメクチンの真実を知らない人が多い

2015 年、大村智先生がノーベル生理学・医学賞を授与されたイベルメクチンについて、食事の際にテーブルが一緒になった方々に、それとなく聴いてみました。半分以上の方が「知らない」という反応でした。これにはびっくりしました。コロナ感染症がパンデミックに指定され世界が恐怖におののいていたころ、インドなど世界の多くの国々でイベルメクチンを投与して一時のピンチを切り抜けたなどのニュースを知っている方は、1 人もいませんでした。

イベルメクチンとは何か

1975年 大村智博士が、静岡県川奈ゴルフ場近くの土壌の中から発見

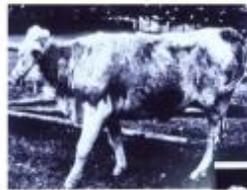
世界中でこの場所にしかない微生物

米国・メルク社と共同で1981年、動物薬として開発

- ・フィラリア症、寄生虫症、動物の皮膚病など
- ・馬や牛のお腹にいる線虫防除



ダニ退治



2015年 ノーベル生理学医学賞受賞

ノーベル賞証書とメダル



イベルメクチンのコロナへの適応外

厚労省は、早い段階からイベルメクチンは、コロナに対して適応外で投与することを認めていました。世界各国で効いている証拠を重視したからです。副作用もほとんど報告がない。臨床試験はどの国でもやっていませんが、その時間がなかったから、緊急的に使ったものでした。

イベルメクチンはコロナに効くという発表 試験管レベルから一挙に臨床へ

コロナが世界中に広がり始めたころ

・オーストラリア・メルボルンのモナッシュ大学の研究チーム

「イベルメクチン」が、新型コロナウイルスの抑制効果ありと発表

薬もない、座して死を待つだけ。それならイベルメクチンを投与してみよう。

主として途上国で始まる。

たちまち論文が80報出てくる。

7

臨床試験と適応外使用

治療薬として認められる臨床試験に合格とは

イベルメクチンを投与したグループ

イベルメクチンを投与しなかったグループ

2つのグループに差があるかどうかを科学的に調べる。

投与したグループに有意に効いていれば、薬剤として認める。

副作用の状態も調べ、最短でも3年はかかる。

適応外とは

すでにイベルメクチンを抗寄生虫の薬剤として求めているが、コロナは対象薬剤となっていない。

しかし、「今回に限り特別にコロナの薬剤として認める。ただし医師と患者が同意した場合で、副作用が出ても、国は補償しない。厚労省は早い段階で適応外と承認した。」

9

インドでは、連日、感染者と死亡者が爆発的に広がっていました。治療薬も予防薬もない。治療装置として人工心肺装置(ECMO)がありますが、これはほとんどの病院にない。コロナに感染して重症化していくことは、座して死を待つようなものだったのです。



途上国など多くの国で臨床治療にイベルメクチンを投与して改善したり、予防に有効だったという論文が多数でていたころです。国はイベルメクチンを治療薬として認めていないが、各国の医師たちはそれを破って投与を始めたのです。

アメリカの医師団体が イベルメクチンは有効と発信

アメリカの呼吸器疾患などを専門にする医師団体が、イベルメクチンはコロナに有効としてwebサイトを設置

FLCCC (Front Line COVID-19 Critical Care Alliance) 議会でも証言

世界中のデータを集め、イベルメクチン投与方法、コロナを巡る科学的データも次々と公開

民間ジャーナル「トライアルサイト」も活動

11

イベルメクチンがコロナ予防・治療に効果があることをアメリカの臨床医たちのグループ(FLCCC)がネットで発信し、投与の仕方まで公表しました。こうして世界中でイベルメクチンがコロナ予防・治療、後遺症対応策に使われるようになったのです。

イベルメクチンを投与されてきた国と されなかった国の比較

イベルメクチンを住民に投与してきた国(32カ国)の
コロナ感染症結果 (人口は国連人口基金)

	感染者数		死者数	
	累計	10万人当り	累計	10万人当り
32か国総人口				
9億5300万人	128万人	134.4人	2万1259人	2.2人

イベルメクチンを投与していない国(22カ国)

	感染者数		死者数	
	累計	10万人当り	累計	10万人当り
22か国総人口				
3億5,800万人	340万3,086人	950.6人	10万4,826人	29.3人

(2021年5月16日現在、いずれもWHOの統計から算出)

世界の動きを知らない日本人

こうした世界の動きと日本の対応については、船に乗っている方々にそれとなく聞いても、ほぼ誰も知りません。そこで筆者は、日本でイベルメクチンのコロナ予防・治療に使われなかった実態を、事実だけ示して話をしました。50人ほどの方が会場に来てくれましたが、1時間20分の長時間を聞いていただき、終わった後も多くの人に囲まれて、質疑応答を行い、そのままランチへと流れ込んで行きました。

日本はどうだったのか

日本は、イベルメクチンはすでに疥癬症の治療薬。
今回は特別に適応外としてコロナの治療薬と認め、保険対象とする

ただし、医師と患者が同意した場合のみ。副作用は双方で解決する。国は関与しない。全国の多くの勇気ある医師がイベルメクチンを処方した。

国も衆院予算委員会で首相、厚労大臣が「適応外として使用OK。イベルメクチンを服用して自宅で静養する方法もある」と答弁。



21

講演をした本当の狙いは通じた

イベルメクチンのコロナ予防・治療について、世界で展開された事実と日本政府と厚労省がとってきた対応策について事実だけを講演で話をしました。聴者の皆さんは、ほぼ何も知らなかったことに大変びっくりされており、日本政府が国会で答弁していた内容も、単なるポーズであり、実際には何も行動を起こすことがなかったことにもびっくりされていました。

筆者の講演の狙いは、こうしたことを暴露するためではなく、過去の事実を総括して歴史的な事実を検証することをしなければ、史実は曖昧になり責任は誰もとらない国のままになっていくことを、みんなで考えるべきという課題を提起することでした。

講演の締めくくりでもこれを強調し、公文書管理のずさんさが行政の責任の所在を曖昧にし、進歩のない国の業態がいつまでも続いていくことを強調しました。これにも講演終了後にきちんと受け止めていただいた方々があり、是非、次のテーマを聴きたいという希望までいただきました。

イベルメクチンの未来

イベルメクチンの全貌はまだ分かっていない。

- ・コロナ感染者の副作用改善に役立っている
- ・抗がん剤開発に応用されている

アジュバント (Adjuvant) 効果の仮説

薬物の効果を高めたり補助する目的で併用される物質・成分。

- ・**ノーベル業績の先に新たなノーベル賞がある**

イベルメクチンとコロナについての世界的な総括は、まだ終了していません。この総括研究では、イベルメクチンを発見した日本が最も進んでいる国の一つであり、発見者の大村智先生とその共同研究者らの業績は、国際的にも高く評価されています。

帰国したらイベルメクチンについての総括討論を、認定 NPO 法人 21 世紀構想研究会でもしなければならないと強く思いました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 12

2024/05/04

囲碁・将棋大会への参加

日本人の娯楽の中でも古くから伝統を引き継ぐ囲碁・将棋ですが、船内でも娯楽室に碁盤・将棋盤が並んでおり、いつでも相手さえいれば楽しめます。隣接して麻雀卓も 9 個も並んでいます。

5 月 3 日の憲法記念日には、船内の囲碁・将棋大会が開催され、そこに参加しました。筆者はどちらもたしなみませんが、この数十年、どちらもやったことがありません。多少、腕に自信のある将棋の方に参加することにしました。





将棋大会に参加してきた 6 人の女性

行って見て驚きました。囲碁の参加者は、たった 8 人、それに対し将棋は 22 人もいました。将棋界のヒーロー、藤井聡太 8 冠ブームを見た思いですが、さらに驚いたのは囲碁の女性参加者が 1 人に対し、将棋には 6 人もの女性参加者がおり、その中に外国人の若い女性がいたことでした。

昔から囲碁は女性向き、将棋は女性には無理という話がありました。理由は、将棋は切ったはったのあげくの勝ち負けなので、激しい闘いになり女性には向かないというもので、筆者もてっきりそう思っていました。



女性観戦者が目立った将棋大会

しかし将棋のプロの世界では女流プロの活躍はめざましく、近年は女流プロのトップクラスは、男性棋士と同格で闘える女性が出ています。ブームとは恐ろしいと思いました。勝負はトーナメント方式ですが、筆者は問題なく準決勝まで進みました。2回戦で女性とぶつかりましたが、これもなんなく退けての準決勝進出であり、ま、優勝も可能かなと自信らしいものがでていました。それが問題でした。

あまり考えずにすすいと指し始めた準決勝ですが、序盤を過ぎたところで明らかに不利な局面になっていることに気がつきました。お相手は後期高齢者かなと思えるいわば「同輩」に見えたのも緊張感を生まなかったのです。振り飛車戦法の定番でしたが、久しぶりに指したので、途中で昔習った定石を思い出してみると、明らかに術中にはまっています。作戦負けです。お相手はやにわにスマホを持ち出し、盤面の写真を撮っています。

ははーん、敵の投了譜面の撮影か。こうなると一気に戦意失墜です。潔く「負けました」と言って投了しました。取り囲んでいた人たちがあっと驚き、一斉に声が上がりました。勝負はこれからと思っていたのにいきなり投了です。普通に指せば、不利が拡大するので、どこか勝負どころで仕掛けて逆転を狙えば戦えないこともあります。得意の逆転劇かあと心の中で苦笑し、しかしお相手の方に花束を投げるのもいいかなと思って投げました。

局後の感想戦になれば、講評するプロ棋士の解説が目に見えていますので、別のセッションに参加するふりをして早々に退散しました。悔しさがあったのです。翌朝、偶然に朝食のテーブルに将棋大会を主催したプロの高田尚平・棋士と同席となりました。「昨日はどうも・・・」と曖昧な笑みで挨拶すると、高田先生も覚えていて「あれは相当の棋力がないと投げません。お強いですねえ」とヘンな褒められ方をされました。「観戦していた方々は、なんで投げたのか分からなかったでしょうが・・・」と言ってくれました。その言葉で、なんだか勝負に勝ったような気分になったのですからおかしなものです。

若者が夢と希望も持つこととは何か

将棋大会を早々に退散して「若者が夢と希望を持てる社会とは」というセッションに参加しました。タイトルから若者が多いだろうと思っていたら、シニア階層が多いので意外感がありました。乗船客はほとんどがシニアなので当たり前の現象です。5人の若者がそれぞれ夢を実現する体験を語り、フロアのシニア層からコメントや体験談が出てきました。



若者は、自由に学びたくて外国へ行った体験話、女性のジュニア層といっても30歳代ですが、苦労しながらもやりがいのある保健教師や留学体験者の話が続きました。フロアからのシニア発言者は、男女とも教師OB、OGであり、教師という職業に誇りを持ちそれなりに評価され、リタイア後も社会貢献で活動している方であり、改めて教師というのは聖職とよばれるにふさわしい職業だと感じました。

そこで感じたことを端的に一つだけ言うと、若者の夢と言っても、夢は与えるものではなく自ら行動を起こして自ら摘み取るものだと気がつきました。つまり、自ら判断して行動力を培うように教育することが教師の役割ではないか。教えるのではなく、気づかせる。その気にさせる。判断力を磨かせる。これが教師の本務の重要な部分ではないかと思いました。



そんなことは当たり前と言われそうですが、門外漢が感じた素朴な感想なのだろうか。このテーマについて、船には多数の教員経験者がいるので、これから話題が尽きないなと思いながら構想研究会でのテーマになると思い始めていました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 13

2024/05/05

船の揺れと船酔い

5月1日、世界一美しい海に囲まれたセーシェル島を出港してからインド洋をひたすら南下し、5月8日まで1週間ノンストップの洋上の旅が続いています。このところ海は時化ており、連日、船の揺れ方が大きくなっています。

陸にいるときに不意に地震に見舞われたときと同じような感じの揺れが、ほとんど切れ目なく続いているので、よくこれで船酔いにならないものだ和我ながら感心しています。廊下を歩くとき、誰もがよろめいて歩いており、14階の広々とした

バイキングスタイルのレストランに行くと、皆、トレイに料理を取り分け、よろよろと危ない歩行でテーブルにたどりついています。体のバランスをとっている器官が船の揺れに同化して、酔わないようになってしまったのでしょうか。

筆者は、ひどい船酔いにあった体験があるので、信じられない気持ちです。それは東京の南方約 930km にある火山島の西之島で突然、火山活動を再開して噴火し新島を作った 1973 年のことです。その後火山活動は収まったので、新島に接岸して「決死の取材上陸」をしたことがありました。

150トンの漁船をチャーターして、日本テレビの取材班と一緒に上陸し、1時間の制限時間内に駆け足で見て回りました。取材は成功しましたが、船の往復、ひどい船酔いに見舞われ、3日ほど食べるものを受け付けませんでした。その体験があったので、今回は戦々恐々でしたが、7万トン超級の巨船は、あっさりと危惧を払拭してくれました。

戦艦大和を思い出させるパシフィック・ワールド号

以前にも書きましたが、PEACE BOAT クルーズの巨船・パシフィック・ワールド号は、あの船艦大和と同規模であることに気がつきました。軍艦と客船という違いがあり全く違った目的で造船された船ですが、乗船してみると軍艦に乗って闘った軍人たちのことを思い出させました。

パシフィック・ワールド号		戦艦大和
就航年	1995年 (2015年に改装)	1941年12月16日
総トン数	77,441	72,800
全長m	261	263
全幅m	32	39
乗員	定員・2419 117クルーズ乗客1500、 スタッフ600	2500 沈没時死者2740、 生存269
建造国	イタリア	日本

あの戦艦大和は、日本が総力を挙げて建造してから僅か 3 年 4 ヶ月後に、連合軍の総攻撃を浴びて坊ノ岬沖海戦で沈み、戦死者 2740 人、生存者は 269 人という痛ましい戦禍を残しました。甲板に立って、荒くささくれだった波頭を眺めながら、戦艦大和の悲劇を思わずにいらませんでした。

朝食時間と団らん

朝は6時からレストランが开店して、朝食が始まります。乗船客は高齢者が多いので、この時間になると待ちかねたように続々と人が集まってきます。入り口に立っているスタッフの責任者が、先着順にテーブルに合い相席で座るように差配します。

知らない同士が 5 人、6 人同じテーブルの席について朝の挨拶をしながら、その日の天気、海上の様子や各自の体調の具合などを話しながらの朝食は、なかなか楽しいものです。

朝食メニューは 5 階レストランが和食、6 階レストランが洋食の決まったトレイになっており、ほかに 14 階ではバイキング方式で和洋料理が多数並び、各自自由に盛り付けて食べられます。

この日の和朝食のトレイは、次のような内容でした。



ご飯は、白ご飯、おかゆ、五穀米ご飯から選びます。

牛乳はホットか冷たいものかチョイスできます。

温卵、納豆、厚揚げ煮物、焼き魚、海苔、冷や奴、お新香、みそ汁、おかゆまたはご飯、ヨーグルトそれに好みの果物ジュースと果物、牛乳がつきます。ほどほどの分量なので、完食する人が大多数です。よくできた献立であり、煮物やみそ汁の中身、魚の種類が日ごとに変わっています。毎日、ほぼ似たような献立ですが、日本の伝統的なメニューなのか飽きが来ません。洋食については、また別の日に紹介しましょう。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 14

2024/05/07

天空に広がる満点の星に感動

明け方4時、目覚まし時計に起こされて 14 階屋上に出してみました。真っ暗闇を蹴散らすように白波を立てて船が航行しています。船上にいることを意識した瞬間、周囲が不気味にうごめいている気配を察し、目を凝らしてみると甲板の手すりを取り囲むように乗船客が群がっていました。この夜はみずがめ座 η (エータ) 流星群の観望会でした。

皆、顔を上に向け、カメラを構えている人もいます。筆者も手すりに割り込み空を見ました。天空を覆うおびただしい星たちを見て、ああすごいなあと感動しました。自宅から空を見ても似たような星空を見ているはずですが、暗黒が広がる洋上の星空は格別なのでしょう。あの輝く恒星たちはいつから存在したのだろうか。今から2億年前の恐竜たちも見ていたのだろうか。

エータ流星群は、ハレー彗星が宇宙に残した塵が大気圏に突入したとき、流れ星となって観察されるのです。南半球では1時間で最大 50 個も流星群を観察されるという触れ込みです。

突然、ああーという歓声が艦橋に流れました。空を横切るように光線が尾を引いて消えていきました。見た、見たという声があふれ、筆者も皆と一緒にその瞬間を喜び合いました。写真に撮影することはできませんでしたが、空の写真を掲げます。この夜は、南十字星も見ることができて大満足の観望会でした。



こどもの日のイベントを見物

小学生以下の子どもたちが5人乗船しており、5月節句の人形とひな祭りの祭壇がイベント開催スペースにセットされ見物する人たちで溢れました。

船上のイベントは、何をやっても楽しいようです。





着物の着付けコーナーは、多数の老若男女が集まっていました。

図書コーナーに置いた書籍がいつもない！

このイベントスペースの一角に、図書コーナーがあって、乗船客が持ち込んだ書籍類が並んでいます。どんな書籍でも勝手に置き、勝手に持参して5日以内に読んで返すルールです。乗船した直後は、書棚が満杯に埋まっていたのですが、いまは写真のようにガラガラです。



筆者も21世紀構想研創設 25 周年記念誌の「25 年間劣化し続ける国家と組織」、筆者の著書「大村智 2 億人を病魔から守った化学者」(中央公論新社)、「沖縄返還密使・密約外交 宰相佐藤栄作、最後の 1 年」(日本評論社)、大村智先生らとの共著「イベルメクチン 新型コロナ治療の救世主となり得るのか」(河出新書)の4冊を置きました。いずれも置いた翌日には棚からなくなり、ときたま点検しますが戻っていたことはありません。間断なく次々と読まれているのでしょう。嬉しい現象です。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 15

2024/05/10

アフリカ南東部の大都市ポートエリザバスに接岸

セーシェル島からインド洋を南下すること5日間。茫洋として海を毎日見続けていましたが、アフリカの最南端に近いポートエリザバスの遠い影が見えてきたときは、ついにアフリカに来たという実感が沸いてきました。現役時代、一度だけ生きている化石魚と言われるシーラカンスの取材でアフリカ沿岸に行くため、何種類もの予防注射とワクチンを打って準備していたことがありました。直前にビザの関係で中止になって以来、アフリカに行く機会がありませんでした。

ポートエリザバスは、近年、観光都市として急速に開発されており、動物保護区や国立公園が整備されている都市です。港に接岸すると、おびただしい乗用車が整然と並んでいることに度肝を抜かれました。それは南アフリカ共和国(南ア)から輸出される自動車であり、この国はアフリカでも随一の工業国でもあることを思い出しました。

余裕ある風情を感じた実物の動物たち

接岸した翌日は、港町を散策して様子を見ましたが、最大の楽しみは動物保護区の見学でした。翌日朝早く、船からバスに乗り換えて1時間半、目指したプンバ・プライベート・ゲーム・リザーブ(Pumba Private Game Reserve、ここでは プンパ動物保護区と表記)は、総面積7千ヘクタールという途方もなく広い動物保護区でした。バスを降り、ドライバーをいれて10人乗りの4輪駆動の大型ジープに乗り換えました。

洒落たロτζジ風の建物から出てみると、背の低いブッシュが生い茂る起伏の富んだ丘陵地が際限なく広がっています。樹高の高い樹木はなく、四方八方見晴らしのいい丘陵地帯です。

私たちの眼前に最初に出てきたのはイボイノシシでした。見る間にヌーが出て、シカ類が出てきました。いずれもテレビの番組で見た動物たちですが、図鑑も持ち合わせていなかったので正確な種名は分かりません。



そこへいきなり、ブッシュの陰から大型のサイが2頭出てきました。おお、という歓

声が沸きましたが、サイは何事もないように草をはんでいます。動物園で見るサイよりもずっと大型に見えているのはなぜなのか。動物園のサイよりも大きいわけがありません。そり上がった見事な角が大きく見せているのでしょうか。

ドライバー兼案内人によると、サイは眼の機能が低く耳と鼻が優れているようで、地面の草しか食べないということでした。ジープからの距離は20メートル程度で、確かに地面の草だけ食べている様子を飽きるほど見せてくれました。

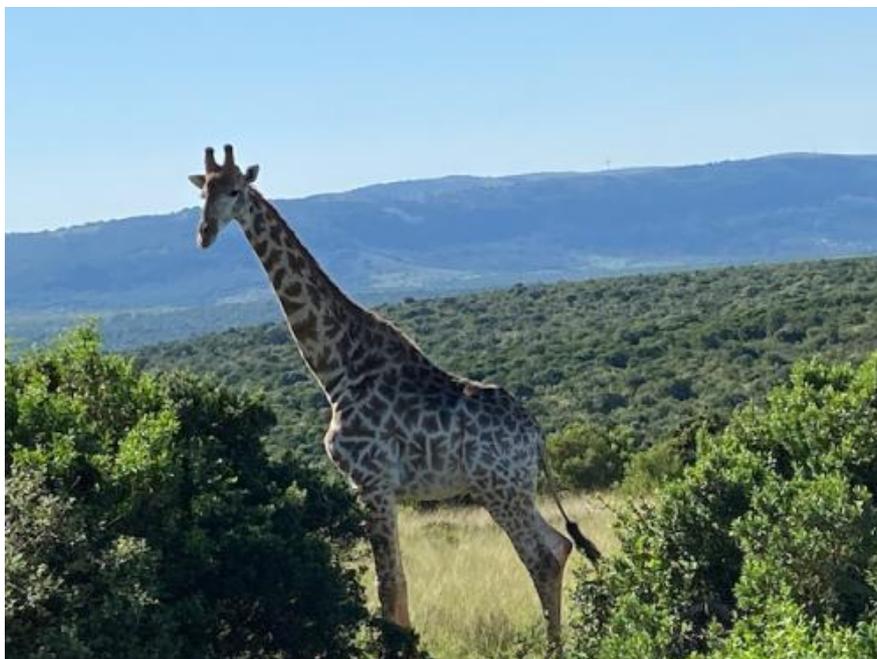
ゾウが出てキリンも出てきた

ジープは、うねうねと不規則に続いているでこぼこ道をゆっくりと進んでいますが、左右、見晴らしのいい景観なので同乗者はみな、左右を見渡しているのですが、ゾウが出てきたのは、すぐ近くのブッシュからでした。



巨像という言葉がありますが、やはり大きく見えます。数十メートル先で灌木の若い葉を鼻でうまくたぐり寄せてゆっくりとはんでいます。アフリカ象の誇る大きな耳をパタパタとあおりながら、悠然と枝葉を食べている姿は、動物園では味わえない生活の余裕らしさが見えています。彼らは餌を食べることが仕事ですが、この地

では際限なく餌が広がっているのですから、余裕があるのは当たり前という野暮なことを思ったりしたとき、やにわに「キリンだ！」という同乗者の声に、ジープはゆったりとその方向に動き出しました。



キリンもでっかいなあというのが第一印象です。この丘陵地では、キリンの首を超える樹木はほとんど見当たりませんから、彼らが一番目立っているのでしょうか。見物していると、どこからともなくシマウマが紛れ込んできました。数頭のシマウマが眼前を横切っていく風景は、アフリカに来たという満足感で満たされます。

肉食獣は出てこなかった

動物保護区とはいえ、やはりお目当ては百獣の王ライオンのお出ましです。これだけ草食獣がいるのですからライオン、ヒョウ、チータなど肉食獣が出てきて眼前で狩りが始まる、というのはテレビの話です。僅か2時間余の見学には無理というもので、それは分かっているけど、ライオンが出てこないかなあと思いながら「見えない?」、「いない?」などと言いながら四方に眼を走らせるのも楽しいものでした。

見学ジープがあちらこちらと走り回っているとき、路上に近い場所で一頭のシマウマがたたずんでいました。微動だにしない姿勢でこちらを見えています。ジープがすれすれの距離を過ぎて動きません。みな「かわいいねえ」などといいながらこのシマウマを眼で追っていました。

ジープが反転して方向を変えたとき、筆者はこのシマウマの左の臀部あたりを一瞬だけ見る機会に恵まれました。その尻のあたりに茶わんくらいのサイズで赤い肉色をした部分が見えました。怪我をしていたのです。見るからに痛々しい肉をさらした色です。この平原でこのような怪我は、肉食獣に襲われときに受けたものしか考えられません。ジープは方向を変えてしまったので、筆者ともう1人の女性以外は誰も見ることはできませんでした。

あのシマウマはどうしたんだろうか。筆者はこの日ベッドに寝付こうとしたとき、しきりにあのシマウマのことを思い出していました。無事に生き延びることができるだろうか。アフリカの大地で出会った動物たちの光景の中で最も印象に残ったものでした。



サファリのロッジで食べたランチはフルコースが準備されており、美味しい料理に大満足でした。

この保護区に生息している哺乳類だけでも47種もいるというのです。私たちが見たのはそのうち10種程度でしょう。ヘビやトカゲ、カメなど14種類がいるし、鳥類に至っては100種類を超えているということでした。

PEACE BOAT が用意しているサファリツアーは8つありました。筆者はそのうちの1つを見ただけなので、他のコースに参加した人たちは何を見たのか。ライオンやカバやチータを見たという幸運に出会った人が出たかもしれませんが、いずれ長旅の合間に聞こえてくるでしょう。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 16

2024/05/12

荒れる合流海域に巨船も翻弄される

PEACE BOAT は、インド洋と大西洋が合流するアフリカ大陸南端の大都市ケープタウンに近づいていきますが、日増しにうねりが激しくなり、船内の移動中に何度もよろめいて壁にぶつかっています。ポルトガルのバルトロメウ・ディアスが、1488年にインド洋への航路を初めて発見したときにも、この海域での難航ぶりが史実として残っています。故国の国王が荒海を乗り切って大陸の突端の岬にたどり着いた偉業を称えて「希望の岬」と呼び、それが地名になったとも伝わっています。

英語では「Cape of Good Hope(希望の岬)」と記載されています。江戸時代に屋久島に上陸した宣教師を調べた役人が、宣教師の持っていた地図に記載されていた外国語から、この岬を「喜望峰」と翻訳し、福沢諭吉がそのまま著書に記載したことから定着したようです。そんなことを調べているうち、船は4時間も遅れてようやく接岸しました。

喜望峰に立つ

船から降りると慌ただしくツアーバスに乗り換え、ただひたすら喜望峰を目指して走り出しました。出発が正午近くに遅れたので、日没前に喜望峰に到着しないと到着してすぐ帰るということになりかねません。途中で遅めのランチを食べてからもひたすらバスは走ります。

アパルトヘイト(人種隔離政策)と闘ったネルソン・マンデラの銅像が立つ市庁舎を車窓から見ながら、ともかくも喜望峰に向かってひた走りました。



ネルソン・マンデラの銅像がある市庁舎のわきを通って喜望峰へ

海岸に押し寄せる波頭が幾重にも白い線を引いて独特の景観を見せるようになります。インド洋と大西洋がぶつかり、複雑な海流を巻き起こしているのでしょうか。泡立つ波頭の模様が際だち、遠くの岩山の突端に小さな灯台が見えてきました。

案内人は、夕方にさしかかっているので、灯台へのケーブルカーの乗るのは無理だと言います。しかしともかくも、ここまで来たという満足感に、顔を車窓にこすりつけながら限りなく広がっている海を眺めました。バスを降りて誰もがまっしぐらに突端まで行き着き、写真撮影に入ります。ついに喜望峰に立ったのです。



この泡立つ波頭の複雑に織りなす光景を、喜望峰沖を初めて通過した海洋冒険家のヴァスコ・ダ・ガマも見たのでしょうか。ケーブルカーは時間がないので無理だとわかり、せめて記念品を買い求めようと売店に殺到しました。しかしここはすでに超満員。それでも喜望峰入りの記念品を買い物かごに入れて、さて会計となると店外にはみ出すほどの行列です。PEACE BOAT からのバスだけでなく、週末なので多くの観光バスが押し寄せています。

帰船する時刻が近づいて来ます。万一、バスが帰船時刻に間に合わないと船は出て行く、乗り遅れた乗船客は一路、陸上を走って次の寄港地、ナミビアのウォルズベイへ回るはめになります。と言うわけで買い物かごに入れた記念の土産類はすべて購入を諦めてバスに戻りました。

グリーン・フラッシュを見る

バスに乗り込む直前、今一度、喜望峰から海水線に沈み行く太陽を眺めました。そのとき上空に向かって放射状に照らしていた赤い太陽の色が褪せていき、一瞬、緑色に変色したのです。同じ光景を見ていた人たちが、一斉に「あっ」と声を上げた次の瞬間、太陽は海水面下に没してしまいました。

この光景を見た人たちがひとしきり、緑の太陽の話で持ちきりです。後で調べたらこれは太陽が昇るときと沈むときに見せるグリーン・フラッシュという光学現象であることがわかりました。

喜望峰沖を沈み行く太陽の直後にグリーン・フラッシュを見ました。しかしシャッターを押す前に消えていきました。



バス道路の脇にいたダチョウの親子

アフリカ随一の工業国の南ア

南アフリカ共和国(南ア)は、日本人ならラグビーの強豪国であることを知っています。この国に来てびっくりしたのは、男女とも体格が並外れて大きいことです。黒人と白人とさまざまな人種で構成されている国ですが、みな優れた体格をしています。

中でも驚いたのは、女性の幅の広さです。背も高いが幅がある。それも半端ではなく、ビーナス像を思い切り横に太くしたような、豊かな胸と偉大なヒップがとてつもない存在感を出しています。一体、これはどう言えばいいのでしょうか。日本的に言えば「デブ」という言葉が浮かびますが、しかし彼女らの行動と動作を見ていると素早く、自然な仕草です。一緒に行った乗船客のご婦人たちも語っていましたが、「どの女性も大きくて優しいのよね」と言います。店員さんもウイエットレスのお嬢さんも、にこやかな笑顔で、優しいという言葉がぴったりでした。



レストランのウェイトレス女性とツーショット。にこやかにカメラに向かってピースポーズを作ってくれました。このような体型をした女性が普通でした。

スポーツ大国と治安の悪さ

国民的に人気のあるラグビーは、ワールドカップ(W杯)に1995年に初参加していきなり優勝。99年には3位、07年には、強豪イングランドを破り2度目の優勝。昨年のW杯で日本が南アに敗れたのは当然の結果だったのでしょ。

南アはラグビーだけでなくサッカーも強く、国民の多く、特に黒人層には大人気だそうです。野球の WBC にも出場しており、一次リーグで敗退するも MLB の主力選手を擁するカナダに 8-11 と善戦して世界を驚かせました。

男女とも大型体格と機敏な動作を見ているとスポーツ大国であることは理解できます。港には輸出する乗用車が大量に並び、豊かな鉱物資源とともにアフリカ随一の工業国であることも分かりました。ところがどうにも理解できなかったのは、治安の悪さです。

PEACE BOAT でも、下船して歩くときの要注意を細かく書き込んでいます。強盗、ひったくり、コソ泥などが蔓延しており、殺人事件も普通に起きているということです。原因は、貧富の差にありそうだし、人種間の確執もまだありそうです。

5月12日朝、船はケープタウンを離れて大西洋に出ました。これから一路北上してヨーロッパ大陸へと向かいます。海上の波は依然として高く、船は揺れ動いています。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 17

2024/05/15

乗船一か月

4月13日に横浜港を出港してから1か月が過ぎました。旅程の3分の1ですから早いものです。今日5月14日は、ナミビアのウォルスベイに寄港中です。

一か月間、船で過ごしてようやく、どこになにがあるかが分かり、目的の場所に迷わず行けるまでになりました。引っ越した新住所の周辺のことがほぼ、大まかに分かってきたという感覚でしょうか。

プールの水がダップン、ダップン・・・

大西洋に出たからは海の波浪も穏やかになりましたが、インド洋と大西洋の合流するあたりは、ひどい揺れが続きました。そんなとき「今日も遊泳禁止だよ」という会話を聞いて、どこのことだろうと思っていたら 12 階にあるプールのことでした。プールも遊泳禁止となり、行ってみると大きな網をかぶっていました。

プールの水の動きを見て仰天しました。ダップン、ダップン・・・とプールの水が大きい波のように揺れ動き、オーバーフローした水がプールサイドに乱暴にあふれ、側溝に勢いよく流れ込んだ水がここでもあふれ、プールに戻ってきています。船の揺れが大きいことは感じていましたが、プールの水の大きな揺れを見て、これは大変な揺れなんだと初めて知りました。これではプールで泳ぐことなど不可能です。

仕方なく同じ階のサウナに入りました。こちらは毎日行くようになり、アフターは泡立つジャグジーで一風呂に入った気分を楽しんできました。サウナに行くようになってから夜中の脚の吊りもなくなり、ひところ、船で流行った扁桃腺の炎症も治まりました。

熱も出ないで気分も変わらず、扁桃腺だけごろごろと痰がからまる炎症を起こしていました。多くの人たちがかかっていたので、この船で蔓延した感染症です。診療所でお薬を処方された人もいますが、大体は自力で回復したようですが、筆者はサウナに行って治しました。

プールが遊泳禁止のとき、サウナに付属しているジャグジーも禁止となり、小型の円形プールも禁止でした。お風呂気分で楽しんでいたジャグジーがないのは不満でしたが、海の荒れには勝てません。

食事のレシピの苦勞を知る

前にも書きましたが、三食すべて 3 つあるレストランのどこかでタダで食べられます。アルコール類は各自負担ですが 5 階と 6 階にあるレストランは、夜になるとフ

ルコースのディナーになります。こちらに行くときは、原則そして男性は襟付きのシャツ着用、女性もそれなりのファッションが要求されていますが、早い話、Tシャツ、サンダル、半ズボン以外は、大体 OK です。



ある日のディナーのメニューです。ここから選んで注文します。

ディナーは前菜、スープから始まってデザートまでフルコースですから横文字と日本語で書かれたメニューから選んで注文します。ディナーには箸はなく、ナイフ・フォーク・スプーンの洋食スタイルです。この料理がなかなか工夫されており、感心しながら食べています。厨房も毎日、同じ乗船客に出すので献立作成には相当な工夫を凝らしているが分かります。





メインディッシュが写真にありませんが、そのうちご紹介します。

14階のバイキングスタイルのレストランは、服装の制限はないので、若者たちはTシャツ、サンダルもいます。こちらの料理も、和食、中華風、エスニック風、インド風など多彩な献立で、飽きさせないで食べてもらおうとする工夫が見られます。

長い船旅、食べることが最大の楽しみと言ってもいいでしょう。ご婦人たちは、三食据え膳付きで、帰国したらどうしようという話題がよく出ています。体重計を見ながらの調整にもかなり難航している会話があちこちから聞こえてきます。

PEACE BOAT で世界一周の旅-その 18

2024/05/15

世界最古のナミブ砂漠に感動

南アフリカ共和国(南ア)の北に隣接するナミビア共和国のウォルビス・ベイの港に接岸されたとの船内アナウンスを聞いてデッキに出て見ました。予想に反して一面、霧がかかっており、肌寒い空気があたりを支配していました。

地球上で最古の砂漠を持つ国と聞いていたのですが、第一印象は意外でした。灼熱の砂漠地帯を勝手に想像していたからです。バスで 40 分ほどで、この国最大のナミブ砂漠に着きました。幹の太い椰子の木に似たずんぐりした樹木が道路沿いに整然と植えてあります。バスを降りると赤茶けた地面がそのまま砂漠の稜線につながっていました。



遠い砂漠の稜線に豆粒ほどの人影が見えます。



サングラスなしではいられない強い太陽光、砂漠のうすい茶色と透き通った青い空が対照的でした

水が流れるような微粒子の砂

砂漠と言っても広大な砂地が広がっているのではなく、砂山の丘陵が見る限り幾重にも連なった景観です。言ってみれば砂で作られた山々ですが、草一本生えていないきれいな砂地の丘と稜線が限りなくつながっています。

筆者は、鳥取砂丘の海岸線の砂地しか見ていませんし、アメリカではユタ州やネバダ州の砂漠を車で通りすがりに見た程度です。名画「アラビアのロレンス」を見ていたので、アフリカの砂漠とはあのようなものだろうと想像していましたが違いました。



広い砂漠の中にたった一か所だけ赤い花が咲いていました。同行者に聞いたらブーゲンビリアということです。なぜこの一か所だけに真っ赤な花を咲かせているのか。その自然の妙に興味を持ちました。

世界最古とうたっているナミブ砂漠は、全く違った印象でした。遙か遠い稜線の上を小さな人影がまるで虫のように移動しているのが見えます。あそこまで行くのは到底無理ですが、それでも稜線に向かって登って見ました。

人が歩いた足跡をたどって登りますが、足もとがふかふかと下に潜り込んでいきます。何の抵抗もなくやわらかい感触で足もとが砂地にとられていきます。危うく倒れそうになって砂地に手をつけて、この砂漠の砂を知って感動しました。

砂と言うよりも柔らかい布地に似た感触が手に伝わってきました。両手で砂をすくってみてその謎が分かりました。両手ですくった砂が、まるで水のように指の間から下へ流れていきます。水に等しい滑らかな感触で下へ流れます。これは砂ではない。

砂粒という感じではなく、滑らかな流動物が抵抗もなく手の平を通過していくという感じです。よくよく指で触って見ると、砂粒のきめの細かさが伝わってきます。数億年、数千万年の時間の中で、この砂たちはまるやかにきめ細かく、まるで水流になるような粒子にされてしまったのでしょうか。草一本生えない秘密が分かりました。こんなに抵抗のない砂では、植物は根を張る根拠が作れないでしょう。



写真の太い幹には枝葉はなく、てっぺんには天に向かった枝が挿し木のように生えています。この樹木は、砂漠地帯の道路沿いに移植されたようで、きれいに並んでいます。しかし太い幹はゴツゴツした固い表皮に見えますが手で触ってみると、あっけないほど砕けしまう柔らかい表皮でした。砂漠に生息する特異な植物に触れた思いでした。

ナミブ砂漠の砂を日本に持って帰りたくなりました。バスの座席に配布したあったビニール袋は、砂漠の砂を持って帰りなさいというサインだったのででしょうか。お土産にここの砂を入れて持って帰れという配慮ではないかと思ったのですが……。

日本の2倍以上の国土に300万人足らずの人口

ナミビアは15世紀末にポルトガル人が上陸した土地でしたが、砂漠地帯であるため関心を示さず、1878年にイギリスがこの国の唯一の港となったウォルビス・ベイを占有するまで未開の土地だったということです。その後、ドイツの植民地となり、今でも往時の風景を残すヨーロッパ風の街並みがありました。

小さな市街地には垢抜けた商店が並んでいましたがバスで通り過ぎただけで、この国とは砂漠だけの短時間の見物で終わりました。



露天で販売する民芸品売り場では、現地人の人が熱心に客引きしていました。



元々はダイヤモンド、ウラン、銅、亜鉛など鉱物資源が豊富で産出量もかなりなものです。ダイヤモンド採掘で存在感があったそうですが 2000 年以降、ダイヤモンド以外の鉱物生産量が上回るようになり、ウランの年間産出高は 4626 トンと世界第 4 位を占めるまでになったそうです。こうした鉱産資源は、隣国の南アをはじめ、多国籍企業に採掘されているため貧富の差は解消できず、国の発展には多くの課題があるようでした。



ヨーロッパ風の街並みと瀟洒なホテルもあり、そこで出されたランチも美味しくいただきました。



気候は温帯にあるので過ごしやすく、ドイツ文化が今なお息づいています。世界に誇る砂漠資源だけでなく、豊富な鉱物資源を独自に活用出来る国になれば、大きな発展が出来る国です。白人と黒人の混血の思われる人も多く見かけられ、アフリカの中でも特異な文化と未来を背負っている国ではないかと思いました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 19

2024/05/17

南半球は太陽が西から昇る!?

5, 6 人で囲む朝の食事のテーブルは、前日の出来事や各自の近況報告で会話が弾みます。知らない同士ですが 1 ヶ月も経つとどこかでお顔を見たかなと思う人も出てきます。ちょうど、太陽が昇ってくる時刻でした。水平線の彼方から赤い太陽が昇ってくる光景は、いつ見てもいいものです。

角際で写真を撮っていたご婦人が「あら、今日は太陽が西から昇っている」とつぶやきました。船は北に向かって航海しているので、太陽は船の右方向に見えるはずですが、それが左方向に見えている。だれかが「南半球は、太陽は西から昇るんだよ」

という「そんなこと学校で習わなかったよね」と言います。なんとなくそれで皆、納得したようでした。

筆者は、そうだろうかと頭の中で地球を思い浮かべて考えていましたが、納得いかない。ヘンだな。進行方向の左側に太陽がある。ということは船は南に向かっている。謎は、翌日の朝の食卓で解けました。

急患発生で船がナミベアに戻った！

前日、急患が発生したので船は反転し、ナミベアに戻ったと言うのです。船内放送で3回も知らせ、ナミベアには急患を搬送するヘリコプターがないので、高速モーターボートが接近し、船から降ろした急患を収容して戻って行ったというのです。

患者さんは若い人だったようで、皆、無事を祈る言葉であふれていました。すでに船で亡くなった方が2人出ているという話も聞きました。PEACE BOAT スタッフに聞いた話ではありませんが、食卓の話題ではよく出てきます。スタッフも入れて1500人の乗員がいるのですから、そういうこともありうる話です。

PEACE BOATに申し込んだとき、70歳以上は健康診断書を出すように言われ、筆者は一か月以内の人間ドックの診断書を提出して、乗船OKをもらった身でした。

ともかくも太陽が西から昇ったと思っていたとき、船は急患収容のため、反転してナミベアに戻ったので南に向かって航海していたのです。太陽はやはり東から昇っていた！

謎が解けたとき、みんなで大笑いしました。どおりで船の速度が速かったことを筆者は思い起こしました。窓から流れゆく光景を見ていると、いつもの船の速度より速いなと思ったのです。しかし、船内放送で3回も急患発生したことを告知したことに全く気がつかなかったことにショックを覚えました。PCで何か作業をしているときに、船内放送があっても上の空でいることが少なくありません。

船内放送は、英語、日本語、中国語、韓国語と同じことを4回も放送するので、うるさいなあと思うことが多いのです。日本語のところできちんと聴いていなければ、あとは雑音と同じです。

急患を引き渡して船が再び反転して北へ向かったときに、あのむせび泣く汽笛を一回だけ鳴らしたと言うのです。急患搬送のお礼と患者には無事に帰って来いよと鳴らしたのですが、筆者はこれも聴いていませんでした。そうこうしているうち、部屋のキーを中に置いたまま外に出てしまい、レセプションまで行って開けてもらうという失態も演じました。我が国の劣化を嘆く前に自らの劣化を反省するという日になりました。

趣味道楽から教養テーマまで各種の集まり

PEACE BOAT 乗船客が自主的に企画して発表したり行動を起こす「自主企画」というイベントがあります。1300人(寄港地で乗り降りの乗客がいるので、大体の人数です)の人がいるので、趣味・道楽から始まってスポーツの類い、文化・芸術、教養まで人々の興味のあるものすべてに人が集まるもんだと感心しています。

例えばお習字、折り紙、朗読会、ペン字履修などに中国の舞踊、太極拳、ヨガなども会場を覗いてみたらほぼ満杯の盛況です。ヨガやサルサなどは、大きな会場やプールの周囲の回廊をうまく使って楽しんでいます。



小中学校の教育を考える会に集まり、早速意見交換会が始まりました

小中学校の教育を考える会が発足

筆者が日本の学校給食はいまや世界一であるという主旨で講演をしたことがきっかけになって、若い世代の乗船客と言葉を交わす仲になりました。その中に、中学校の国語の教師を4年務めて辞め、船に乗ってきた女性がいました。理由を聞いてみると、教師・学校という職場に飽き足らず、生き方を考え直したいというようなことを言います。

21世紀構想研究会の創設から25年を記念して開催したシンポジウムは教育がテーマだったので、そんな話から、船でも教育問題を提起する自主企画をしようかという話に発展しました。そこに大学の教育学部3年生の男子学生も加わることになり、3人が発案者になり「小学校の教育を考える」自主企画を立ち上げました。

20人以上の集まりにびっくり

当初、どのくらい集まってくるか不安もありましたが、開いてみれば20人以上が会場に集まってきました。船の中で知り合いになった元小中学校の教員をしていたご夫妻、国立大学の教授をしていたご婦人など、教育関係者も顔を見せており、初等中等教育が劣化をしている現状を憂えることで一致していました。



参加者は意見を付箋に書いて出し合い、終了後の整理に役立たせます。学校現場ではこのような方法がよくとられているようで、勉強になりました。



これから現場で何が問題になっているのか。その現状を出し合い、解決する方法を模索してまとめ、それを行政当局や政治家に届けて対応策を講じてもらおうという狙いです。最終的には船でシンポジウムを開催してまとめるという計画です。

参加者の意見をどのように集約するのか。主催した若者たちは、大きな付箋を配布して、そこに全員の意見をメモしてもらい、それを集めて整理するという方法には感心しました。教室の授業では、よくやっているという方法だとか。こうして教育問題を討論してよりよき現場の実現に船の同士は動き出しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 20

2024/05/19

ガーナで野口英世に会えないのは残念

PEACE BOAT はいま、大西洋のアフリカ大陸沖をヨーロッパに向かって航海を続けています。ナミビア・ウオルビスベイを出航してほぼ 1 日後に、船内に急患が出て船は引き返し、ナミビアに降ろして再び北上するというアクシデントに見舞われました。

この予定変更で、今後の船旅のスケジュールが変更されるかもと失敗しましたが、帰国までのスケジュールは予定通りとのアナウンスもあり、窓から見える景色から船が速度を上げている様子が見えました。

アフリカ大陸への接岸は南アフリカ共和国と隣国のナミビア共和国の 2 国だけであり、筆者が期待していたガーナには寄港する予定が組み込まれておらず、あてが外れました。ガーナは、日本人の心の偉人である野口英世が黄熱病で斃れた地であり、ガーナには野口の偉業を称える記念像などもあるので期待していました。今回は、これがないのでその代わり、船内で野口英世を顕彰する講演会を開催する予定です。

悲劇の大陸アフリカの現実を知る機会

アフリカ大陸に 2 回寄港しただけで後はひたすら外洋を北上する航海です。この機会に船内では奴隷の歴史やいまなお政情不安定で混乱するアフリカ諸国の様子を報告する講演などがありました。筆者がその中でも今更ながら知って驚いたのは奴隷の歴史でした。

人間が人間を売り買いする奴隷売買は、死の商人とも言われています。奴隷を運ぶために開発された道具類は、家畜動物でもこうはしないだろうという思うほど劣悪でひどいものでした。人間は知恵ある動物ですから、家畜並みの道具では簡

単に破られて逃げられてしまう。人間を絶対に逃げられないように縛り付ける道具は、半端ではありません。

いずれも講演の際に写真で見せられたものだけでしたが、見るに堪えないようなものばかりでした。

デンマークの奴隷制度を知る

「雪の女王」や「人魚姫」などの童話を生んだアンデルセンは、デンマーク生まれの作家です。北欧の最南端のスウェーデンに隣接している国で、首都のコペンハーゲンにはトランジットする大きな空港があり、何度も通過していましたが、チーズやバターなど高級乳製品を製造している国、程度の知識しか持ち合わせていませんでした。

そのデンマークが、1660年ころから1800年代初頭まで、アフリカ人を売買する奴隷商人として世界のリーダーの一角になっていることを知ってびっくりしました。当時、デンマークの植民地であった西インド諸島のセント・トーマス島などに非人道的な方法で運びました。そして、主に砂糖やコットンのプランテーションで奴隷として働かせ、富をあげていたという歴史がありました。

調べてみると、確かに多くの記述がネットでも掲出されていました。デンマークはこの暗い歴史を消し去りたいという思いに駆られたようで、世界で初めて奴隷制度を廃止した国として記載されたこともあったようですが、それは大きな間違いとして訂正される騒ぎもあり、いまでは史実を向き合いながら過去の歴史清算をしているという話でした。



アフリカのマリー・トーマス(Mary Thomas)は、奴隷解放に立ち上がった女性です。奴隷労働者たちと反乱を起こし、約 50 もの砂糖プランテーションや畑、家屋に火を付けて焼いた歴史をつくりました。奴隷解放のヒロインとして今に伝わっています。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 21

2024/05/20

沖縄返還の密使・密約のすべてを語る

沖縄返還は 1972 年 5 月 15 日に行われ、今年で 52 年目になります。船の自主企画の集まりで、沖縄に関係する人々や沖縄に興味のある人が 30 人ほど集まり、沖縄の米軍基地の ん b ひどさが大きな話題となりました。沖縄から PEACE BOAT に参加した人々は、口々に日常的に活動する米軍の存在を批判していました。

こうした意見にも後押しされ、筆者は「沖縄返還と密使・密約外交のすべてを語る」とのタイトルで講演を行いました。船内で 2 番目に大きな会場に 220 人が参加して、熱心に聞いてくれました。

筆者の活動領域は、科学技術関係、知的財産権、ノーベル賞などですが、沖縄返還とこのときに発生した毎日新聞社の西山太吉記者逮捕事件を警視庁記者クラブで担当したこともあり、長い間、記憶の底でくすぶっていました。

5 年ほど前に、終活に入って要らないものを整理しはじめたとき、膨大な沖縄返還関連の資料類を発見し、一度は目をつぶって廃棄することにしていました。しかし、過去 50 年近くにわたって関連資料や文献を集めてきた行動を考えながら、段ボール箱を開けてチラチラと眼を通していくと、次々と理不尽な佐藤栄作総理の言動やその後の自民党政権の責任感のないでたらめな見解発表などが否応なく眼に入り、ついに返還のすべてを事実の積み重ねで書き残し、後生の外交史研究者の文献として残そうと考え、にわかに執筆エネルギーが湧き出しました。そして返還から 50 年目の節目に日本評論社から「沖縄返還密使・密約外交、宰相佐藤栄作最後の一年」を上梓しました。

今回、船に乗って食事で同席した方や、何かの会合で知り合った方に、沖縄返還の話をしてみるとほぼ何も知らない人ばかりでした。知識の希薄さではなく、このテーマは、もはや風化してしまったからです。

筆者が確信を持って「佐藤栄作の外交の私物化」の話をする、例外なく驚いた表情になり、是非、船の講演で聴きたいという意見が寄せられ、この日の講演に繋がりました。



今に繋がる負の遺産をどうするのか

佐藤栄作とニクソン大統領の密約の中でも、日本国民として絶対に許してならないことは、米軍が有事の際の核兵器の日本への持ち込みを容認する議事録を作っていたことです。この議事録は、佐藤首相とニクソン大統領が署名したもので、一通はアメリカ国務省に「国家的重要書類」として保管されていますが、佐藤が持ち

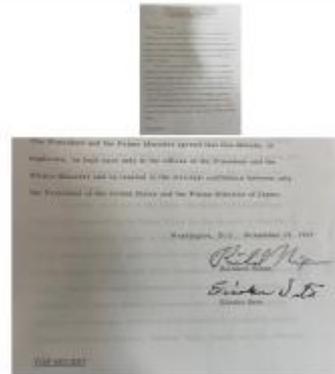
帰った一通は所在不明になっていたのが後年、佐藤邸の書斎にあったものが確認されています。

密約1 沖縄へ有事の核持ち込み

沖縄への有事の核持ち込みを密約した日米両首脳の議事録署名書。この議事録は米国務省に保管。いまも米の国家最高機密扱い（朝日新聞特報）。

日本の署名議事録は、佐藤栄作邸で保存（読売新聞特報）。

いまなお政府も外務省も公式として密約を認めず、この議事録は宙に浮いたまま。アメリカは国務省が国家的重要書類として保管（朝日新聞特報）



15

日米両国の首脳が署名した重要な書面が、一方は国家の機関が重要書類として保管し、一方は元総理私邸の書斎に眠っていたという事実は、国民として許してはならないことだと思えます。首脳会談後に発表されるコミュニケにも記載されない重要案件は、アメリカ側は議会の秘密会議で説明されて了解をとり、日本は佐藤総理だけが知りうる内容だったのです。



台湾・北朝鮮問題など、日本列島近傍では、時としてきな臭い状況が持ち上がり、有事に巻き込まれた場合、米軍の判断で日本の基地に核兵器を持ち込む「権利」を米側に与えた密約をどうするのか。

さらに西山記者逮捕に繋がった米国が支払うべき賠償金を日本が肩代わりして支払うという密約は、今の 米軍基地への「思いやり予算」に繋がっているものであり、理不尽な「思いやり」として問題になっています。

密約5 秘密賠償金の支払い方法

日本が米側に支払う賠償金は3億2千万ドル。
しかし実際は、この2倍以上を秘密裏に支払ったと言われているが、詳細は今なお不明。
防衛予算に潜り込ませて支払ったとの説もあるが、正確なことは不明。



旧防衛庁

沖縄返還の是非ではなく国家のあり方の問題

こうした問題は、沖縄返還が「良かった・悪かった」と言う問題ではなく、国家の体裁をしていない外交折衝であり、政治の劣悪さ・未熟さをさらけ出しており、その手法はそのまま負の遺産として残されてきています。

森友学園・国有地売却の公文書改ざん事件でも、財務省は文書開示をせず、裁判所も国民からの開示要求を棄却しています。近畿財務局の職員が自殺に追い込まれ、その職員の妻が人事院に関連情報の開示を要求しましたが、70 ページの文書のほとんどが黒塗りというあきれた行政の対応をみると、国民不在の政治と行政が連綿と続いており、そのスタートは沖縄返還まで遡っていきます。

筆者の論評はいくつか提示しましたが、大半は米公文書公開の事実資料、佐藤栄作の密使となった3人の学者と企業人の暴露本の内容、首相官邸の秘書官の日記と総理大臣主席秘書官の日記、佐藤栄作の膨大な日記など事実の掘り起こしで示しました。

講演後に多くの方からショックを受けたとのコメントをいただき、この講演会はそれなりに受け入れられたとの感触をいただきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 22

2024/05/22

運動会順延でクルーズディレクターにインタビュー

この日は PEACE BOAT の大運動会の開催日でしたが、あいにく天候不順で順延となり、予定されていたイベント、企画ものがすべて先送りとなりました。

趣味・道楽から各種教養、スポーツ、ヨガ、ダンス、講演会、セミナー、映画など多くのテーマで毎日、50本もの企画ものが朝から晩まで10会場のどこかで走っています。多いときは1日、80本もの企画ものが開催されているという盛況です。

PEACE BOAT の「売り物」は、この豊富な企画ものにありそうです。

その責任者を務めている鈴木隆之・クルーズディレクターは、この日は運動会順延で多少、暇だろうと思ってインタビューを申し入れましたが、15分しか空きがないという多忙の身でした。



多忙の身、15分という制限付きのインタビューでした

「PEACE BOAT に乗船して19年になります。この船は就航から40年ですし自分の年齢も40歳なので、これまでの人生の半分はこの船とともにいる勘定です」と言います。

船に乗った動機は、もともと一か所にとどまっていることが苦手なので、船に乗って世界各地を転々と訪問していくことは「天職」に見えたそうです。専門学校を卒業後、すぐに旅客船のスタッフとして乗船し、半年後に PEACE BOAT に移りました。

「船に乗っていると日々の景色、海の様子、人との巡り会いがすべて変化しています。それがたまらなく自分の生きている価値観に合っています。百聞は一見にしかずといますが、まさに自分の眼で確かめ体験することがいかに貴重であるかが、今更ながら分かりました」

PEACE BOAT に乗るきっかけとなったのは、教科書問題があったと言います。戦時中の「侵略」を「進出」と書き換えた問題で大きな議論が広がりました。実際に

はどのような有様だったのか自分の目で確かめてみたいという思いもあったそうです。「歴史だけでなく、現実の問題を自分の目で見て確かめることの大事さを学んでいます」と言います。鈴木さんの行動派の一面は、学生時代に自転車で日本一周旅行を決行したことに現れています。その体験談も企画シリーズで語って聞かせ、多くのファンを引きつけています。

イラン大統領機の墜落事故で時事解説

この日の夜、イラン大統領のヘリコプター墜落死が及ぼす中東問題について、急きょ、PEACE BOATの「水先案内人」として乗船していた国際政治学者で中東専門家の高橋和夫氏の解説講演が組み込まれました。高橋氏が乗船していたというタイミングにも恵まれましたが、このように臨機応変に乗客の希望を先取りして企画ものを打ち出すスピード感もなかなかのものです。



超満員の会場でイランを取り巻く状況を時事解説する高橋和夫氏

高橋氏は、「1960年代に `最新鋭、のヘリコプターが墜落した事故だった」とすでに老朽化していたヘリコプターの機能を語り、一瞬、世界に緊張感を走らせた大統領の墜落死を単なる「事故死」の可能性を示唆する内容でした。そして多数の写真や図・ネット情報を見せながら、イランの複雑な権力構造を明快に示し、イランの国内事情を簡潔に解説して聴く人たちにイランの現状を見せてくれた洒落な時事解説は流石でした。

サルサ指導でも大活躍

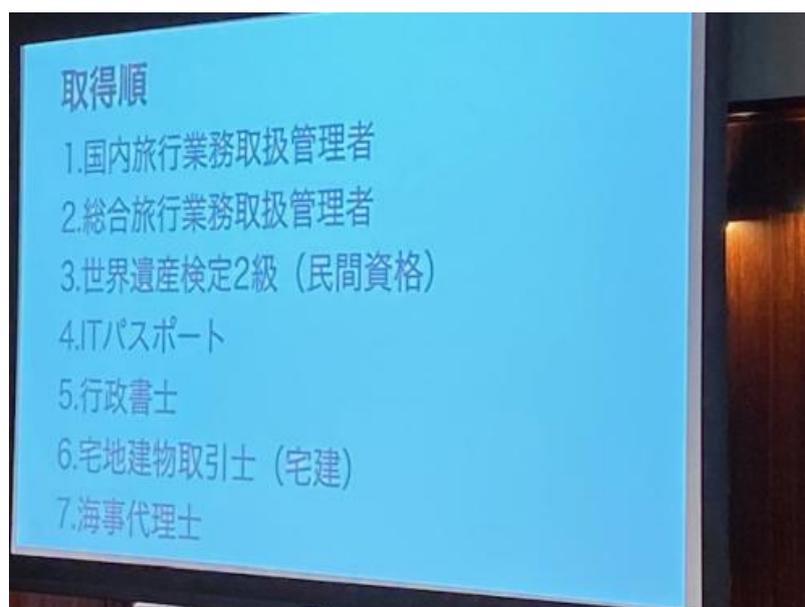
鈴木ディレクターは、意外な面を持っています。業務の多忙をぬってサルサというキューバダンスを教えています。男女がペアになって、ジルバとマンボを合わせたような軽快なステップで踊るダンスです。むかしこの船で教えていた先生のステップを習っていつの間にかプロの域になり、いまや「教え上手」と評判になっている一面もありました。

さらに驚いたことは、鈴木さんはコロナで船が休んでいた 2 年間に、資格試験を 7 つも取得していたことでした。

①行政書士、②総合旅行業務取扱管理者、③宅地建築取引士(宅建)、④海事代理士、⑤国内旅行業取扱管理者、⑥世界遺産検定 2 級(民間資格)、⑦IT パスポート

これは試験の難しい順序に並べたものですが、7 つのうち 6 つが国家試験です。コロナで船が出なくなっても、時間を有効に活用する鈴木さんの無駄のない生き方に感動しました。





この事実は、今回の PEACE BOAT 航海の PEACE BOAT 企画の中で発表されたものですが、スタッフはいい企画をしたと思います。

105日間かけて世界一周は、確かに魅力的な旅ではあります。1300人の乗船客を毎日、飽きさせずに次の寄港地へと運ぶ企画ものがあって初めて充実した船旅になることを知り、陰で支えるスタッフたちの一面を知る機会でもありました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 23

2024/05/23

洋上・大運動会の開催

待ちに待った洋上大運動会が開催されました。4チームに分かれた対抗戦です。赤・青・緑・黄色の色分けですが、誕生日で所属チームが決まります。

2, 3, 5月生まれが赤軍団

4, 6, 8月生まれは緑軍団

7、9、10月生まれは青軍団

1、11、12月生まれが黄色軍団

筆者は11月生まれなので黄色軍団に所属しました。

若手主導で応援合戦の練習

開催のほぼ一か月前から所属する団の若手が集まり、応援パフォーマンスの練習や競争種目への対策などを練り始めました。若手と言っても30歳代以下の人が多く、年配層はただ、参加するという感じでした。それでも開催日が近づくと所属する色が何かで話題が出たり、ついでに誕生日にまつわる話で盛り上がっていました。

船上での運動会と言っても最初はピンときませんでしたが、12階は広々とした空間があります。真ん中にプールを挟んでチェアが並んでいますが、通路は広く余裕があります。その空間を利用していくつかの運動会プログラムが組まれていました。

主催者の PEACE BOAT 関係者に聞いたところ、1500人の乗船者のうち運動会に参加した延べ人数は1000人くらいだと言います。ちょっとだけ顔出ししという人も大勢いましたが、やはりどんなものかを見物に出かけた人が多かったようです。

大型船とはいえ、船上で運動会が開かれるとは想像できませんでしたが、会場に行ってみれば、それなりの空間はあり、高齢者たちもたちまち童心に返って応援する姿が見えました。やはり対抗戦はいいものです。



筆者の所属する黄色軍は、意気のいい女性軍団が、文字通り黄色い声をあげて開催冒頭から大張りきり。



そこへ台湾のグループも加わって氣勢をあげて、いよいよ盛り上がっていました。



となりの赤軍団も団結を誇る氣勢をあげて、対応意識を燃やします。



障害物競走があつて、さまざまな障害を越えてリレー式に競争するもので、年齢に関係なく、大競争になっていました。



運動会を盛り上げる綱引きもありました。黄色軍団は、用意ドンのかけ声とともに赤軍団にあつという間に引き込まれての大負け。年配層からは、「勝負になっていないのは、タイミングの問題。一斉に腰を据えてかからないと簡単にやられる」という悔しいコメントが飛んでいました。



運動会の定番の玉入れです。自分たちの所属する色の玉だけを籠に入れる競技ですが、これが年配者にも受けて大歓声の中で玉が飛んでいました。



結果は、緑軍団が優勝。さまざまな種目の点数の合計ですが、緑の587点と最下位の黄色が506点。以外と差がつかしました。筆者の予想では、点差がない拮抗した対決に見えましたが、競争とは差がついてこそそのものでしょうか。



優勝の発表に、喜びを爆発させる緑軍団の人たち。午前と午後の合計4時間半にわたって展開された洋上大運動会は、多くの感動と団結と歓声と笑いを残して、大西洋のひろい海上に響きわたっていました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 24

2024/05/26

11 日ぶりに見えた陸の明かり

アフリカ大陸最南端の喜望峰を回ってインド洋から大西洋に出た船は、途中で南アフリカ共和国(南ア)、ナミビア共和国の沿岸を経て一路、ヨーロッパ大陸へと北上しました。途中、急患をナミビアに降ろすために引き返すハプニングもありましたが、そのハンデを取り返すため船足を速めてひたすら北上する日々でした。

船の最上階の 14 階に出て甲板を回って歩く日もありましたが、四方八方大海原で陸の景色はつゆほどもなく、大西洋を飽きるほど見る日々でした。

5 月 26 日の早朝、部屋のカーテンを開けたところ、点々と灯がともる陸の景色が見えたときは感動しました。ついに 7 つの島から成るカナリア諸島のグラン・カナリア島の首都とも言われるラスパルマスに近づいてきたのです。



早速、7階のデッキ(甲板)に出てぐるりと一周してみました。7階は船の高低のちょうど真ん中あたりであり、一周出来るようにデッキ廊下があります。一周、約500メートル強。3周すると1マイルということです。

オリンピックなどの陸上競技のトラックは、1周400メートルです。それよりも一回り大きなトラックが船の中にあるのです。船は刻々と陸に近づいていきます。日の出前に瀟洒な建物に明かりがともり、人の息遣いが感じられる光景はいいものです。乗船客がデッキに群がって接岸する作業を見ている。どの人もこの島に上陸することを楽しみにしていたことがよく分かりました。

島の歴史を知って文化の発祥を知る

この諸島はスペイン領ですが、地図で見ると本国からは遠く離れています。カナリア諸島という名前から、愛玩用として飼われているカナリアの原産地ということからついた名前のように。諸島の中の「首都」とも言われるラスパルマスに第一歩を踏み出しました。



地図の真ん中の黄色い部分がスペイン。左下の赤い諸島群がカナリア諸島。

年間を通して温暖な気候、そしてほぼお天気続きという自然条件に恵まれているので、ヨーロッパのハワイあるいは大西洋のハワイとも言われています。その地を利用して一大観光地として発展してきました。

原住民もいたのですが、スペインが中南米への進出基地として使うようになり、その歴史的な過程の中で独自の文化が発展し、今ではヨーロッパだけでなく世界中の人々を引きつける一大観光地へと発展しています。

タクシーはもちろん、露天に出ている洒落た土産物売りもすべてクレジットカードの使用が出来るも驚きました。滞在時間が短いので独自の種の発展と景観を作っている自然公園まで足を伸ばす時間はありませんでしたが、サンタ・アナ大聖堂へ行って見ました。ローマカトリック教会のカナリア諸島主教区の本拠地となっており、1478年に建築されたカナリア諸島の中でも最も有名なモニュメントの1つです。



大聖堂は表だけでなく中に入ってみると荘厳なたたずまいであり、キリスト教の歴史を伝えていました。



中に入ると荘厳なたたずまいの中で宗教の歴史を彩る展示祭壇が多数あり、ミイラも飾っていることにびっくりしました。



コロンブスの家は、コロンブスの大旅行の歴史とその業績などを展示しており、多くの来訪者で賑わっていました。



海水浴場は、大規模な防波堤に囲まれており、早くも多くの海水浴客が楽しんでいました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 25

2024/05/27

カナリア諸島で食べたスペイン料理

グランカナリア島・ラスパルマスに着いて11日ぶりに陸にあがって島の歴史を語る大聖堂を見物したことは前回、書きました。今回は、この島がいかに観光地として発展しているか食べ物で紹介します。

日本の地方都市や離島でも同じような文化が栄えないだろうかと考えました。

筆者は世界中どこへ行っても必ず、その地域の中心の市場に見学に行くことにしています。その地での食生活や様々な日用販売品から住まいの環境と物価がわかるからです。この島の市場に行って驚きました。とにかく潇洒できれいなことです。







写真で見るように、高級食料品専門店がアーケードの中に並んでいるのです。これはこの島の住民のためのマーケットではなく、観光地に訪れる人々へ向けた店舗ではないかと思うほどです。彩り豊かな果物類、加工食品は見事というほかありません。

古風な石作りの住居の路地に張り出したカフェテラスで、ランチを食べることにしました。生ハムとチーズをおつまみに、ビールを飲んでワインを楽しみました。最後は定番のパエリアですが、注文して30分と言われましたが、実際に出てきたのは1時間後でした。船出の時間までたっぷりであったので慌てることもなく堪能できました。





代金は4人で、生ビール5杯、ワイン 4 杯、生ハム、チーズ、パエリア 2 人前で一人、4300 円ですから、円安の今の時代、安い値段に思えました。手土産に嬉しい

いいハム類などを物色しましたが、これは国内持ち込み不可と知り、カナリア諸島の思い出だけを胸にしまって別れを告げました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 26

2024/05/28

オカリナのレッスン始まる

学校の講堂と同規模のどでかい会場が船にあります。朝早く、楽器を練習する会場に開放しており、午前7時過ぎから様々な楽器を手にした乗船客が集まってきます。筆者はここでオカリナを習いたいと乗船前に買い込んだ陶磁器製のオカリナを持ってきましたが、初心者でドレミも満足に音が出ない。気おくれをしているときに、誘ってくれる方がいて参加することにしました。



指導してくれるのは元校長先生

筆者の船上でのオカリナの先生になったのは、群馬県で40年間、教員生活を送った徳江裕さんです。古希(数え70歳)を迎えたとき、次の人生を紡ぐ構想を練るため、PEACE BOATに乗船したという方です。徳江先生のオカリナ歴をお聞きしました。

2014年、校長として最後の務めをしていた年、オカリナと徳江先生の縁は偶然から芽生えました。課外授業で訪問した陶磁器を焼いている窯場で、初めてこの楽器を見て手にし、試しに吹いてみるといい音が出ます。その場は感心して終わりましたが、後日、窯場から焼きたてのオカリナが送られてきました。最初は大事に校長室に飾って来訪者に見せて楽しんでいました。

あるとき、ふいにオカリナを吹いて卒業する児童を送ってやりたいとの思いが芽生えたのです。それから曲目を考え、自身の力量と相談し、誰もが知っている曲を考えました。いろいろ練習曲を吹いているうち「ふるさと」が浮上してきました。「うさぎ追いし かの山・・・」あの歌です。それから毎日、懸命の練習が始まりました。

紅白のまん幕を張った会場で、この日卒業式が粛々と運んでいました。校長先生は式辞を述べるのが定番ですが、徳江先生は式辞の代わりに卒業式の最後に児童たちに送る言葉で締めくくることを考えていました

そのとき卒業式にお祝いの言葉を語った後に、オカリナ演奏をして子供たちを送り出そうというアイデアでした。卒業しても小学校時代の良き思い出を折に触れて思い出し、生きていくエネルギーに変えてほしいという思いがありました。



オカリナの吹き方は息を吹き込むところが難しい。手本を何回も見せてくれました。

猛練習をして準備してきた「ふるさと」を吹き始めると、子どもたちの表情がみるみる変わっていきました。心の中で唄いながら、野や山で走り回ったあの風景と級友と遊んだあの光景がよみがえり、突き上げてくる感動を懸命にこらえていました。

弾き終わると万雷の拍手が会場を揺るがし、吹き終わった徳江先生の手が感動で震えていました。

紙に書いた式辞を読むのではなく、送り出す校長の万感の思いをこの一曲に込めた感動が、見事に花開いた瞬間でした。

「ふるさと、この曲、私は好きなんですよ。出だしを歌い出すと子ども時代をどうしても思い出します」と筆者が言うと「誰でも同じです。この曲は日本人のふるさとでもあります」と徳江先生は言います。この曲の練習が始まりました。

徳江先生は、定年で教員生活を引きましたが、大学の非常勤、幼稚園の事務局長など教育の場から離れることはなく、子どもたちの理科教育にも取り組んでいるとのこと。

果たして下船するまでに、2, 3曲、満身に吹けるようになるかどうか。なんだか、緊張感高まるレッスンが始まっています。

沖縄返還の講演で追加発言

先日、沖縄返還の際の理不尽な密約・密使を展開して、負の遺産を残した佐藤栄作総理の話をした際に、時間を間違えて肝心の最後の方が尻切れトンボになっていました。講演後に聴者から最後の方をやり直してほしいという希望が寄せられ、追加発言として40分間の講演をしました。



沖縄の追加講演では 250 人ほどの人が聴きに来てくれました。

この講演は、密約・密使外交を暴くためではなく、真実を検証しないでほったらかしにする日本は、同じ過ちを繰り返すという負の教訓を語るためでした。公文書管

理が先進国の中で突出して劣っている点も強調し、負の遺産を断ち切ることを強調して追加発言を終えました。

本書を上梓した著者の目的

沖縄返還がよかったか悪かったかを問うために書いたものではない。
密使・密約をあばくためでもない。

歴史の真実を検証し、民主主義国家のあるべき姿を考えるために書いた。

うやむや始末が日本を成熟国家にしない最大の原因だと確信している。



37

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 27

2024/05/30

延々と続く待ち行列に仰天

ポルトガルの首都・リスボンに接岸すると待ちかねたように乗船客は次々と上陸していきます。アフリカのように面倒な入国手続きはなく、ほぼフリーの状態の上陸です。船が用意したバスに乗って中心部の広場まで行き、そこで夕方まで自由行動と言われて解放されました。

レストランや土産物屋を覗いていると、船の仲間から「入りませんか」と誘われて、リヤカーに毛が生えたような屋根付き開放 3 輪車に乗りました。運転手兼ガイドは、10 年ほど日本で働いていたという 50 歳がらみの体格のいい旦那です。日本語が出来るのが、何よりも「安心の素」です。



事前の交渉で、1人7000円で2時間の案内ということで4人掛けの3輪車に乗りました。乗ってみると思ったよりゆったりした座り心地で満足です。旦那にいきなり、世界遺産に登録されているジェロニモス修道院に連れて行かれました。



マヌエル様式の傑作とされるジェロニモス修道院を取り巻く入場待ちの行列

大航海時代の豪華な展示物は見られず

この建物は、大航海時代の英雄、ヴァスコ・ダ・ガマらの功績を称えて 16 世紀に着工して完成した豪華絢爛たる建築物です。遠くからでもそれと分かる偉容を見ながら近づいて見ると、大勢の「群衆」が取り巻いています。聞けば、入場待ちの行列で、延々と続く列の最後尾を探しても、見えない彼方をさらに奥へ曲がって続いているといいます。

ウイークディというのに観光客であふれていることに仰天しました。大航海時代の海外交易で、巨万の富をつぎ込んだマヌエル様式の傑作といわれる建造物と珊瑚や天球儀など往時を誇示する緻密な美でつくったモチーフが随所にあるという触れ込みでしたが、入るまで優に 2 時間はかかると言います。早々に入館は諦めて建物をバックに記念写真となりました。

週末でもないのにこの人出は一体、何でしょうか。ヨーロッパいや世界各地から集まってきた観光客でしょうか。人々の会話を聞いていると、英語はほとんど聞こえてこないのに、ヨーロッパの人々のようでした。アジア人の割合も少ないように感じました。

ジェロニモス修道院のあたりは、有名な観光地域なのでとにかく人の渦があちこちに巻いています。前を流れるテージョ川に面して「ベレンの塔」があり、そちらは人があまりいないかと近づいてみたら、なんとこちらから見えなかった丘の下に「群衆」がとぐろを巻いていたのです。こちらも入場待ちの行列です。



ベレンの塔の前でテージョ河畔のそよ風の中でその昔を回想

早々に退散して「発見のモニュメント」という巨大な建造物を眺めながら、しばらく川面の風に当たりながら小休止となりました。



「発見のモニュメント」をバックに

リスボンには、30年ほど前に取材で来たことがありますが、街の様子記憶はありません。当時、マラソンで世界最高記録を樹立した、カロレス・ロペス選手の写真を一枚、撮ってきてくれと運動部から依頼されて撮影に行ったことだけは思い出しました。ヨーロッパ各地の取材の合間に下命されたもので、彼は1984年のロサンゼルス・オリンピックで五輪記録で金メダルに輝き、翌年にはロッテルダムマラソンで2時間8分の壁を破る世界最高記録を樹立したポルトガルの英雄でし

た。86年には東京マラソンに出場すると言うことで、その前触れの記事を作るので写真を撮ってこいという社からの下命でした。

そんなことを思い出しているうち、約束の2時間も迫ってくるし、案内の旦那は船の近くの港の丘にとってもいい古風な街があるので、そこでチンチン電車(トラム)に乗ったり、土産物屋を物色するのがいいと薦められて、そちらに移動することになりました。



港の丘の上から「我が家(パシフィック・ワールド号)」を見ながら散策

行って見たらこれが大当たり。起伏に富んだ丘の上に古い石作の家々が貫禄を出して並んでおり、これがなかなかいい感じです。洒落た土産物屋とレストランが路地を接して所狭しと並んでおり、飽きさせません。



建物を仕切っている路地の間から一望できる遠くの港には、我が家の船が存在感を出して見えます。ここで夕方まで過ごして帰宅という段取りを決めて、あとは各自バラバラ行動になりました。

Wi-Fi 接続フリーのレストランを探して入ってみると、これも大当たり。早速ビールにチーズ、ソーセージ、海鮮スープをいただきながら、久しぶりに日本の方々とラインで会話が出来、大満足のリスボン寄港でした。タダの Wi-Fi 接続を探すのも楽しいものです。船の Wi-Fi 接続はコストが高いのです。

次はフランスのル・アーブル寄港になりますが、そこまで 3 日の航海になります。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 28

2024/06/01

学校で習わなかったから知らない

とかくご婦人たちの会話は、情報が多岐に渡り、参考になります。船のレストランのテーブルを 6 人で囲んだ夕飯の席を見渡すと男性は筆者だけで、あとはやや歳を重ねた「妙齡」のご婦人ばかり。こんな会話が聞こえてきました。

街の両替屋で日本のお札を出したところ受けつけない。理由を聞いたら、円相場の上下が激しく、さらに今度、お札のデザインが変わるので不安だと言われたとか。

古いお札も流通するから心配ないと言っても通じないらしい。

「しかし、さすが両替屋よね。日本のお札デザインの切り替え情報をちゃんと持っていた」と言えば、「日本を信用してないってことでしょうか」となり、話は最近の政治、経済情勢から日本の停滞状況など際限なく広がります。

新紙幣の肖像が20年ぶりに変わる



→ 渋沢栄一

→ 津田梅子

→ 北里柴三郎

発行開始
2024年7月3日

紙幣を斜めにすると
肖像が立体的に見える

お札デザイン切り替えでは、千円札の肖像が野口英世から北里柴三郎へバトンタッチされる話をとらえて、筆者の出番が回って来ました。この 2 人の巨人について

は、ついついしたり顔で 2 人とも、後一步でノーベル賞受賞だった史実を語ったところ「そんなこと、学校で習わなかった」となり、企画講演することになりました。

野口英世のノーベル賞物語と掲げた意味

福島県の寒村、猪苗代湖畔で生まれ、1歳のとき左手に大やけどで障害者に。高等小卒の学歴で医院の書生となり猛勉強。ドイツ語、英語で書かれた医学書を読破。21歳で医師国家試験免許に合格。アメリカに留学して頭角を現し、世界の先端細菌学者として知られ、ノーベル賞候補として日本人の最多回数の推薦を受けた。



「学校で習わない」という言い方は、妙に説得力があります。しかし、習わないということは教科書に書いていないことを示すようで、入試にも出ないということになります。こういう教育を「与える教育」と言うようですが、いつまでたっても与えるだけの教育では、発展性もないし今の時代のスピードにも追いつけません。

いまは知らないことが出てくるとスマホで簡単に検索して知識を得ることができます。

世界の先端医学研究に取り組んだ野口

野口英世の伝記は、小学生にはいまでも人気があるようです。15歳で学校を卒業後は、独学でドイツ語、英語などの文献を読みこなし、今で言う医師国家試験を21歳で取得し、間もなくアメリカに留学します。

その後は、ペンシルバニア大学医学部のフレクスナー教授の指導のもとに瞬く間に細菌学、血清学などを習得して多数の論文を書き、ついに梅毒スピロヘータを進行性麻痺・脊髄癆の患者の脳病理組織で確認して、この病気と梅毒との関連を明らかにしました。

年	推薦された人	野口を推薦した人
1913	野口英世	平井太郎(京都帝大医科大学)
"	野口英世	A. Salvat(セビリア)
"	野口英世	C. S. Bacon(シカゴ)
"	野口英世	C. S. Butler(ワシントン)
"	野口英世	C. L. Gibson(ニューヨーク)
"	野口英世	A. Carrel(ニューヨーク)
"	野口英世	M. Mayer(ハンブルク)
"	野口英世	E. Libman(ニューヨーク)
"	野口英世	H. da Rocha-Lima(ハンブルク)
"	野口英世	S. Flexner(ニューヨーク)
"	野口英世	D. Claus-Schilling(ベルリン)
"	野口英世	W. A. Oppel(ペテルスブルク)
"	野口英世	松浦有志太郎(京都帝大医科大学)
"	野口英世	Alfred Lendon(オーストラリア)
1914年	野口英世	伊藤集三(京都帝大医科大学)
1915年	野口英世	Alexis Carrel(パリ)
1920年	野口英世	Paul Vuillemin(ナンシー)
1921年	野口英世	J. De Azua(マドリード)
"	野口英世	H. G. Wells(シカゴ)
1924年	野口英世	E. Hoffmann(ボン)
1925年	野口英世	J. A. Fordyce(ニューヨーク)
"	野口英世	A. Carrel(ニューヨーク)
1927年	野口英世	松本信一(京都帝大医学部)

1913年は、野口が麻痺性痴呆は梅毒スピロヘータが原因であることを突き止めた直後。

1914年 最終選考11人の中に野口

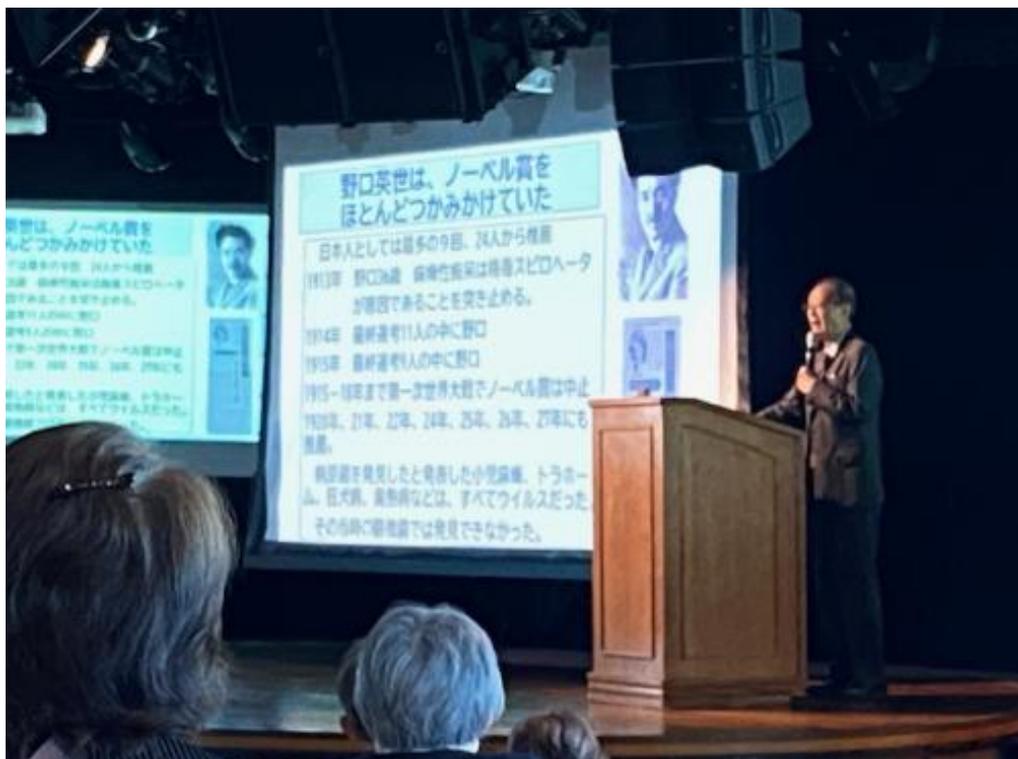
1915年 最終選考9人の中に野口

1915-18年まで第一次世界大戦でノーベル賞は中止

延べ23人から推薦を受けた。そのうち日本人推薦者は4人でいずれも京都帝大医学部教授。

1913年には、この業績だけで世界中の14人からノーベル賞候補の推薦を受け、最終選考にも残っていました。この推薦を始め、延べ23人から推薦を受け、

今一步で受賞という輝かしい活躍ぶりでした。



細菌学者として世界トップに躍り出る

- 37歳
- 梅毒スピロヘータを進行性麻痺・脊髄癆の患者の脳病理組織で確認。
- この病気と梅毒との関連を明らかにした。
- 精神疾患と感染症の関係を初めて示した。
- 小児マヒ、狂犬病の病原体特定を発表（のち否定される。いずれもウイルスだった）



明治時代の医学研究の2人の巨人

7月3日に、1万円、5千円、千円のお札の肖像が20年ぶりに変わります。最も国民になじみのある千円札の肖像は、野口から北里柴三郎へとバトンタッチされます。そのような節目のときでもあり、偏差値などと無縁だった時代、福島県の寒村から高等小学校卒の学歴で世界の先端研究者になった野口の人生はあまりにドラマチックです。乗船している PEACE BOAT が、数日前に野口が黄熱病にかかって斃れたガーナ沖を通過してきたばかりです。その縁も入れて話を進めました。

野口の死を悼むアメリカ

- 野口最後の言葉 「私には分からない」
- 遺体はニューヨークまで運ばれ、6月15日、ニューヨークのウッドローン墓地に埋葬。メリー夫人と共に眠っている。
- ロックフェラー研究所は、野口を「古今を通じて最大の細菌学者の1人」と称賛。
- 5月22日 - ロックフェラー研究所は、野口の死を悼み半旗を掲げた。
- 5月23日 - ニューヨーク・タイムズ、モーニング・ワールド、ヘラルド・トリビューンなどが社説で、野口の死を惜しみ、功績を称えた。



「科学への献身を通じ、人類のために生き、人類のために死せり」

150人ほどが聴きに来てくれましたが、講演後の感想は「そんなこと知らなかった」という声ばかりであり、野口のドラマチックな人生は、色あせることなくさらに輝きを増していることを知りました。

偏差値一辺倒の大学入試制度、メディアも含めて有名大学入試競争の現場をこれ見よがしに報道する姿勢がある限り、野口のような英雄は出てこないでしょう。

次は、フランスのル・アーブルに寄港する予定です。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 29

2024/06/01

ノルマンディーに上陸

第二次世界大戦の激戦地で有名なノルマンディー上陸作戦の舞台になったその地に「上陸」するとはびっくりでした。この地方最大の港であるル・アーブルに船が接岸したとき、大荒れの海の中であり小雨降る肌寒い朝でした。

整備された都市計画は、古い時代の遺産を活かした街並みが素晴らしく、ユネスコ世界遺産にも登録されています。多くの印象派の画家が描いたエトルタ、アヴァル断崖と海岸線の絶景、自然環境とその景観は素晴らしく、さらに歴史的な教会、大聖堂、宮殿、修道院などの遺産も点在しています。



往時の修道院は美術館になっていますが、その一部ではフランスで最古の歴史と品質を誇るコニャック、ブランデー、リキュールが醸造されています。

最低でも 3 日は必要な一大観光地をたった 1 日で見学するというのが船旅の宿命です。9 つのツアーが用意されていましたが、参加できるのは 1 つだけ。筆者は、最古のリキュール発祥のベネディクティン修道院とそのリキュールとコニャック、ブランディーが試飲できるコースに参加しました。



修道院の中に入ってみると歴史を感じさせる美術館であり、一角には醸造工場が併設されていました。

古色蒼然と豪華な建築様式を両立させた修道院

1510年にベネディクト派の修道院として建築された建物は、あたりを圧倒する威厳を保っており、午前10時きっかりに門が開けられて入りました。

この修道院は非常に戒律の厳しいことで知られていたそうで、私語はもちろん許されず、作業の間もひたすらお祈りの言葉と姿勢を崩さなかったという説明には驚きました。朝起きてから夜寝るまで、ひたすら信仰の心にすがりついた修道院の中で、アルコール飲料が醸造されていたとは理解を超えるものでした。



歴史を刻んだ展示品は、多くが醸造に使った道具類と文献類でした。





修道院時代の展示品は気品を感じさせるものばかりで見とれました

このリキュールは、さまざまな薬草と蜂蜜を材料にしたもので、度数はなんと 40 度。長寿にいいとされた薬用飲用となり、長い歴史を紡いで来たとのことでした。

口中を満たす芳醇な香りとコクのある甘み

修道院はのちに事業家の手に渡り、そこでフランス最古とされるリキュールの醸造製法が引き継がれました。さらにその醸造法に工夫と創意をいれてコニャックとブランデーの醸造に発展させ、コクのある上品な甘さは洋菓子の風味付けに絶好とされるようになり、世界中に輸出されました。



用意されたスタンドでコニャック、ブランディ、リキュールをいただきました

リキュール販売で儲けた資金で、往時の醸造器具類や修道院の素晴らしい調度品類などを買い集めて整理し、豪華なたたずまいのある美術館として完成させたのでした。

スタンドグラスの目を見張るような絢爛たる壁面や醸造道具類の展示物は、歴史そのものであり、現在の醸造手法も多くの職人が丹精込めて取り組み、新たな手法も編み出しているとのこと。近代的な作業現場と伝統的な現場を融合させた醸造現場の一端を見せてくれました。

コニャック、ブランディ、リキュールを入れたグラスが用意されており、みんなで試飲することになりました。グラスを口元に寄せるとなんとも言えない甘い香りが立ちのぼり、口に含むとアルコール度の強い芳醇な液体が一瞬の中で広がり、ため息に似た声と息遣いがあちこちで発散していました。



印象派の画家たちの眼を引いた断崖風景



古い街並みには古風なホテルやレストラン、土産物屋が並び一時間ほど歩いて楽しみました。

船の出航時間に合わせて港に引き返します。ガイドさんが「せっかく来たのにすぐ船に帰るのはもったいない」と残念そうな顔をしてくれましたが、何しろ世界一周という目的があるので、どこに上陸しても駆け足の見物で帰船して出航ということになります。これもまた、船旅の醍醐味でしょうか。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 30

2024/06/03

ロンドンで記録的な大渋滞に巻き込まれる

日の出・午前 4 時 46 分、日の入・午後 9 時 07 分。これがロンドンの日の出・日の入です。やたら日中が長いので、少々、調子が狂いますが、この日のロンドンはさらに狂いました。

一泊 2 日、12 万 2 千円という「豪華」なオプションツアーに参加しました。ロンドン市内観光、市内でホテルに泊まり、翌日はあの有名な環状列石といわれるストーンヘンジ(stone henge)の見学です。ティルベリー港を降りてバスに乗り換え、翌日、そのバスで帰って来るというバス旅行の日程です。

異変は、ロンドン市内に入るところから出てきました。渋滞が続き、市内に入ると路上の車は 1 センチも動きません。ガイドからの説明がなかったので、何も知らないで座席でうつらうつらしていますが、はっと気がついても車窓からの景色は何も変わっていません。



タワーブリッジの近くでバスを降りますが、周囲は人の波で近づくことは諦め、まずはトイレを探すことに追われました。

ようやく入った情報によると、この日、土曜日はイスラエルとパレスチナ紛争を巡ってイスラエルの過剰な攻撃に反対するデモと環境問題の対応不満のデモが重なり、あろうことかスペインとイギリスが対戦するサッカーの試合が開催されて、外国から大挙、見物客が押し寄せてロンドン燃え上がっているというのです。

ロンドン警視庁とロンドン近隣から集まってきた警備・警察官が強制的に道路を封鎖してデモ隊を規制し、サッカー見物から派生する騒ぎを抑え込もうということですから、一般の通行規制ではなくロンドン一帯の「戒厳令」に等しい規制ではないかと思いました。

こちらは、バスに缶詰状態なので、街の騒動の様子は何も分かりませんでした。

観光地は人・人・人の洪水

ウエストミンスター寺院、国会議事堂、ビッグベン、タワーブリッジなどロンドンを代表する観光が組み込まれていましたが、国会議事堂が見えるところまで来たときは、予定時刻を大幅にオーバーしており、車窓見学ということになりました。



バスの車窓から遠く眺めた国会議事堂。ビッグベンもかろうじて見えたという程度であり、ウエストミンスター寺院は近づくことも出来ませんでした。

このツアーは元々、接岸の時間で午後 3 時ころから出発したので時間的な余裕がなく、観光地に着いても慌ただしく写真撮影後には移動ということでしたが、ともかくも近づいてまたまた驚きました。

見物客が入場の列を作っているのか、はたまた単にあふれているのか不明でしたが、どこへ行っても人人人の波です。こちらは高齢者の集まりですから、最大の懸念はトイレです。しかし国会議事堂が見える場所に行ってみたら、公衆トイレは封鎖されており、思いあまってファストフードになだれ込んでトイレを拝借。時間の都合で何も飲まずにさっさとバスへ退散ということになりました。



ようやく見つけた公衆トイレはご覧のように封鎖。デモ隊の動きに応じて強制的に封鎖のようです。慌てて近くのファストフード店になだれ込み、迷惑承知で用を済ますという有様でした。

こんな繰り返しをしてやっとの思いで、予定より大幅にオーバーしてホテルに到着しました。慌ただしく夕食をとって寝ることになり、予定していた買い物なども出来ずに不満やるかたない初日になりました。



ロンドンから出発する列車の駅は芸術品かと思うほどに立派な建物でした。蒸気機関の発明から鉄道の歴史を作った国を思いました。

翌日の日曜日は、一番、期待しているストーンヘンジの見物です。それだけが期待に置き換わり、初日は慌ただしく暮れていきました。

翌日、朝早くホテル周辺を散策すると思わぬ光景に出くわしました。筆者の名前の「Baba」と同じ名前のレストランの看板を見たのです。開店していればすぐさま入って店主に挨拶するところですが、日曜日の早朝ですから開いていませんでした。



ロンドン市内で筆者が経営するレストランです(fake news)

ピースボート「地球一周の船旅」 航海日誌31－60回

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 31

2024/06/05

憧れの巨大な遺跡列岩を見に行く

船が寄港地に寄る時間は1日か2日と決まっています。イギリスはロンドンから40キロの距離にあるテムズ河口のティルベリー港に接岸して2日滞在し、上陸して見物する10本のツアーが用意されていました。その中から1つだけ選ぶのは相当に迷いますが、1泊2日でストーンヘンジ(stone henge)に行くツアーに参加しました。

初日のロンドン観光は、前回書きましたが記録的な大規模デモの規制を受けてほぼバスに缶詰状態。2日目は早朝からバスに乗り込み、ひたすらストーンヘンジに向かって走ります。前日はバスに閉じ込められて終わった反動もあり、広々とした平原と羊たちの群れを飽かずに見ていました。

突然、眼に入ったのは平原の彼方にうごめく一本の線でした。あれは何だろう。アリの行列のように何かに向かってうごめいています。その先端まで追いかけてみると、そこに大きな岩石のようなものが点々と見えます。筆者はあっと心で中で叫びました。ついに来たのです。ストーンヘンジの独特の形が並んでいます。長い間、実際にこの眼で見たいと思い続けてきた憧れの巨大な岩石遺跡です。



長い人の列が巨大遺跡群につながるように尾を引いていました。

シャトルバスで至近距離まで接近して見学

バスは遺跡から遠く離れたセンターに着き、そこからシャトルバスに乗り換えてストーンヘンジまで運ばれていきます。この巨大な岩石遺跡に筆者が注目したのは、少年時代でした。いまから4500年も前に、なぜにしてあのような巨大岩石を人々が組み立てたのか。少年雑誌に特集として写真入りで掲載されていました。その雑誌のことは大人になってもしばらく思い出すことができました。

構成する何十トンという巨大な岩石は、数十キロ離れた山地から運んできたものです。先史時代に誰が何の目的でこの平原まで運び、組み立てたものなのか。野の原の中に屹立する岩石の構造体を筆者はいま見ようとしています。わくわくするうちに、それが眼前に現れました。

ストーンヘンジ見学は、遠巻きに一周するようにコースが出来ており、歩いてほぼ1時間で終了します。筆者の記憶では、1963年にイギリスの有名な天文学者、ジェラルド・ホーキンスが「ネイチャー」に論文を発表し、この遺跡岩の配置は、天文学的に考えたものであり、月と太陽の位置関係を配慮したもので日食を予測していたというものでした。

しかしこの見解もその後、否定的に見る研究者が現れており、この遺跡岩の配置と存在の意味は、まだ何も確定していません。しかし、遠隔地からこの平原まで人力だけで運び、それを組み立てていまの状態にした意味は何か。不可思議を超えて際限なく人間の才知を感じさせます。

ストーンヘンジをバックにした写真は、長い間筆者の憧れでした。人類の英知と力量を感じるからです。



見る角度によって容貌が変わる遺跡群像

現場を一周して分かったことは、見る角度によってストーンヘンジの光景が変わっていきます。つまりストーンヘンジの容貌が変わるのです。だから私たちがさまざまな写真で見ている遺跡岩は、皆違う光景であるはずです。

一周するようにコースを作ったのは、その全貌を見て欲しいという配慮からでしょう。しかも10メートルにも満たない至近距離から見る位置にも行くように、作ってありました。その地点には幾重にも人の輪が広がりました。

数メートルの距離になるとその存在感が、あたりを払うように押し寄せてきました。



写真で見るようにすぐ近くで手で触れるくらいの距離に来ると、圧倒的な質量感が迫り、この岩を「屋根」まで載せて作った先史時代の人たちは何を考えていたのだろうかと思わずにいらませんでした。屋根に当たる平らな岩石と、それを支える2本の岩柱との接点には、落下を防止するちょうつがい構造で固定されているというのです。

手で触れるくらいの距離から飽かずに観察する機会に感動しました。ゴツゴツした岩の構造物が、後生の人間に感動を与えるだろうと彼らが考えたことはないでしょう。しかしこれをつくった人たちは、現代人と同じような英知を備えていたでしょう。

すでにマンモスは滅び、現世の動物とほぼ同じ種に置き換わっていた動物群を追い求めていたクロマニヨン人たちは、私たち農耕民族とはまた違った価値観の中で独自の狩猟民族文化を築いていったに違いありません。

帰り際、ストーンヘンジに別れを告げようとしたとき、ある角度に気がつき、急いで回って撮ったのがこの写真です。



この角度で見た遺跡構造体が最も整っていると思ったからです。これこそストーン

ヘンジの正面から見た顔ではないだろうか。これをつくった一群のリーダーも、同じ思想で完成させたのではないだろうか。そういう思いを巡らせながら、撮影してきたスマホの写真を繰り返し眺めては、帰りのバスの席に埋もれていました。

さらばストーンヘンジ。もう二度と会うことはないでしょう。しかしそれらは筆者にとって、永遠の輝きを宿して決して消えることない顔貌を心のひだに刻みつけたのでした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 32

2024/06/05

悲喜こもごもロンドン後遺症

ロンドンの 2 日間の観光は、土日になったうえ、大規模な 2 つのデモとサッカーの国際試合が重なり、交通大渋滞などで上陸したツアーは、さまざまな影響を受け帰船後もあちこちで話題が沸騰していました。

オプションツアー参加者は、場所によって影響軽微だったグループもありましたが、もろにかぶって観光どころではなかったというグループもいました。

ロンドンの土日は、クローズしている商店や機関もあり、観光施設でも閉館という場所があったようです。何よりも土日は、観光地への人出が多く、接岸スケジュールに工夫がなかったのかという意見も出ていました。

世界観を変えたスマホ文化と自由行動

ツアーグループに対して、それなりに楽しんだのは個人で自由に市内を観光した人でした。電車や地下鉄、タクシーなどをうまく利用して目的施設に直行し、デモに遭

遇した人もいましたが、異国のデモ風景を見てそれなりに「観光」になったようでした。英語が通じることも自由行動に駆り出した理由になっていました。

話を聞いていて感心したのは、年代に関係なくスマホをうまく利用していることでした。若い人たちのスマホ利用術は別として、60歳代以上の高齢者の方たち、特にご婦人の方のスマホ利用術が筆者の想像を遙かに超えて習熟していることに感心しました。というよりも感心する筆者の方が未熟者にとどまっているのでしよう。そういうことを感じるのが、ままありました。



焼酎のボトルキープ、3千円。夕食時になるとボトルを出し合って、あちこちで宴が始まります。貴重な情報交換の場になります。

実用的なスマホ活用は、体験がモノを言います。この種のツールは「習うより慣れろ」というように、体験することが最大の習得術になります。さらにご婦人たちは、スキルを伝搬させるスピード感が男性よりも遙かに早い。

ご婦人たちはきめ細かく、地図や施設の検索や確認。地下鉄などの交通情報の検索と確認。種々の買い物情報など実にきめ細かく情報を入手していました。

男性は気がついていても機会がなければ黙っていますが、女性はおしゃべりの中であつという間に伝授していきます。そのような場面に出くわすと筆者は、関心しきり

ということになります。外国旅行でのスマホ利用は、想像以上の武器になることを船旅で感じました。船内での Wi-Fi 利用を始め、うまくこのツールを使いこなせば、格段に便利で効率のいい旅につながっていくようです。



屋上のデッキに集まってあれこれ話題を語り合うことも。情報交換の重要な場になっています。

一方で「スマホなんて関係ねえよ」と語っている一群の人たちもいます。PEACE BOAT では、さまざまなプログラムを準備して提供し、さらに乗船客が自主的に余技や趣味を披露・伝授して楽しませてくれるプログラムが毎日、開催されています。1500 人の小さな「村」が息づいていることを実感する日々でもあります。



教養講演が、毎日、船内のどこかで開催されています。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 33

2024/06/06

冷涼明媚なスカンジナビア半島に接岸

ロンドンから北上してスカンジナビア半島随一のベルゲン港に接岸されました。ノルウェーの首都オスロに次ぐ第二の都市であり、昔はヴァイキングの拠点でもあり、その後は交易都市として栄えてきた港です。今回の旅では、最も寒い地域に上陸するので、防寒には気を遣いました。次の寄港地のアイスランドは、もっと寒くなりそうです。

ノルウェー人は背が高い。第一印象がそれでした。男女とも金髪・碧眼でプロポーション随一の民族です。有名なベルクマンの法則では「恒温動物は寒冷に生息するほど体重が重くなる」とありますが、人間もクマやシカ類も野鳥も同じです。動物はすべて北方に行くほど同じ種でも大型になります。筆者が札幌に転勤でいたころ、スズメ・カラスの類いからすべての生息動物は、同種でありながら本州のそれよりも大型であり、ベルクマンの法則を知ったことを思い出しました。

ベルゲンは、その昔はヴァイキングの拠点のひとつであったようで、その後は海洋商業都市として栄え、ドイツのハンザ商人で形成していたハンザ同盟都市となつて、スカンジナビア半島地域の仲介取引を独占していました。港湾に面した地域に、その歴史をとどめる古い建物と独特の商圏都市の風景をいまなお残しており、ユネスコの世界遺産にも認定されています。



船の窓から見た最初の光景は息をのむほどきれいでした。

タラ料理を食べ歴史を知る

バスを降りるといきなり魚市場に案内されました。タラ、カニが山と積まれ、北方海域で採れた豊富な海産物は日本向けにも輸出されています。日本ではタラちり程度でしか食べていませんでしたが、こちらではタラのムニエル、スープ、フライなど豊富なレシピがあることを知り、いくつも食べましたがこれが例外なく美味しい。料理法によってこんなに違うことを知り、この魚を見直しました。帰国したら、タラ料理を習熟したいと思ったほどです。



街並みは清潔感があり、多くの観光客と一緒にになりました。

ベルゲンの歴史は、火災の歴史そのものであることも知りました。商都として栄えた1000年ほど前から商圈を巡る紛争や略奪、海賊襲来などで火を放たれることも多く、そのたびに教会はおろか木造建築物はあらかた焼失していたということです。



日本の魚港とは違った風情がありました。

イギリス、オランダ、ドイツとの交易や大戦による敵対関係の戦争もありましたが、その後の復興で建てられた家屋は、やがて近代的でモダンな北欧文化を体現したような瀟洒な住宅や建築物になりました。世界遺産になるほどの美しい景観をつくったのです。



ケーブルカーで昇った山頂から見た雄大な景色は素晴らしいの一語で、しばらく見とれました。この景観を見に来る観光客が大勢来ており、写真撮影に追われましたが、絶景とはこういうものかと思いました。やはり実際に眼にする景観はとうてい写真などでは表現できないものでした。

山頂に、バカでかい奇妙な人形があり、大人気でした。筆者もちゃっかり子どものように握手してきました。



ノルウェー伝説・トロール人形と握手。怒らせるといたずらをするが、大切にすると幸せを運んでくる巨大なトロール人形でした。今もなお、ノルウェーに生き続けているそうです。

作曲家・グリークの家を訪問する

港街からバスで移動して、大作曲家エドヴァルド・グリークの家を訪問しました。グリークについては、筆者が中学生時代から姉の影響で、組曲・パールギュント、ピアノ協奏曲などさまざまな名曲を聴いていたので、とりわけ親近感がありましたが、ノルウェー人とは知りませんでした。



行って見ると丘の麓から始まるこんもりした森の中に、緑に包まれた瀟洒な家があり、小さな博物館になっていました。グリークが作曲していた部屋もそのまま保存されており、ピアノ演奏家としても名を残したグリークのピアノもありました。

この家の前方には湖が見え、緑の濃い森の中に息づく芸術家のたたずまいを感じました。あの爽やかなパールギュントの出だしの朝が、すぐに筆者の中で演奏が始まりました。誰でも一度は聴いたことがあるあの曲です。筆者は数え切れないほど

聴いてきた曲なので、心の中でも自然と鳴り出しました。この名曲もこの森と湖の中で作曲されたのでしょうか。感動してしばらくたたずみました。



グリークが今、そこにいるような雰囲気部屋でした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 34

2024/06/07

ヨーロッパ最大級の氷河が作るフィヨルドを船上から見学

今回はスエズ運河航海を断念してアフリカ大陸最南端を回った航海になったため、ヨーロッパの魅力ある国への寄港が出来ませんでした。そのためもあって、フィヨルドの船上見学は楽しみの一つに浮上していました。ノルウェーのベルゲン港を出港した後、船は観光の拠点になっているフィヨルドに入り込み、船上から 360 度

迂回して景観を見せるというのです。その様子は、12階のプールを囲んだ空間に乗船客が集まり、集合記念写真を撮るといった趣向です。



甲板に出てみると寒い寒い。前日、購入したフード付きウインドブレーカーで凌ぎました。背景に見えるのがフィヨルドで露出した陸地ですが、曇り空でやや霧もかかり、よく見えません。甲板の天井には、スクリュウ付きの大型救命ボートが設置されているのが見えます。

フィヨルドに船が入り込んだころ、船の7階の1周500メートル強の甲板廊下に出て、フィヨルドで出来た陸地の景観を見て歩きました。途中で、乗船している日本将棋連盟の棋士、高田尚平七段と出会い、甲板で記念写真を撮影しました。



高田七段とツーショットの栄誉をいただきました。

この地域の天候は、晴れたり曇ったり、雨が降ったりやんだり山の天気と似ています。気温は日本の冬並みで風も強い。冬支度をしてこなかった筆者は、ベルゲンでフード付きウインドブレーカーを購入しました。厳しい冬をしのいでいる国の製品ですから、日本で見るとは全く違ったもので、流石によく出来ています。購入と同時にスーツの上から着てみたら、別天地のように保温効果がありました。

船はフィヨルドの名所へと入って行きました。ノルウェー南西部にあるフィヨルドで、全長 113 キロメートル、最大水深 564 メートル。ヨーロッパ最大級の氷河から出来たノールフィヨルドです。午後 6 時半から、12 階の広場に行くと乗船客が集まっていました。



モヤにけぐるフィヨルドの景観です。天気(自然現象)次第の景観というのもオーロラに似ています。

薄日の差す天気と思いきや、5分後には曇りになり数分後には雨から氷雨になり震え上がりました。船が旋回を始めた時に合わせての記念写真でした。海上に開放された空間です。風があるし体感温度は5、6度ですから、前日、ベルゲンで買い込んだフード付きウインドブレーカーにマフラーを巻いて参加しました。



船の12階広場に集まって集合写真の撮影です。船が旋回して360度の景観を見せるという趣向でしたが氷雨の中で震え上がりました。

フィヨルドは、数万年もの時間をかけてつくられた氷河が自身の重みで斜面を滑り落ちながら地面を深く鋭く削り取り、深い谷を形成するのです。氷期の終わりごろ（約1万2000～1万5000年前）に氷が溶けて海面が上がったため、深い谷の一部が海に沈むことでフィヨルドができたという説明でした。

急に気温が低下してきたので、早々に集合写真を撮影すると、退散する人が続出してきたので筆者も早々に帰宅（部屋に戻ることを帰宅と言うようになってきました）。部屋の窓からフィヨルドに別れを告げていると、空は明るくなり、なんと薄日も差してきました。向こうに見える陸地では、色とりどりの家が見え、どこもかしこも緑の山と稜線がきれいな景観を作っていました。

この日の日の入りは23時19分ですから、まだまだ日は高いのです。いよいよスカンジナ半島から離れてアイスランドへの航海が始まりました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 35

2024/06/09

白夜の船内生活

アイスランドに向かったの航海は、白夜の船旅です。6月8日の日の出が午前2時41分、日の入りが午後11時30分ですから、太陽が隠れている時間はたった3時間あまり。部屋のカーテンを閉めておかないと、明かりに負けて寝付かれません。

船内の室温管理がうまくいっていないようで、筆者の部屋はひんやりして寒い。室温を最高にしていますが、コントロールがきかないらしく、寒いのです。体を動かしていれば寒さを感じないのかスポーツ関係のイベントはどこもほぼ満杯の盛況です。

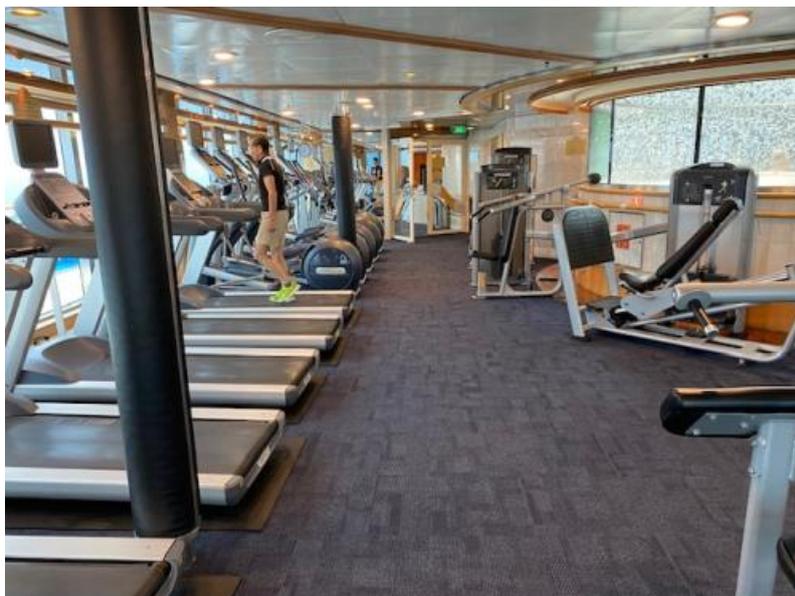
筆者の日常生活の一端を披露すると、ほぼ毎日通っているのは、オカリナ教室と社交ダンス教室です。オカリナは船に乗ってから習い始めたもので、初心者ですからいい音が出せない状態が続いています。

ダンスは、歩行強化のために20年前から近所のダンス教室に通い、年に1,2回のデモにも出演して鍛えてきましたので船では上級のクラスでも踊れるようになりました。

船内生活の写真集を作りました。



ヨガ教室はいつも満杯の人気です。写真は、全体の一部だけです。



アスレチッククラブも時間によりますが、満杯状況も少なくありません。

筆者は隣室のサウナを利用するのが日課になっています。



写真は折り紙クラブ。このような少人数の趣味・習い事のプログラムが多数あります。例えばこの日の船内新聞の案内をみると、お茶サロン、般若心経を唱える、切り絵、大喜利得意な人の集まり、ペタンクを楽しむ、水彩画教室、お手紙書き方、トランプマジック、各種ダンス教室、日本語・英会話教室、各種教養講演、映画、太極拳、浴衣を着て踊る会・・・まだまだキリがありません。



船内のあちこちに、写真のようなコーナーがあり、自由に使用できます。大抵は読書、PC などの操作で趣味や仕事、談笑の場などに利用されています。



寿司屋もあります。ネタはすべて日本から持ってきたもので、世界各地の魚の提供は禁止されていると聞きました。衛生上などの問題のようです。女性や外国人が握っています。写真は上寿司でこれで5千円です。寿司飯も国産のコメで美味しくいただきました。カウンターに座って握ってもらうという方法はなく、すべてこのようなセットの寿司提供です。



生バンドも毎日演奏しています。夜になると時間を区切って出演しますが、フロアもあるので音楽に合わせてダンスを踊ったり、ゴーゴーで盛り上がっています。主催者が設置する各種催し物の夜は、毎回、満員の盛況です。レストランでボックス

に料理を入れて持ち込み(無料)も可能なので、大変、便利です。飲み物も、ワイン一杯500円程度ですから、割安感があります。



「今日のランチはラーメン・餃子らしい」というので行ってみたら、写真のようなトレイでした。ラーメンっぽいものに、餃子2個、麻婆豆腐ごはん、ザーサイもちょこっとあってま、久しぶりの中華ご飯に満足でした。



この日は全員の防災訓練も行われました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その36

2024/06/10

動く地球表層の岩盤(プレート)の上に立つ

氷河と火山の国、アイスランドの首都・レイキャビクへの上陸は、寒空の中で始まり
ました。首都としては世界最北の北緯 64 度 8 分です。この日の日の出は午前 3
時 3 分、日の入りは午後 10 時 24 分ですから白夜です。

アイスランド旅行が日本人に人気があると聞いていたのですが、筆者には大きな関
心事が2つありました。一つはプレートテクトニクスの現場が地上に露出している
のをこの眼で見たいという願望と、世界で最も男女平等を実現している国の現実
を見てみたいというものでした。

プレートテクトニクスは、地球の表面を覆っている厚さ数十キロの岩盤(プレート)
が常に移動しており、その岩盤が地球の地表に10数枚あるというのです。プレ
ートがぶつかり合う場所で地震が発生し、アイスランドと日本は地震国・火山国・温泉
国として共通の運命にあるのです。

プレートが露出している場所に行くバスツアーに参加しました。噴火した溶岩で
できたレイキャネス半島の荒れ果てた荒野の中でバスを降りて歩いて行きました。奇
妙な橋が見えてきました。その橋こそ、北アメリカプレートとユーラシアプレートを
結んでいる橋なのです。

何十億年という地球の表面の岩盤の移動で北アメリカプレートとユーラシア大陸
プレートがこの地で出会い、それが地上にそのまま露出して、今なお年間2センチ
の移動をしているというガイドの説明に興奮を覚えました。



冷たい風を避けた防寒具を着込んで、プレートテクトニクスの「現場」に立ちました。

筆者が立っている写真の向かって右の岩盤が北アメリカプレートで、左の岩盤がユーラシアプレートです。その裂け目をつないだ橋がバックに見えます。両方のプレートが押し合っているのでしょうか。ユーラシア大陸プレートをたどっていけば、日本列島を載せているプレートにつながっているはずです。

こんなプレートの出会いの現場に立つとは夢にも思っていなかったので興奮しました。1970年代になってからプレートテクトニクス論が日本でも盛んに紹介され、それを知った筆者は多くの文献を貪るように読みました。今ではすっかり忘れてしまいましたが、その興奮がよみがえったのです。

女性大統領が当選したばかり

今月1日、アイスランドでは大統領選挙がありました。投票率は約80%。12人が立候補し半分が女性です。女性候補で投資会社経営者のハトラ・トーマスドッティル

さん(55)が当選して8月1日に就任するそうです。アイスランドでは2人目の女性大統領です。最初の女性大統領は、1980年に当選したビグディス・フィンボガドゥティルさん(94)で、世界で初の女性大統領として話題になったそうです。

アイスランドの国会議員は、男女ほぼ同数ずつです。世界経済フォーラムが発表する「ジェンダーギャップ報告書」で初版の2006年から14回連続1位になっています。世界で最も男女平等に近い国として知られているそうです。

ツアーのガイドさんの説明では、アイスランドには専業主婦はいないので、子育てや家事も男女平等でやります。育児休暇は、夫婦できちんと取ってお互いに助け合って子育てします。教育費と医療費はタダ。ただし給与のほぼ半分が税金でもって行かれるので、物価高の中での生活はそれほど楽ではないと言います。とはいうものの、日本に比べれば遙かに優れた福祉国家になっています。

人口僅か38万人の国ですが、悩みはそれなりにあるのでしょうか。そのひとつがアルコール依存症が比較的多いと言うのです。長くて暗い冬の期間、アルコールに走る人が多いと言います。ネットで調べてみるとたいしたことではなく、年間のアルコール一人摂取量は、世界の国々では真ん中あたり。日本よりは多いですが、韓国、アメリカなどよりは少ない現状でした。

アメリカ大陸の発見者はコロンブスではない！

今回のツアーで最初に行ったのは、丘の上に立つハットルグリムス教会でした。アイスランドのランドマークタワーとして象徴的な建物で、遠くからはまるでアメリカのスペースシャトルの形にも見えました。そばまで行ってみると高さ74.5メートルある重量感に圧倒されました。ミサが始まるので中には入れませんでしたが、この教会の前に大きなブロンズ像があります。これはアメリカ大陸を史上初めて発見したアイスランド人のレイフ・エリクソンの像で、教会を背にして眼下に広がる市街地を見下ろすように屹立していました。



アメリカ大陸発見は 1492 年のコロンブスと知られていたはずですが、今では 985 年ころにエリクソンが最初に発見したと史実が書き換えられたというガイドさんの説明でした。日本の小中学校の教科書にも書いてあるということでした。エリクソンは、グリーンランドを発見して住み着いたバイキングの末裔であり、グリーンランドとアメリカ大陸を行き来していたとも聞きました。



このブロンズ像は、アイスランド建国 1000 年を祝って 1930 年にアメリカから贈られたものということです。強い逆光で正面からは撮影できないので、後ろから撮りました。

博物館の巨大画面でオーロラを見ました

ペルトラン博物館の巨大画面では、オーロラを見せてくれました。オーロラ見物のために日本からも多くの観光客が来るそうですが、運が良ければ見られるという自然現象です。こうして実際の光景を見る気分で巨大スクリーンで見るオーロラは迫力がありました。



余った電力を輸出

アイスランドのエネルギー源は、地熱発電や風力発電だけであり、自然エネルギーだけで国が成り立っています。電車や地下鉄はなし。バスはすべて電気自動車です。電力は余っているので海中ケーブルでイギリスに輸出しているのです。この国の産業は、①観光、②漁業、③アルミ加工というのです。アルミ加工は電気を食うので、外国企業が、電気代の安いアイスランドに進出して経営しているということでした。



遠くから見た地熱発電所。この国は森は少なく、荒れ地のような平原が広がっていました。

年金平均 70 万円だが...

ランチに出てきたタラのムニエルも美味しかった。写真を撮るのをうっかりして食べてしまいました。タラ漁業が大きな輸出産業になっていました。

リタイア後の年金は、平均で毎月 70 万円相当と言うことにびっくりしましたが、かなりの物価高で生活は思ったほど楽ではないようです。ランチに 3 千円から 4 千円。夜のレストランの食事はワインを楽しんで一人 2, 3 万円ということです。

お土産ものを物色しましたが、ちょっと大きめのチョコレートが 1 枚 2000 円、コーンスター一枚 1500 円。ちょっと魅力的なストールは 4 万円と言う値札でした。一緒にツアーに参加したご婦人たちもこの値段には驚いて、財布は出てきませんでした。

アイスランドの一日だけの上陸ツアーは、盛りだくさんの見聞の中で白夜は暮れていきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 37

2024/06/14

船内の大劇場で乗船客主体のイベントを開催

「地球一周中間発表会」という催事があることは、繰り返し船内新聞でも告知があったので知っていました。10 日ほど前から船内のあちこちで、何やら準備する様子を見ていましたが、なに、たいしたこともできないだろうと見ていました。

先にも紹介しましたが、船内にはさまざまなテーマの集まり、グループが出来ており、多分その数は 50 くらいあるでしょう。そのグループの人たちが何やら趣向を凝らしてビスタラウンジという学校の講堂を思わせる広い会場で披露するのです。

演劇が出来るほどの広いステージもあり、ちょっとした劇場にも見えます。そのステージでグループが準備した演題で発表するというものです。聞けば、大人の「学芸会」というものだそうで、筆者はどこにも属していないので何も予定はなく、当日は見物人として覗くくらいの気持ちでいました。

突然の申し入れにびっくり

前日の 6 月 12 日の夕方、船内を歩いていたら突然、韓国の女性から呼び止められ「明日のヨガの会で出て欲しい」という相談を受けました。ヨガの会が盛況であることは見て知っていましたが、やったことはない。聞けば、ヨガの会の有志がステージに上がり、音楽に合わせてゴーゴーを踊るので、それに合わせてステージ下のフロアでジルバを踊ってほしいと言う話です。

リーダーになる男性が 1 人どうしてもいないので、是非、お願いしたいという申し入れです。ダンスレッスンのときに筆者がジルバを踊っていたのを見ていた婦人が、船内で歩いているうち出会い頭に思いついての懇請でした。

予定がなかった筆者は、これを引き受けました。ぶっつけ本番の「出演」です。多少不安はありましたが、学生時代にジルバに狂っていたことを思い出し、なんとかなるだろうという気分でした。

地球一周中間発表会 昼の部		(出演時間目安)
1	チーム三線	13:30~
2	プロデュース 117 (キッズ)	
3	カルチャースクール おはよう太極拳	
4	はじめくん	
5	ミニ琴と胡蝶 平家物語	14:00~
6	カルチャースクール ヨガ	
7	DHARMA BUDAYA	
8	箏笛教室	
9	ききヨガ	14:20~
10	カルチャースクール 社交ダンス A	
11	ベトナム語話劇団	14:30~
12	伊勢音韻の会	
13	QI GONG EXERCISE	
14	カルチャースクール 社交ダンス B	
15	Janeとフレンズ	15:00~
16	箏笛同好会	
17	プロデュース 117 (リープハイ)	
18	Miyano	
19	広場ダンス	
20	ウクレレとオカリナで歌おう!	
21	小倉紙風太鼓	
地球一周中間発表会 夜の部		(出演時間目安)
1	プロデュース 117 B ガールズルール	20:00~
2	ZUMBA	
3	中文教室	
4	入門太極拳	
5	あさりちゃん	20:30~
6	スジン&はじめくん	
7	117ダンスクラブ	
8	24式太極拳	
9	そねっちのジャズギター	21:00~
10	ボッサ・アミーゴス	
11	初めての社交ダンス	
12	踊りのミチグループ	
13	プロデュース 117 A TOXIC	21:00~
14	La fleur	
15	Special Guest	
16	日本語教室の仲間たち	

当日、早めに会場に行くと、すでに始まっており、驚いたことにこの日の昼と夜で37演題の発表があることでした。終わってみれば延々6時間に及ぶ船の「学芸会」でした。



ステージ下まで繰り出でのチーム体操？でしょうか。力作でした。



楽器に合わせて詩の朗読もありました。どちらも聴かせました。

日中韓・ベトナムなど国際色豊かですが、日本人主催が圧倒的に多く、その中に外国人が混じっているという感じです。出し物は、歌と踊りが多く、民族楽器の演奏や子どもを交えた体操もありました。

急ごしらえの学芸会にしては、どの演題もなかなかの出来映えです。

アイスランドから次の寄港地のニューヨークまでは少々日数がかかるので、その間、船内での余興大会で盛り上げようという PEACE BOAT の思惑でしょうか。



気功の披露もあり、会場と一体になった演技でした。



出番が回ってきました。パートナーさんとして踊る韓国婦人は、年齢不詳ですがプロポーションのいい方で、見るからにダンスの出来そうな方でした。しかしジルバ

はそれほどやったことはないそうで、どうやらお相手もぶっつけ本番の様子で「安心」しました。



にわかコンビのジルバでしたが、船の揺れに乗って？うまく踊れました。

曲目が流れてすぐに始まりました。ステージの上では、老若男女が軽快なステップを踏んだり、体を動かし、それが音楽に合っているのです。終了後にわかったことは、ヨガが終わると毎日、練習に励んでいたということでした。

筆者も、踊り始めると「昔取った杵柄」という古い言葉で言えるほどに、軽快にパートナーさんを回し、自身も船の揺れに合わせて踊るという得意技を発揮して、あっという間に制限時間を終えて、大喝采の中で退場しました。この機会にヨガの会にと誘いを受けましたが、それは丁寧に断って早々に退散しました。

日本のお札のリニューアルが心配事

ランチの食卓で話題になったのは、日本のお札のリニューアルのことです。千円、5千円、1万円札の肖像が変わるのは7月3日と聞いています。すでに一部の街の

両替屋では、日本のお札は間もなく新札が出るという理由で拒否するという話も出ています。外貨が手元にないとタクシーや街頭の店ではカード決済が出来ません。そこへこんな話が出てきたのです。

セーシェルでタクシー観光したあとの支払いで、ドル札を出したら 2008 年以前の発行年のものは取らないと拒否されたそうです。持っていたドル札は古いものばかりでしたが、いずれもいま使われているお札です。居合わせた 6 人が急いでお札を出し合ってギリギリの金額がそろったそうですが、日本のお札も新札が出たら古いお札は拒否されるのではないかという心配事です。

タクシーの運転手さんの話では、客からドル札(外貨)を受け取って、現地の銀行や両替屋に持っていき現地のお金に替えようとしても、発行年が古いと出来ないということでした。いま流通しているかどうかの判断ではなく、現地の金融筋の意向だという話でした。

ニューヨークに行ったら、少々多めに両替しておかないと中南米や南米ではどうなることか。そんな心配事で話題が広がっています。

船旅も後半を迎えて隣近所の付き合いに広がる

船は北極海に入ったコースをたどりながら北米大陸へと航路をとる予定でしたが、北の海が荒れており、天候不順ということで航路を変更し、一直線に北米からニューヨークへと向かう航路になりました。確かに海のうねりが大きくなり、船内の廊下を歩いていても左右の壁にぶつかりながらの移動になってきました。

昨日から甲板へ出るのは禁止。時化の海で船は大揺れに揺れています。これまで一番の揺れかもしれません。窓から見た海はモヤの中に呑み込まれており、船腹で打ち返されささくれだった波が恐ろしげな泡を巻いて限りなく繰り返していきます。



自室の窓から海を見るとモヤに呑み込まれて何も見えず、船腹にぶつかって出来た恐ろしげに渦巻く白い波だけが繰り返して行きました。

海上の風も強く外の気温は 6、7 度、水温も同じということで、屋外のジャクジー風呂も閉鎖になっていました。

船旅も後半に入ると、乗船客同士、顔見知りが多くなり、行き交う人が軽く会釈をすることが多くなりました。朝夕のレストランの食卓も、やあやあと挨拶する人が増えて会話も広がり、雰囲気が変わってきました。

筆者はこれまで 4 回の講演をしました。学校給食は世界一、沖縄返還の密使・密約問題と真実の追究、イベルメクチンとコロナの真実、野口英世のノーベル賞物語がそのテーマでしたが、いずれも好評をいただき、知らない人から「面白かった」という感想をいただいていた。

今後も新札の肖像替えで登場する北里柴三郎物語などいくつかのテーマを準備しており、PEACE BOAT 関係者からも相談を受けるテーマも出てきました。構想

研究会創設 25 周年記念シンポジウムを自分なりに総括する講演も準備を進めています。

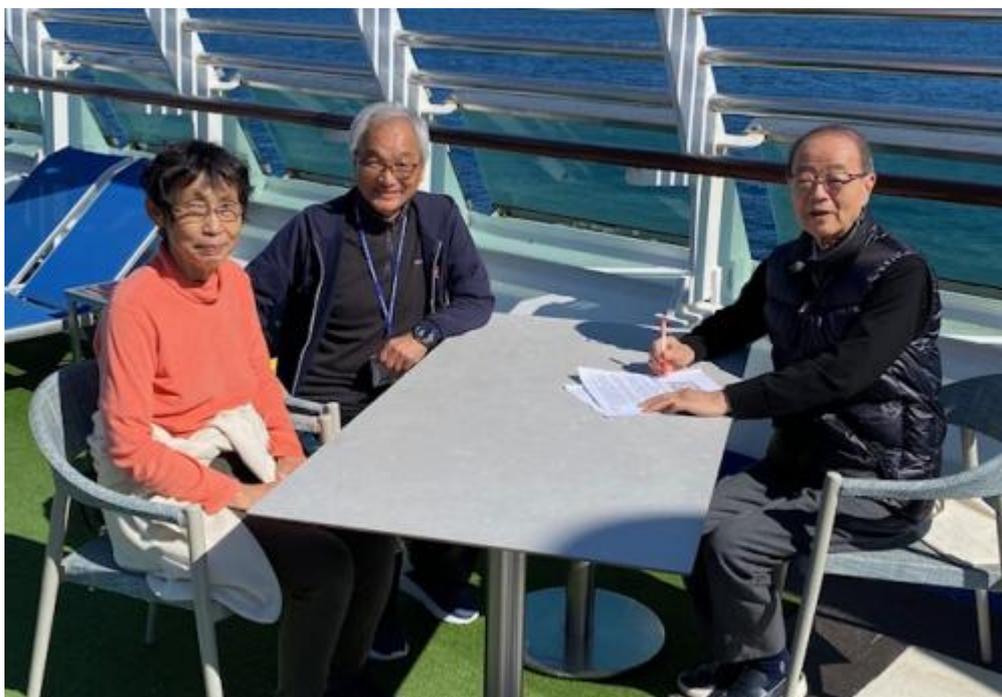
PEACE BOAT で世界一周の旅—その 38

2024/06/17

広島県から参加した元教員ご夫婦

PEACE BOAT に乗船している方々は、実に多彩な経歴を持っている人ばかりです。その中から筆者が何かの縁で知り合った方をブログで紹介したいと思います。

最初に登場していただいたのは、広島県三次市から参加した藤原孝次さん(68)、ひとみさん(66)ご夫妻です。筆者が「日本の学校給食は世界一」というテーマで講演した際に参加していただきました。



14 階、船の屋上でインタビューしました。

お二人とも定年まで小中高の教員をされていた方で、最初に会ったときから率直に語るお人柄が気に入りました。お二人とも教員 OB・OG ということから、構想研創設25周年記念シンポジウムを思い出し、その後は日本の小中学校の教育について語り合う機会が増えました。

船旅も中間点を通過して、先日は有志参加の「学芸会」が開催されました。お二人は今回、社交ダンス発表会の出演は見送りましたが、船に乗ってからレッスンを受けており、8階のフロアで練習に励んでいる姿を時折見かけていました。ワルツ、タンゴ、ルンバ、ジルバに挑戦中で、船を下りるところにはかなりの腕前になっているでしょう。

PEACE BOAT は、持続可能な未来へ向けた自治体の取り組みを支援する国連の SDGs を推進しており、リベラル思考の活動をしていることも気に入り、このクルーズに参加したとのことでした。

外国旅行は、新婚旅行でハワイに行ったときから、ほぼ40年ぶりということす。2018年に PEACE BOAT に申し込んだもののコロナ禍で中断したため、今回の旅は待ちかねたものだったようです。

「1500人の乗船者ですから予想はしていましたが、若い方から年配者まで実に多彩な人生を送られてきている人ばかりで、講演や各種の集まりなどで交流が出来る、楽しい船旅をしています」

これまでの寄港で上陸された都市の印象などをお聞きしました。

最初に写真で見せられたのは、なんとライオン君です。南アフリカ共和国(南ア)の自然公園のサバンナで撮影したもので、昼寝を起こされたのか大きなあくびをして歓迎してくれたそうです。観光車両から至近距離の撮影であり、珍しい写真を手に入れました。



次に見せられたのは、茫漠と無数の砂丘が連なっているナミビア共和国の砂漠で撮ったものです。世界最古のナミブ砂漠は、無数の砂丘を連ねたような雄大な景観です。藤原さんは「砂の粒のきめ細かさを手のひらで感じました。数千年の自然環境の中で出来た奇跡の産物です」という感想でした。



小中学の教育問題で船内グループに参加

現役だったころは、二人とも初等中等教育の最前線で教師をしていたので、乗船客の若手グループが企画している「小中学校の教育を考える」会に参加しました。教育の立て直しなどを討論し、シンポジウム開催にも参加して教育問題の課題解決の提言もする予定とのことでした。

いま話題になっている工藤勇一先生の著書も何冊か読んで感銘を受け、「素晴らしい論点ですが、具体的に工藤先生の提示する教育現場を実現するには、大きなハードルがあります。しかしそれを乗り越えて教育再生をはかるための方策も考える必要があります」と言います。ひとみさんのご意見も同じであり、二人の意見を調整しながら発言していく方針のようです。

アジア・アフリカ・ヨーロッパと回ってきて地球を半周したことになりますが、諸国で見聞して何が一番印象的だったのでしょうか。

「先史時代の歴史的遺跡から現代の社会の様子まで、時空を超えて見聞して私たち夫婦の視野を広げる機会になりました。人間のやってきたことは、人種とか肌の色とかに関係なく闘争の歴史であり、人を殺し、勝ったものが略奪する人間の闘争本能を垣間見たところがありました。毎日が社会科の勉強のような気持ちです」

数学の教師らしい孝次さんの感想でした。リタイア後は地域の民生委員などいくつかの社会貢献の役職を委嘱されており、今回は多忙の合間を縫っての PEACE BOAT 参加でした。



ノルウェーのベルゲン市では、フロイエン山頂からの絶景をバックに記念撮影。世界には息を呑むような光景が随所にあることを知り、日本の風光明媚を一瞬、忘れるところだったようです。



セントポール大聖堂の前で。そのほか、ロンドン塔、大英博物館、ウエストミンスター寺院などを見学しました。ロンドン塔は13世紀から処刑する監獄にもなりました。ひとみさんは「多くの政治犯が処刑されていた話を聴いて胸が痛みました」と語っています。また「大英博物館」の見学では、諸国からの財宝・秘宝を集めた展示品を見て、英国の歴史的な「活動歴」を改めて認識したようでした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 39

2024/06/17

7人の「ウクライナ・ユース・アンバサダー」が乗船

停戦の気配がないまま泥沼化しているウクライナ戦争の不条理と戦場の悲惨さを PEACE BOAT から世界に発信するイベントが開かれました。ウクライナから参加した 7 人の「女性大使」が主催者になり、船の屋上の広場でアピール宣言をしました。乗船客延べ約 200 人が参加して大使たちを元気づけ、支援を約束していました。



横浜の出港時から乗船しているのは、在日ウクライナ大使館と PEACE BOAT が連携して組織した「ウクライナ・ユース・アンバサダー」7人のうら若き女性大使です。20, 30 歳代の若さあふれる華やかさがあり、船内でも目立っていました。



これまで船内のセミナーや講演で、ウクライナ戦争の悲劇だけでなく、ウクライナの歴史や文化を理解してもらうイベントを続けてきました。後半にさしかかり、一区切りの時期を捕らえて平和を訴えるアピール宣言を開催することにしました。



インタビューに答える 3 人のウクライナ乙女たち。

この日、船の屋上 14 階の広場には、次々と乗船客が集まり、用意しているプラカードを掲げて女性大使たちを支援し、ウクライナ国民を励ますメッセージを次々と発していました。

全員集合でアピール写真を撮影して、世界に発信して平和への願いを船上から訴えました。折しもスイスのビュルゲンシュトックでは、100 カ国・機関の代表(このうち 57 カ国は首脳級)が出席する「世界平和サミット」が開催されました。ウクライナのゼレンスキー大統領が自らの和平案の支持を呼びかけたこともあり、PEACE BOAT からの船上アピールはいよいよ盛り上がりました。



「大使」たちの主張を聞いていると、ロシアの侵略戦争なのに、長期化してくると世界の人々の興味が薄くなっていく。長引かせることはロシアの思惑でもある。興味が薄くして自分たちの立場を正当化していく。こうした訴えを聞いていると、やはり戦争は国家の勝手な思惑と主張から出てくるものだと思うざるえませんでした。



筆者は旧ソ連時代からウクライナには5回行ったことがあります。チェノブイリ原発事故調査団で行ったときは、いま石棺に封じ込まれた原発の前まで行き、かなりの被ばくをしました。また1万年前、マンモスハンターとして広大なユーラシア大陸に広がっていたクロマニヨン人の作ったマンモスの骨で作った住居や多くの石器類の遺跡を取材で尋ねたこともあり、ウクライナは筆者にとってことのほか親近感のある国です。

ウクライナは、世界の「美人国」の一つに加えられる民族であり、明るい気質はロシア人とは違った面を持っています。広大で肥沃な国土がいま戦場になっていることを憂いながら、これからも支援する約束をしました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 40

2024/06/19

自由の女神から始まったニューヨーク寄港

ハドソン湾に船が入って間もなく、早暁の薄明かりの中に自由の女神がぼんやりと浮かんできました。甲板に並んで待っていた乗船客から、一斉にどよめきが広がりました。アイスランドを出港してからちょうど一週間、北の寒い海を航海してきた閉塞感がありました。誰もがニューヨーク寄港を今か今かと待ち望んでいたのです。





船は速度を上げたように感じました。遠くぼんやりしていた景色がみるみる輪郭を表し、やがて摩天楼が次々と姿を見せ始めました。これまでの寄港地とはまったく違った、世界一の大都市の風格を見せ始めたのです。船から見る摩天楼は壮大な規模を誇り、やはりニューヨークは別格だなと思わせる景色が次々と移っていくことに改めてびっくりしました。船からの景色の迫力を感じました。



Wi-Fi 接続の不調に慌てる

どこの港へ接岸するときでも、船の Wi-Fi 接続が短時間、途絶えます。ニューヨークでも同じでしたが、少々時間が長引きました。しかし待てど暮らせど普及しません。イライラして部屋でくすぶっているうち、我が PC の不調に気が付き、大慌てで対応に追われましたが、そのうち Wi-Fi の契約時間が切れてしまったのです。船内の Wi-Fi 再契約の窓口に駆けつけると、ニューヨーク出港まで閉鎖ということになっていました。

船はニューヨーク港 90 番ふ頭に接岸しました。となりのふ頭には、ノルウェーからの大型客船(多分 1000 人以上が乗船)が停泊しており、接岸すると大きなマンションが二棟並んだような景観になりました。およそ 30 年間の話になりますが、ニューヨークには取材で何度か来ています。あのころの印象とどう変わったか。入国審査後に早速、街に繰り出しました。



PEACE BOAT が接岸した隣のふ頭に停泊していたノルウェーの豪華客船。

その大きさといい豪華さといい負けそうでした。

全体的な印象をいうと街がきれいになっていました。自転車の駐輪場があちこちの通りにあり、家族連れでチャリンコ散歩を楽しんでいる風景もあふれていました。人が集まるような場所には、警察官とは違う派手な制服を着たパトロール隊員の姿も見え、街全体のセキュリティへの配慮も感じました。

何よりもあの 30 年前と違ってホームレス、物乞いの姿は全くなくなり、きれいな街に変わっていることを感じました。

ニューヨークには 2 日間の停泊です。PEACE BOAT には多くのツアーが用意されていましたが、筆者は初日の夜にジャズ演奏の鑑賞、2 日目はバスでマンハッタン車窓観光とハドソン川遊覧クルーズに乗船して、川から街の景観を楽しむツアーに参加しました。

便利なことに 90 番心頭からニューヨークの中心街のタイムズスクエア、セントラルパーク、五番街などへは歩いて行ける距離にあります。散歩がてらと言ってもそれなりに距離はありますが、田舎者の見物には格好のコースでもあります。

PC 持参でレストランで執筆開始

日曜日のマンハッタンはどこもかしこも、ものすごい人出でした。観光客があふれており、レストランやコーヒーショップを覗くとどこも満杯。PC 持参をしてきたので、どこかで Wi-Fi 接続をしてこのコラムなどを書く魂胆でした。早々に繁華街を退散して港に近い比較的人出の薄い地域に戻り、すいているレストランでこのブログを書き始めました。



アメリカは流石にどの店も Wi-Fi 接続が簡単で、従業員がセットしてくれる店もあります。日本ではこうはいかないなと思いながらレストランを 2 軒はしごして楽しみました。PC を見せて作業するふりを見せると、すぐに店の端っこの邪魔にならないような席に案内してくれます。こうなるとチップもはずもうというものです。

こうしてニューヨークへの第一歩が始まりました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 41

2024/06/19

NY ジャズクラブの雰囲気浸った初日の夜

ニューヨーク初日の夜は、ジャズクラブに行って NY のジャズライブを楽しむことにしました。PEACE BOAT から 30 人のツアーバスで出発。マンハッタンの夜をバスの車窓から見物しながら目的のクラブハウスに向かいました。日曜日の夜、人出は相変わらずでアメリカ随一の歓楽都市の一端を見ながら、おのぼりさん気分になりました。



ジャズハウスの雰囲気満々の入り口でした。

目的のクラブに着き、入り口を一見してその雰囲気を感じました。この夜は、筆者たちの貸し切りという待遇です。編成は「The Creole Cookin' Jazz Band」で、すでにプレイヤー6人がステージに座って待っていました。トロンボーン、トランペット、クラリネット、ピアノ、ベース、ドラムスのセクステット(Sextet)です。

筆者は一番前から 2 列目の真ん中あたりで、プレーヤーとは数メートルの至近距離に座りました。如才のないにこやかなプレーヤー面々の表情がとてもいい感じでした。しげしげと拝見すると、どう見ても後期高齢代の人ばかりです。これが気に入りました。日本でもかつて原信夫とシャープス&フラッツ、有馬徹とノーチェ・クバーナなどトップバンドで活躍した元プレーヤーたちが、時たま仲間同士呼びかけあってフルバンドを編成して演奏してくれますが、いつも満員の盛況です。すぐにそれを思い出しました。

演奏が始まると、聞いたことのあるナンバーが次々に出てきて、プレーヤーも楽しんでいる様子が伝わってきます。ビールのボトル片手についついこちらも興に乗って、リズムカルに身体が動いていきます。ステージ前のせまいスペースにおばあちゃんが出てきて軽快にステップを踏み始めると、バンマスのトランペッターが喜んだ動作で歓迎しています。



誰も出てこないなので、ここは一番、筆者の出番と思ってすぐに加わり、往年のリズムカルステップでおばあちゃんと踊り始めると、次々と加わる人が増えてステージと客席は一体感で燃え上がりました。



会場と一体感のあるジャズ演奏で盛り上がりました。

昔、ニューヨークの他のジャズクラブに行ったことはありますが、踊ったのは初めてです。人生最後の「見せ場」と筆者は思ったかもしれません。休憩を挟んで、楽しい時間はあっという間に過ぎ去っていきます。休憩になるとバンマスも客席に座って談笑に加わります。筆者は、最も年配者の思われるベース奏者に礼を言うためステージに上がって素晴らしい演奏を褒め称え、ついでに「おいくつですか？」と聞いてしまいました。

なんと「88歳」といいます。「あなたは私の兄さんです。私は83歳です」と言ったら、顔をくしゃくしゃにして喜び、お互いにハグして喜び合いました。



ベース奏者の「88歳の兄」とのツーショット

帰りがけもう一度ステージまで行って、お別れの挨拶をして写真を撮り、とっさに持っていた手提げ袋にサインを書いてもらいました。隣で見ていたドラムスのおじいさんが、うらやましそうにしていたので、この方にもサインをお願いしてお別れしてきました。



子どもに還ってサインをおねだりしていただきました。

その昔、ジャズの本場のニューオリンズのライブハウスをハシゴしたことがあります
が、意気のいい若手や壮年代の演奏もいいですが、筆者はどちらかというとベテ
ランプレイヤーのスキル満点の演奏が好きな方です。演奏が進むに従ってステー
ジと客席が一体感になって、最後はお互いに身体が動き出して止まらなくなると
言うこともありました。

この夜は、ベッドに横になっても、ライブ演奏のあのリズムと音が身体の奥で鳴り
止まらずずっと鳴り響いていました。ニューヨーク初日の夜は、こうして暮れてい
きました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 42

2024/06/20

ハドソン川のクルーズ観光に参加

ニューヨーク 2 日目は、バスでの市内観光とハドソン川のクルーズ見学にしました。滞在は 2 日に決まっており、10 コース以上のオプションツアーのどれに参加するか迷いましたが、ハドソン川からの景観に期待しました。

バスはニューヨーク市街でも最も賑やかな地域を通過するコースをとったおり、最初に見せられてのが「トランプタワー」でした。ニューヨーク・マンハッタンの 5 番街にそびえる高さ 202 メートルの超高層ビル。ビジネスオフィスの上層階には、世界的な大金持ちが数多く入居しているようで、家賃は月額 700 万円とも聞きました。



トランプタワーの周辺は、見物人が多数集まっているようなので、敬遠して迂回しました。

セントラルパークの東側、アッパーイーストサイドのミュージアムマイル沿いにあるメトロポリタン美術館周辺は、観光バスがぐるりと取り囲みすごい人だかりの中になりました。広い敷地の中にスケールの大きい建物であり、この地域のミュージアムでは存在感抜群の感じでした。

絵画・彫刻・写真・工芸品・家具・楽器・装飾品など約 300 万点の美術品を所蔵しており、全館を一日で巡るのは不可能です。それを筆者らのツアーは、1 時間程度、見物するというスケジュールです。こちらのガイドさんに聞いたら、1 週間かけて見学しないと満足出来ないということでした。

「The MET」と呼ばれるほど貴族あるミュージアムですが、これが私立と聞いて驚きました。歴史のある美術館などの施設・建物は、公立が多いと思っていましたが、The MET は別格のようです。



メトロポリタン美術館の周辺は華やかさのある見物人であふれていました。

ハドソン川のクルーズに乗船しました

クルーズ船の集まっているハドソン川の地点にバスで行き、そこから船に乗り換えました。かなり大きな船で、乗船客は200人はいたと思います。速射砲のように早口のガイドさんの英語の説明でしたが、歴史的な出来事や数字がやたら多く、うまくキャッチ出来ませんでした。ニューヨークの顔になっている自由の女神像のすぐそばまで接近しましたが、そちらにも大勢の観光客が群がっているのが見え、ニューヨークの集客力は流石にすごいなと感じました。

船を下りてから五番街付近に戻り、ステーキハウスでランチしました。バカでかいステーキが出てきて参加した皆さんと共にアメリカの食の話題を語り合いながら、8割方食べるのがやっとでした。サラダもてんこ盛り、デザートも大きなケーキであり、いかにもアメリカに来たという実感が沸いた食卓でした。

街を散策しているうちニューヨークのコンビニを見つけました。写真で見ると小ぶりな入り口であり入ってみると、狭い空間に飲み物類と簡単なスナック類がぎっしりと並んでいるだけでした。お客さんも他に一人だけで、レジにはご老体が退屈そうに座っており、日本のコンビニとはまるで違う風景でした。ニューヨークのど真ん中のコンビニですから、こんなものなのではないでしょうか。



自転車で散策している人が目につきました。写真のように貸し自転車と駐輪スタンドがあちこちにあり、スタンドから勝手に借りてまたスタンドに戻すというシステムです。支払いもクレジットカードで出来るということですから便利です。日本でもこのシステムは広がるのではないかなと思います。



ニューヨーク滞在はたったの2日間であり、着いてすぐまた出港かあという気分でした。ニューヨークでの他の乗船客の行動を聞いたところ、オプションツアーに参加しないで、自分で地下鉄、タクシーなどを利用して目的の場所や施設を見物している方がかなりいました。船に乗っている間に旅程を組み立て下船して実行できるという利点をフルに使っているようでした。

夜になって船は離岸を始めました。瞬く間に夜に浮かぶ摩天楼は離れて行きます。もうアメリカに来ることはないのではないかと思っていると、突然、その昔ニューヨークの常駐特派員として異動する内示を受けたことを思い出しました。その話は、前任者が現地で問題を起こしたことがきっかけでニューヨーク支局を取り潰すことに発展し、実現できませんでした。

あのとき、特派員として出ていたらどういう人生になっていたでしょうか。船尾のデッキに寄りかかりながら、遠くで明滅するニューヨークの明かりに別れを告げました。船は一路南米のコロンビアを目指して航海を始めました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 43

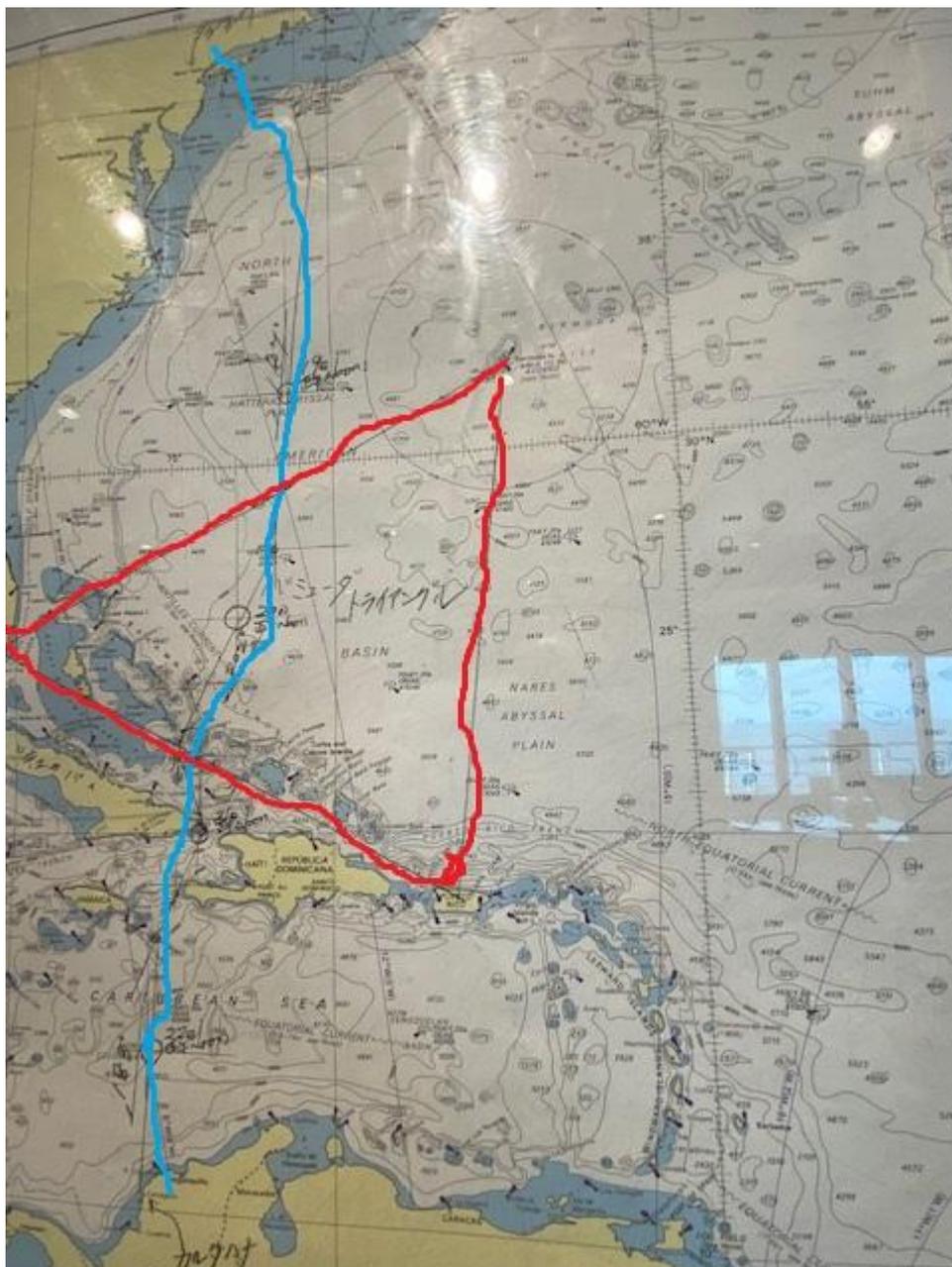
2024/06/25

バーミューダトライアングルに突入

多くの方はご存じと思いますが、フロリダ州マイアミ、バミューダ諸島、プエルトリコを結ぶ三角形の海域は、バミューダトライアングルと呼ばれています。バーミューダトライアングルは別名、「魔の三角海域」とも呼ばれており、海が荒れ狂うことで知られています。

面積は約 100 平方キロメートルで、この海域での船舶や航空機などの遭難が多く、過去 100 年間に多くの船や航空機が遭難し、跡形もなく消えているという衝撃事故が相次ぎました。

その魔の三角海域に、自分の乗船した船が入っていくとは思っていませんでした。毎日のように 7 階の PEACE BOAT 事務局に張り出される航海の海図は、最初こそ珍しさもあってよく見に行きましたが、そのうち忘れてしまうほど存在感が薄くなっていました。



海図の中の青い線が航海路です。赤い線の三角形がバーミュダトライアングルです。ニューヨークからコロンビアのカルタヘアに向かっている航海図です。

ニューヨークを出て2日目くらいから、船の揺れが大きくなってきました。食卓の話題も船が揺れる話が多くなり、ついに船酔いになったという告白も聞きました。そのとき筆者は忽然とバーミュダトライアングルを思い出し、航海海図を急いで

見に行つて、まさにそのトライアングルのど真ん中を航海していることに気が付きました。

ここまで2ヶ月余の航海の中で一番、揺れが大きく激しいのです。しかし船は、荒れ海に立ち向かうように速度を上げています。船が蹴散らしていく白い波頭も恐ろしいほど荒々しい飛沫をあげている様子が窓からも見えます。これで本当に大丈夫なのだろうか。そのさなかに乗員スタッフだけの救難訓練があつて、装備したスタッフが船の要所に配置され、訓練動作の確認などをしていますが、特段の緊張感もなさそうだし、いつもの訓練の一環であるようでした。

沖縄の日に PEACE BOAT と共催の講演会

6月23日は、先の大戦で亡くなつた「沖縄戦犠牲者への哀悼の意と世界平和を願う慰霊の日」になっており、PEACE BOAT でも沖縄慰霊や今の沖縄を紹介する催事などが開催されました。その中で筆者にも沖縄講演会の再演の依頼が来ました。

先の講演会は筆者の講演時間の勘違いから2回に分けて行つたことになりましたが、今回はさらに内容を発展させ、日本の民主主義を考えることまで広げることになりました。

歴史的事実を検証しない日本に民主主義はない

筆者の講演内容の前半は、前回と同様、国会にも国民にも真実を知らせない沖縄返還の密使・密約外交のすべてを検証した結果を紹介しました。

繰り返しになるので、ここでは詳しくは書きませんが、拙著「沖縄返還と密使・密約外交、宰相佐藤栄作最後の一年」(日本評論社)は、昨年度の日本新聞協会賞の候補作として推薦を受けたものでしたが、結果は賞の授与までには至りませんでした。しかし今でも、読んだ方からありがたい感想が寄せられています。

ま、そんなことは言いませんでしたが、事実だけ、と言っても筆者が調べたことはほとんどなく、すべてはアメリカの公文書公開、琉球大学の我部教授の研究成果、西山太吉氏らの資料公開訴訟の裁判資料、密使なった人の暴露書籍などで「丸裸」に露出されてしまった事実でした。この調査をした筆者は、アメリカの民主主義を担保する仕組みがよく分かりました。



場となったビスタラウンジ(船の中の大講堂)は、空席がないほど多数の人が聴講に来てくれました。

法治国家アメリカの沖縄返還時の体制

アメリカは沖縄返還をするための国家の意思統一をジョンソン大統領時代から始め、ニクソン大統領時には返還条件を決めていました。簡単に言えば「核の有事持ち込み、米軍基地の自由使用、返還時の補償は1ドルとも払わない」でした。日本はこうした国家の政策決定は何もなく佐藤総理が「本土並み、沖縄はタダで還ってくる」という言い方の繰り返しでした。

日米間の返還条件は、ものすごくかけ離れていました。それでも返還になったのは、佐藤が任期中に返還実現を目指したため、アメリカ側の要請にことごとく譲歩し、ともかくも形はどうであれ返還さえ勝ち取ればそれでいいという方針でした。それが今となっては負の遺産として残されており、米軍基地の永久的施設と自由使用、これに関わるさまざまな不平等条約、思いやり予算の継続です。

驚いたことは、こうした返還交渉でもアメリカは、法に則った手続きを進めており、日本側の特に佐藤総理の弱点をうまくつかんで日本側にすべてを譲歩させた交渉戦略は見事でした。米国の公文書公開でこうした実態がすべて露見してしまったのです。

返還へ日米の主張の整理

米国側主張(米・ケーススタディに明記)

- ①沖縄基地の自由使用
(ラスク国務長官の言葉「日本国内の米基地は永久に自由に使える」)
- ②核の有事持ち込みOK
- ③賠償金は1ドルとも支払わない

.....

日本側主張(佐藤の言明と国会答弁から)

- ①核抜き(非核三原則)で本土並み
- ②沖縄はタダで還ってくる
(米側が現状復帰で負担するべき賠償金は支払ってもらい返還する)

沖縄返還に臨む日米政府の戦略を見ると、アメリカは国策として一貫した方針があり、交渉術で勝ち取る戦略ですが、日本は政府内がバラバラであり、佐藤の思惑が先行しました。その足下の脆弱性をアメリカは利用したのです。

日本の民主主義は司法が崩壊させている

筆者の前からの主張ですが、三権分離で民主主義を担保しているはずの日本で、民主主義は形と言葉になっているだけであり、まったく機能していないことを講演でも語りました。

例えば沖縄返還でも、機密電信文を外務省職員から提供されたとして逮捕された西山太吉毎日新聞記者も、一審・東京地裁では憲法で保障された報道の自由による正当な取材活動として無罪であったものが、二審、最高裁でいずれも逆転有罪にされました。

西山記者 一審無罪から逆転有罪

一審東京地裁(山本卓裁判長)
「憲法で保障された報道の自由の行使。正当な行為であり無罪」
二審・東京高裁「自由な意思決定を不可能にした」懲役4月、執行猶予1年。
最高裁「人格の尊厳を著しく蹂躪した取材方法」上告棄却。二審判決が確定。

他の沖縄返還関連の訴訟でも、一審で原告勝訴となっても二審、最高裁でひっくり返された事例があり、他の重要な行政訴訟でも同じように二審・最高裁で逆転で負けて、国のいいなりになるという事例が余りに多いのです。

行政訴訟は、日本では勝てないというのが通説になっており、国民間には何をやっても変わらない国という諦めが先行し、本来優れた国家として興隆されるはずの国が停滞のままに放置されている現状を主張しました。

沖縄返還交渉は、民主主義崩壊の見本

*沖縄返還が良かった・悪かった
「あのような方法しかなかった」という意見
米公文書公開、当事者の証言、密使の暴露、
総理大臣と秘書官の膨大な日記
すべて何の意味もない。
国民は何を信じたらいいのか。
真実に勝る歴史検証はない。

講演後にさまざまな場所で乗船者と出会う機会があり、皆さんから分かりやすく
てよく理解できたという感想をいただきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 44

2024/06/27

コロンビアに惹かれたあそこ

バーミューダトライアングルの荒れる海を乗り越えて接岸するコーヒーの名産地コ
ロンビア随一の観光都市カルタヘナ。6 日ぶりの上陸に乗船客はみな期待するお
顔であふれていました。

筆者はコロンビア人のことで、一時期、深く取材で関与したことがあり、そのことを
しきりに思い出していました。日本列島の人類の「血縁」が、まるで飛び地のように
コロンビアに残っているというのです。見せられたコロンビア現地人の写真をみる
と、日本人そっくり。しかも筆者に解説した人は京都大学医学部の日沼頼夫先生で

した。成人 T 細胞白血病ウイルス(ATLV)の発見者でノーベル生理学医学賞受賞候補者になっていた先生です。

偶然が重なりました。札幌医大医学部病理学教室にいた研究者が、同時期に筆者に ATLV の抗体保有者がコロンビアに多いと言う不可思議な情報をもたらし、日沼先生に伝えたら「そうなんだよ。医学と人類学が交差したんだ」と言うのです。筆者はその続きの話が聴きたくて、京大・日沼研究室にしばらく通いました。

話はこうでした。九州地方や北海道の海岸沿いの居住者に多い ATLV 抗体保有者が、飛び地のように南米コロンビア地域にも多いことが病理学・血清学の研究で分かってきたというのです。それ以外の地域ではほとんど見られない。朝鮮半島・中国にもほぼない。日本人類学会に取材に行ったら、もっとびっくりしたことが発表・討論されていました。

日本列島の南側の海岸線に居住していた人たちが、氷河期の陸続きの時代、北海道から千島列島さらにアリューシャン列島を伝って北米大陸へと広がり、さらに南下して南米大陸へと広がっていったことを推測する世界地図と共に、遺伝子人類学の壮大なスケールの話に話題が広がっていました。コロンビアに否応なく引きつけられていきました。



初めて来た風光明媚なカルタヘナでは、さまざまな思い出がにわかに吹き出した場所でした。

カルタヘナってどこかで聞いたような

PEACE BOAT の旅程を見たときから「カルタヘナ」ってどこかで聞いたよなあという思いがありました。上陸して一日コースのバスで見聞しているときガイドさんに「カルタヘナって有名ですよ」とつまらないことを言うと「そうですよ。ずいぶん前から世界遺産になっています。それから遺伝子の保護もここから始まったのです」という言葉にあっと驚きました。

そうだった、遺伝子組み替えを視野に遺伝子の保全と確保、安全な移送についての「カルタヘナ議定書」は、1999年の条約特別締約国会議の開催地だったカルタヘナにちなんでつけられた名前だったのです。いまでは遺伝子の健全な保護、発展の世界的な基本ルール確立の論議では、よく出てくる議定書名であり、人の名前だったかなとも思っていました。

ATLVとカルタヘナ議定書。ここに来なければ、生涯二度と思い起こすことがないだろう事実にぶつかり、筆者の感動はいよいよ高まりました。

スペインが作った堅牢な要塞

堅牢な要塞は、半端なものではありませんでした。日本の城も一国の藩主・殿様を守った象徴的建造物ですが、ここの要塞をみるとお城などおもちゃに見えてきました。分厚い岩壁、基礎構造を重視した建造物は、見ただけで重厚さが伝わってきます。何に備えたのか。押し寄せる英・仏・オランダなどを原籍とする海賊でした。1741年には海賊船186隻、2600人が来襲したのですが、カルタヘナ軍は600人の勇者で迎撃し、ことごとく打ち破って勝った歴史がありました。

スペインはインカ帝国から奪った金、銀、エメラルドやカカオ、タバコ、香辛料などをスペイン本国へ送り出す港にしたので、難攻不落の要塞が必要だったのです。そして要塞の周辺にはコロニアル風の街並みが広がり、コバルトブルーの海と一年中安定した常夏の地は栄えていったのです。



見るからに堅牢不落の要塞。建造には、アフリカから 30 万人もの黒人奴隷が動員され、酷使されたという暗い歴史も背負っていました。



難攻不落の要塞都市には有り余る富が集まり、ポリバル広場を中心にカテドラルや旧宗教裁判所など、スペイン風の美しい建造物が多数、残っていました。

ガルシア・マルケスに出会った！

突然のバスのガイドで、ガルシア・マルケスの名前を聞いて、またまた興奮しました。1982年にノーベル文学賞を授与されたコロンビアの作家です。そのころ筆者はノーベル賞の取材で何回もストックホルムを訪れ、文学賞選考委員会のあるスエーデンアカデミーにも数回足を運び、ノーベル賞授与の最終決定の投票は、古風な銅製の蓋付きの壺に投票用紙を入れて決めるという壺を思い出していました。

マルケスが執筆していた住まい、と言っても瀟洒な石作りの建物ですが、バスはあっと言う間に通過してしまい、写真撮影は出来ませんでした。「予告された殺人の記録」、「百年の孤独」などの名作は、このような風土と環境の中で執筆されたのだろうか。マルケスの筆致は、ノンフィクション執筆の基本になるという思いが筆者に芽生え、貪るように読んだことを思い出しました。コロンビアを聞いたときになぜ思い出せなかったのか、我が身の記憶装置の劣化を嘆きました。



マルケスが執筆していたあたりも、写真で見るとような歴史的建造物が随所にありました。マルケスは学生時代に首都のボゴダからこの地に転居してきました。勉強

と執筆バイトで忙しかったそうです。コロンビア国立大学法学部のエリート学生だったそうですが、家の都合でカルタヘナ大学へ転校したということでした。

貧富の差があり治安が悪い国

駆け足で見学したコロンビア、カルタヘナ市ですが、治安が悪いことはガイドさんがよく語っていました。かつては麻薬生産・取引で悪名を馳せた国でもあります。麻薬撃滅は相当に功を奏したようです。しかし貧困と失業などの課題は残されていました。現在、平均月収 400 ドル、消費税 11%、男性は 58 歳定年とのこと。都市部と地方の格差が相当あるということでした。

1994 年のサッカー世界選手権でオウンゴールした選手が帰国後、レストランを出た後に口論となり、射殺される悲劇も思い出しました。怖い国という印象を世界中に広げました。

海沿いの瀟洒な風景とそよ風の吹き込むレストランで食べたランチは、日本人好みの海産物、特にエビを主体にしたもので、大変美味しくいただきました。そういえばコロンビアは世界一の美人の産地と聞いてきました。かつてのミスユニバースで何人も栄冠を獲得しています。



写真で見えるバナナの葉で来るんだ中身は、エビを焼いたり揚げたりした美味しい料理でした。写真の上方にある隣席の方の皿の中に見えます。皿の手前にある平たいものは、煎餅のようなパンのようなもので、これも美味しいものでした。

港に戻るバスの中で、もう一つ数奇な思い出が浮かんできました。日本とコロンビアの人類学・医学の共同研究を筆者が提案し、当時の笹川財団(現在の日本財団)に紹介して面倒なその手続きまで準備しました。財団からの助成金が付与されることになり、日本とコロンビアの研究者には大変感謝されました。そのときコロンビア政府から研究チームと一緒にコロンビアへ招待されましたが、社の都合で行けませんでした。新聞記者の身分という遠慮もありました。駐日コロンビア大使が名産のコーヒー豆を持って会いに来てくれたことを思い出しました。

こうしてコロンビアの思い出を書き換えながら、翌日は隣国のパナマに向かって出航しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 45

2024/06/29

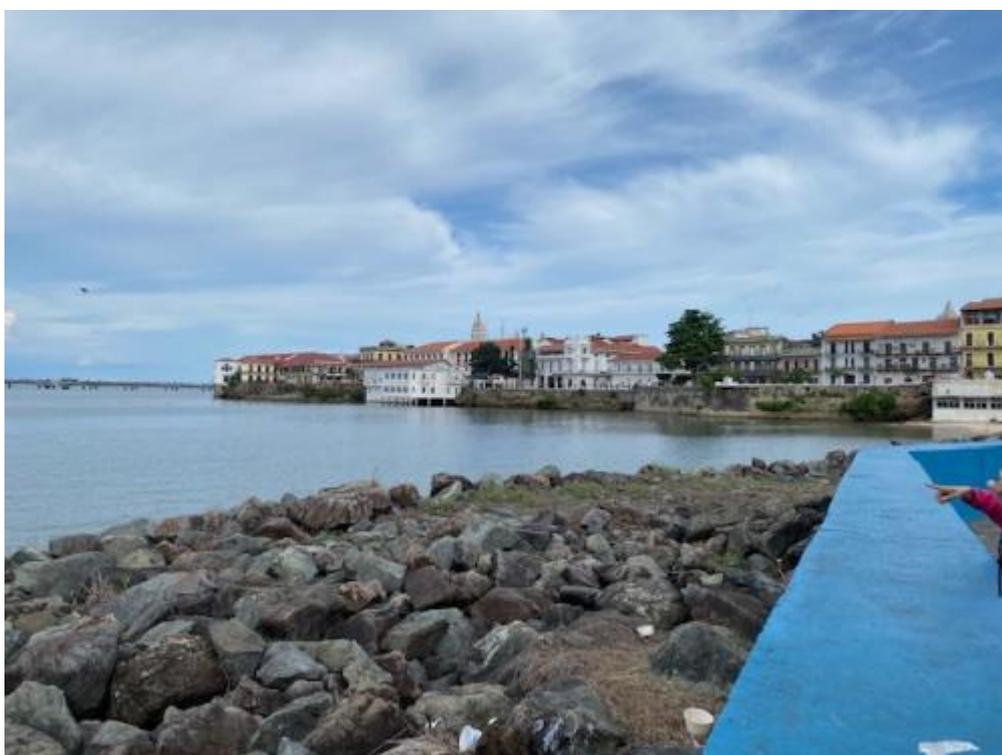
年中気温 30 度を超える熱帯雨林の国へ

中南米の大西洋・カリブ海と太平洋を隔てている南北アメリカ大陸の細長い陸地の中で、最も狭い地点にいわば穴を開けて船舶の通過を可能にしたのがパナマ運河です。その運河を目指して航海が続いていました。目指すはパナマ運河の玄関口である、パナマ共和国のクリストバルです。

港が近づくにつれて大きな船舶が、海上に点々と列をなして停泊しているのが見えます。巨大なタンカー、コンテナ船、鉱石船などで、いずれもパナマ運河を通過する順番を待っているのです。運河については、後述します。

接岸と当時にすぐに上陸が許可されました。オプションツアーに参加して、首都パナマシティへ向かいました。旧市街カスコ・アンティグア地域は、世界遺産に登録されたコロニアル建築のきれいな街並みが続いています。東西に細長い国で、面積は北海道よりやや小さめで、人口は 440 万人。

歴史的にカトリック系の信者が多く、立派なカテドラルが目につきます。気候は熱帯雨林地帯であり、雨期と乾期が交互に来ます。いまは雨期にあたり、はっきりしない曇り空が続いていました。道路の周辺は深い熱帯の森が続いており、色鮮やかな野鳥が見えます。港のバスターミナル付近は、ちょっとした自然公園になっており、ここには放し飼いなのか、はたまた自然に集まったのか分かりませんが、リスなど小動物やクジャクなどがそこそこに姿を見せ、楽しませてくれました。



パナマシティの旧市街地の見学会です



海岸線に沿って椰子並木のある海浜公園が続き、パナマ運河で働いた人のモニュメントがいくつも建っていました。

初めて知ったパナマ運河の構造

旧市街観光の翌日は、早朝から運河を渡る準備が始まり、船内放送でいよいよ運河に入ることが予告されました。運河は海と海の間陸に、溝のような回路を作り、その回路を船が通過するものと思っていました。ところが、ここまで来て初めて知ったのですが、パナマ運河は船が陸に上がって山を越えていく独特の構造で出来ているすごい運河でした。関心を持って調べることをしなかったのが、ここに来て興奮することになります。

グーグルマップによると、パナマ運河の広域図と拡大図は次のようになります。



大西洋と太平洋を結ぶ長さ 80 キロの運河は、難工事を経て 1914 年に開通しました。運河は大西洋側・カリブ海のコロンから太平洋側パナマ市まで続いており、ここを通過するにはほぼ 8 時間かかるというのです。

いよいよ運河に突入です

パナマ運河が近づいてきました。前述したようにパナマ運河が閘門(コウモン、ここでは水門と表記します)と次の水門に閉じ込められて水位を変え、徐々に上に上がって山を越え、そしてまた同じ方法で山を下って向こう側の海に出て行くというものです。

パナマックスという言葉を知りました。

	全長	全幅	喫水
パナマックス	366	49	15.2
PEACE BOAT (パシフィック・ワールド号)	261	32.3	8.1

パナマックスとは、パナマ運河を通過できる船舶の最大サイズを言うものです。PEACE BOAT の「パシフィック・ワールド号」は、そのいずれもパナマックスより

下回っているので通過できるのですが、世の中にはもっと巨大な船舶が多数あることを知って驚きました。

言葉で分かってても、7万7千トンの巨船が、実際にどうやって山を越えるのか。興味津々でした。前方の巨大な水門が徐々に近づいてきますが、全幅33メートルもある船が入るような場所ではありません。ところが、船はとても入れないと思っていた隙間を目指してゆっくりと巨船は進み、船を突っ込んだあたりでエンジンを止めました。そこからは運河に沿ってレールが走っており、船をロープで引っ張る動力車がゆっくりと船を引いて水門と水門の間に閉じ込めます。そして頂上にあるガトゥン湖から淡水を入れて水位を上げて持ち上げていくのです。

自分が乗っている船の状況は、自分ではカメラで撮影できないので分かりませんが、多分、遠目にはまさに陸の上に登る船に見えるのではないのでしょうか。



運河は、写真のように2列の水門回路があります。右側の水門がこれから船が入っていく水門です。手前にぐるりと船上から見学する乗船客が取り巻いています。

船の上は広々としていますが、下に向かって船体は急激に細くなっていくので、写真のような狭く見える水路でも浮かんだ状態で進めるのです。ただし、水路の壁と船の間は、数センチ程度にしか開いていないそうです。すれすれで水路をそろりそろり進んでいきます。

実際に船が徐々に上に行く様子が、周囲の景色を見ていると分かります。「上がってる、上がってる」という声があちこちで飛んでいました。簡単に言えば、洗面器に小さな船を浮かべ、周囲から水を足してやれば船は上昇していきます。あのアルキメデスの原理で船が安定して浮かんでいる状態を利用して、周囲の水かさをあげて船を上にあげるのです。アルキメデスの原理を彼が考えついたのは、お風呂に浸かっているときだと子どものころ習いました。ほんとかなあ……。

そんなくだらないことを思い出しているうち、上下 26 メートルもある水位差を水門の構造を利用して 3 か所で上に上げ、頂上部分にあるガトゥン湖に出て航行し、太平洋側の入り口の湖岸に来ると今度は反対に船を下げる水門を利用して太平洋の水位に戻し、広い海に進入していきました。全長 82 キロを渡るのに 8 時間かかりました。まさに巨船が山を越える。これは人間の英知でしょう。

太平洋側に出てみると、こちら側にもパナマ運河を渡って大西洋へ出る船が、多数、海上で待機していました。

上下 26 メートルを水門の構造を利用して 3 か所で上に上げ、頂上部分にある湖を航行して太平洋側の入り口に来ると、今度は反対に船を下げる水門を利用して太平洋に進入していきます。



運河の最終地点に差し掛かると、向こうに大きなアメリカ橋が見えてきます。

この橋を通過すると太平洋へと出ます。

パナマ運河は、スエズ運河をつくったレセップスの手で開発に着手されました。しかし難工事とマラリアの蔓延などで工事は中断され、その後アメリカが水門方式の運河を開発。10年の歳月をかけて1914年に開通しました。マゼラン海峡、ドレーク海峡などを回りこまずにアメリカ大陸の東海岸と西海岸を船舶が行き来できるようになったのです。

2000年1月1日から、運河はアメリカからパナマに返還され、その後はパナマ共和国のパナマ運河庁が管理・運営しています。

毎年の運河通航隻数は、13,000隻から14,000隻です。通航料以外の運河関連収入を含めると、2020年の総収入は34億ドルとなります。しかし液化石油ガス(LPG)の価格上昇を受けて通航料も急上昇を続けているといわれ、かつての

2倍になっているとも聞きました。世界の物価高の影響をもろに受けているようです。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 46

2024/06/30

朝の食卓にのぼった世界一住みよい国

午前6時半、筆者の朝の食事の時間です。5階の和食レストランに乗船客が三々五々集まり、5, 6人の食卓が数十ある大きなレストランで朝食が始まります。メンバーは毎日、変わります。先着順にテーブルに座っていくので、さまざまな方々と同席になります。2か月の船旅ですから、お顔を見ればああ、あの方かなと名前は知らなくても顔見知りになります。

朝の食卓は、昨日の反省会と今日の予定の期待感とで、話題が広がるのがほとんどです。大体は話上手なご婦人がリードして話は際限なく広がっていきます。

「今日は世界一幸せな国に上陸するんですよ。ワクワクだわねえ」という発言に、食卓一同、顔を見合わせながら発言したご婦人に釘付けとなりました。聞けば、寄港するコスタリカは、イギリスのシンクタンクの調べで、世界一幸せな国の指標でトップになったというのです。部屋に帰って調べてみると、イギリスの「ニュー・エコノミクス財団」が発表している「地球幸福度指数(Happy Planet Index)」の2020年の結果によると、コスタリカは幸福度で世界トップになっていました。

教育費、医療費は基本的に無料。環境政策にも実績を出し、高い教育レベル、高い平均寿命など中南米ではトップにあるようで、これまでもたびたび、この種のラン

キングでトップになった実績もありました。ちなみに日本はと見ても見当たらない。ない、ないと探して 57 位で発見。あったからほっとしました。

軍隊を持たない国

この国を国際的に有名にしたのが軍隊の保有を禁止する憲法を 1949 年に制定したことです。87 年にはその功績などでノーベル平和賞を授与されています。

パナマのすぐ隣の国です。面積は 5 万 1,100 平方キロで九州と四国を合わせたくらいです。人口は 515 万人(2021 年)で、東京都のざっと半分です。カトリック教が国教ですが、憲法で信教の自由を保障しています。現在は雨期ですが、最高気温が 30℃前後、最低気温が 18℃前後で、雨が不規則に降ってきますがまあ、過ごしやすい土地のようです。



バスの車窓から見た熱帯雨林の景色。終日、雨模様であり深い緑の山地は、日本の森とよく似ていました。松の枝のように張り出している樹木もありましたが、よく見るとまったく違う樹木であり、熱帯地方の林相は緑の重層でした。

コスタリカと聞いて、選挙の「コスタリカ方式」を思い出していたので、訪問したら真っ先にそれを聞きたいと思っていました。何だろうか、コスタリカ方式とは。ネットで調べて見たら、びっくりすることが書いてありました。

ホンモノのコスタリカ方式は有権者と議員の癒着を防ぐ制度

小選挙区比例代表並立制の選挙戦術の一つ。同じ政党または友党に競合する候補者が存在する選挙区では、1人を小選挙区に、もう1人を比例区に単独で立候補させ、選挙ごとにこの2人を交代させる方式である。

それはなんとなく分かっていましたが、それと国のコスタリカとどんな関係があるのだろうか。ネット解説によると「コスタリカでは、選挙区内有権者と議員との癒着を防ぐ目的で、国会議員の同一選挙区における連続再選を禁じたもの」とありました。なんと崇高な制度ではないでしょうか。

日本の「コスタリカ方式」とは、なんの関係もない立派な政治目的を持ったコスタリカの実選挙制度でした。小選挙区比例代表並立制導入当時、森喜朗・自民党幹事長がコスタリカの実選挙制度を参考に命名したとありますが、コスタリカの人々には恥ずかしくて言えない命名に呆れてしまいました。



ショッピングセンター内には、世界的に有名なブランド店を始め、多種類の店舗が並んでいました。日本ブランドもありました。ピッカピカで清潔。ゴミの分別もきちんとされており、これまで訪問したどの国よりも清潔感がありました。

船から 2 時間かけて首都のサンホセへ出向きました。車窓から見る景色は深い森に包まれた環境で、この日は終日雨模様でした。道路は、よく整備されており、行き交う車は韓国車が目立ちました。バスから降ろされたのは、どでかくてしゃれたショッピングセンターでした。ここを拠点にあとは自由行動で、勝手に街を散策して、また 2 時間かけて夕方に船に戻るというコースです。

見通しのいいコーヒーショップにゆったりと座って、しばらくこの国の人々を観察することにしました。最初に気が付いたのは、ここはヨーロッパのどこかの国ではないかという錯覚でした。大人も子どもも、男女とも実に整った美形のお顔であり、女性は均整のとれた金髪が多い。思いのほか、ワンちゃんを連れている人が多いことにも気が付きました。



ワンちゃんが次から次とやってきます。どの犬も毛並み鮮やか、よく訓練されており、行き交う人に話しかけられるとちゃんとお行儀良く振る舞います。生活環境の余裕が、ワンちゃんの振る舞いにも出ているようです。



ワンちゃんトリミングのお店は、外からよく見えました。実にお行儀良く毛作りを受けており、ワンちゃんと息の合ったトリマーの見事な手さばきに見とれました。

子ども連れの人も多くいました。子どもたちの服装や仕草・行動を見ていれば、大人や社会の様子も見えてきますが、どの子もいい子に見えます。ふざけあいじゃれ合うのは、どの国の子どもも共通ですが、お母さんたちの様子を見てみると、実に落ち着いています。雨降りの中でスクールバスを待っている団体にも出くわしましたが、バスが来ると子どもに続いて大人という順番が決まっているのか、実に見事な流れで乗っていました。

世界一幸せな国の一端をいやというほど見せられました。年収、賃金、社会制度、企業環境などから人の幸せ感を測りがちですが、人々の動作・表情を見ているだけで、幸せ感が伝わることを初めて実感しました。



国民が誇りにしている新古典的様式の国立劇場。この建物を守るために戦争をしなかったと言われているそうです。

翌日の朝食テーブルでは、前日見てきたコスタリカの話題になりました。メンバーは全く違っていました。意外なことを見聞したご婦人もいました。港の近くの地域には、物乞いがいたし、とても世界一幸せな国ではなかったという報告です。皮膚の色などから原住民の系統らしく、貧富の差、失業率の改善などこの国にも課題があることを知りました。駆け足で見聞したコスタリカですが、訪問した国の中でもいい印象を持った国の一つでした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 47

2024/07/03

陽気な歓迎と高い物価

中南米3つ目の国・メキシコは、入国審査もないフリーパスの入国でした。太平洋に面したメキシコの重要な貿易都市のマンサニージョ市は、接岸した岸壁から歩いてすぐ、観光都市風の陽気な歓迎の雰囲気になりました。



船を出ていきなり、美男美女の歓迎グループに取り囲まれて記念写真。楽しい国への第一歩という感じでした。

筆者は、風邪気味のため大事を取って出歩くことは避け、お昼からのメキシコ料理ミニレッスンのツアーに参加することにしました。

船内の温度調整には、乗船者がみな不平不満を漏らしており、筆者の船室の温度調整はきかず、レストランはやたら肌寒く、外は暑い夏の季節というのに、船内はクーラーが効きすぎて半袖シャツに何かを羽織っている人がほとんどです。エアコンが効かないようで、診療所に薬をもらいに行ったら、多数の方が列を作っていたのにびっくりでした。

すりつぶすだけのメキシコ料理だが・・・

メキシコ料理は、時たま東京のメキシコ料理専門のレストランに行っていたので、馴染みがあるので期待して参加しました。バスで市場を見物してから景色のいい海岸に面したホテルに到着しました。

各自のテーブルには、トマト・タマネギ・唐辛子の入った石臼が用意されており、早速、料理に取りかかりました。写真で見るように石臼の食材を石の棒で力任せに砕く作業です。





食材を細かく砕くというのですから力仕事です。料理とはほど遠いものでした。
岩塩をパラパラと入れただけでできあがり。

食べてみると超激辛。生の唐辛子を潰して入れているので当たり前ですが、これが思いのほか美味しい。トマトとタマネギ。これを潰して塩味だけ。こんな簡単レシピ初めてでしたが、意外と美味しい。ただ激辛なので、みんなハーハー泣きながら食べていました。筆者は半分、残しました。

続いて出てきたのは、またまた、トマトとタマネギ、そしてアボガド。トマトとタマネギは、今度はナイフで刻んでまぜこぜにしてアボガドを入れるだけ。岩塩パラパラ。これって料理でも何でもないなあなどと思いながらちょっと味見をしてみるとこれまた意外と美味しい。

トウモロコシの煎餅のようなものが配布され、そこにこの餡を盛って、上からチーズと生クリームを散らしてかぶり付きました。食べにくいのですが、メキシコ料理は

基本的に手で食べるものですから、ナイフ・フォークは要らない。手づかみでかぶり付く。食べてみるとこれまた美味しい。先ほど激辛で残しておいたものを少々入れてみると、辛みが効いてさらに美味しい。



メキシコのコロナビールを飲みながら、たちまちご機嫌のランチ会となり、なんだかだまされたような思いで両手でかぶりつく、大騒ぎの料理レッスンでした。

日本の円安を知って買い物にも影響

昔、日本円が強かった時代、外国に行ってブランド品を買いあさる日本人観光客は、現地の人からバカにされているような感じでした。筆者は、ヨーロッパで何度か、そのような光景を見て、恥ずかしい思いをしたこともありました。

しかしいま、ご婦人たちの買い物を見ていると、実に手堅いのです。スマホ片手に値札の数字を日本円に換算しては、品定めをしています。「高い?」、「安い?」こんな会話が聞こえてきますが、大体は「高いね」という言葉に落ちついています。日本円が安いので、高く感じるのです。

PEACE BOAT で乗船者に配布しているパンフレットに、諸外国の現地価格と日本の物価を比較する数字があります。ファストフードのハンバーガーを例にして日本と諸外国の価格比を示していますが、日本のハンバーガーは、半分から 3 分の 2 程度の価格です。

これを逆に外国人から見ると「やす～い」となります。この春、ヨーロッパに出張から帰国した人に聞いた話ですが「帰国してほっとしています。日本は物価が安いし食べ物美味しい」というのです。その実感が、外国旅行してよく分かりました。アイスランドのコンビニでみた板チョコが 2000 円だったのでぶったまげましたが、現地の価格が高いのではなく、日本円が安過ぎるのです。



現地の豊富な果物類。かつてのような割安感は感じませんでした。

この日の夕飯の食卓でお土産物の値段の話になり、国際通のご婦人が「中南米でこんなに高いお土産物って初めてです」と語っていました。円安になると輸出産業が伸びます。安い日本製製品が外国で売れるからです。

大もうけした製造業が利益を内部留保してきましたが、このところようやく人件費増加に回すようになりました。しかし設備投資による次世代挑戦にはなっていないように筆者は思います。そんなことを考えながらメキシコを後にしてカナダへ向かいました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 48

2024/07/05

新札発行の肖像が変わった

7月3日、日本のお札の肖像画が変わったことにちなんで、千円札の肖像になった北里柴三郎の物語を船内で講演することになっていました。



旧札を街の両替屋に持っていっても替えてくれないといううわさ話も聞いていま

したが、船はいま太平洋上をアメリカ大陸に沿って北上しており、そんな心配もなく北里が惜しくも第1回ノーベル賞受賞を逃した話をしました。



会場には大勢の乗船客が聴きに来てくれました。

筆者がこの話を知ったのは、1988年の年が明けてすぐでした。京都大学の矢野暢教授がノーベル財団から入手した資料の提供を受け、第1回ノーベル生理学・医学賞の審査内容の詳細を知って度肝を抜かれました。もちろん、日本では何も知らない時代でしたから特報することにして、何日もかけて原稿内容を練りました。

北里の業績は、今でいう免疫療法の基本になったものであり、ワクチン開発への考えにもつながっていった大発見でした。抗原抗体反応の基盤を解き明かしたのもであり、後年、遺伝子レベルで生体が抗体をつくる仕組みを解き明かした利根川進先生の大発見へとつながっていきます。こうしてみると免疫の基礎的仕組みの歴史的解明には、日本人研究者がものすごい貢献をしてきたことを改めて認識しました。

船がアフリカ大陸のガーナ沖を通過した際に野口英世の伝記を講演しました。彼もまたノーベル賞をほとんどつかみかけていた研究者でしたが、研究に取り組んでいたガーナで斃れた生涯は、日本人の心をつかんで離さないものがありました。

北里と野口。日本の医学研究の基礎を築いた明治時代の2人の巨人が、お札の肖像画でバトンタッチするという奇遇に出会い、その2人の伝記を異国を巡る船の中で講演するという珍しい体験をしたことを嬉しく思っていました。

北里の独創的な2大発見

- ① 破傷風菌の純粋培養と細菌毒素の発見
- ② ジフテリアの血清療法を実験的手法で実現
ベーリングの血清療法理論を実験医学で実現
物理学の理論物理学と実験物理学。
理論を実験で証明。この場合は、双方がノーベル賞を受賞している。

北里の燦然と輝くオリジナル研究の業績。今ならベーリングと北里の共同受賞は確実ですが、当時は複数受賞の制度ではなかったもので、惜しくも逸したものでした。北里の無念は115年後に大村智先生が晴らしてくれました。

ランチをしているテーブルに偶然、同席した年配の女性の方が、北里研究所の研究員だったことをお聞きしてびっくりしました。ご主人も交えて、往時の北里研究所の話になり、大村智先生の業績へと発展して話題は際限なく広がりました。近く大村先生の伝記も講演する予定です。

船内将棋大会は決勝で敗れる

日本将棋連盟の棋士、高田尚平七段の主催する船内最後の将棋大会に出場しました。今回は上級・中級・初級と分かれており、筆者は上級に出場して惜しくも決勝で敗れました。



盤を挟んで女性対局風景があちことで展開され、往時の将棋大会とは全く違った将棋大会の風景でした。

楽しみ・娯楽の一つですから勝敗に関係なく、和やかな雰囲気の大大会でしたが、女性「棋士」が本数近くいることに時代の波を感じました。プロの世界でも女流棋士が大活躍する時代です。藤井聡太七冠がフィーバーに火をつけたこともあり、男女を問わず将棋ファンが広がっていることを実感しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 49

2024/07/06

世界一周旅行の仕組みを知る

PEACE BOAT は世界一週の旅をうたい文句にしています。確かに豪華客船に乗船し 100 日間ほどかけて世界を一周するようにはなっています。しかし乗船してみてよく分かったことは、各地に寄港して上陸する日数はごく僅かであり、大半は船の中にいることでした。

そんなことは乗る前から分かっていたことだろうと言われると思います。しかし実感として初乗船者には分かりませんでした。乗っているうち気が付いたことは、寄港地で上陸して各種ツアーに参加できることだけではなく、「オーバーランドツアー」と呼ばれる、特別仕立てのツアーが用意されており、それに参加すると、寄港地で上陸すると 1 週間から 10 日くらい、飛行機で移動しながら各地を見物できるツアーがありました。船が先に行って寄港する港へ飛行機で追いかけて行って合流し、再び乗船してくるという仕組みです。

申し込んだが満杯で諦めた

PEACE BOAT 乗船申し込みをした後、様々な情報が郵送されてきましたが、乗船するのは先の話だからろくに読みもしないでいました。それが失敗の第一でした。オーバーランドツアーを知って、慌ててネットで申し込んだときには、筆者が希望するコースは人気があるらしく、5 コース申し込んですべて満杯になっていました。諦めずに空席待ちにしておけば、チャンスがあったかもしれません。

参加者に伺ったオーバーランドツアーの醍醐味

最も行って見たかったのはダーウインのガラパゴスでした。そこへ参加した千葉県出身の田中陽子さん(68)(仮名)は、船内の「ダンスの教室」の友なので、行ってきた話をうかがいました。そのお話と提供された写真を紹介します。



ガラパゴス諸島は、自然を守るために厳しい観光ルールがあり、諸島に上陸する際も人数や時間が制限されていました。小型ボートに分乗して無人島に上陸して自然にどっぷり浸かりました。

イグアスの歓迎、野鳥の楽園

印象に残ったことを次々と話してくれました。まずガラパゴス諸島の中心部にあるサンタ・クルズ島にエクアドルから飛行機で渡りましたが、早速、イグアナ君の歓迎にあいました。あちこちにイグアナがいましたが、どれもこれものんびり寝転んでいる風で、人間のことなど眼中にないようです。

それは諸島に生息する野鳥や他の動物たちにも共通の行動であり、人間は1メートル半内に近づいてはダメというルールがありましたが、その至近距離に行っても逃げも隠れもしない。その自然生息状態に感動したということでした。



色鮮やかなブルーの「下着」と思いきや、青い足を見せて抱卵中の「アオアシカツオドリ」。人間の姿に警戒する様子はなく、野鳥の楽園でした。



イグアナ君は自然溶け込んでおり、思わぬところから顔を出します。餌をやれば食べに来てくれそうですが、それはルール違反。見物する人間と彼らは共通の空間で過ごしていることを実感しました。

島の若者たちと植林活動をする

この島には、他からの移住者は住むことが出来ないそうです。島で生まれ育った人たちが、観光事業を生業にして、自然と共に生活しているということでした。ツアーに参加した 23 人の人たちとたちまち「親戚付き合い」となり、島のコーヒー園

に付属している植物相を見学し、ダーウィン記念館を見聞し、樹木の植林をして大いに楽しみました。



島の若者たちと一緒に植林活動。植林する人は、なにがしかのお金を払って次世代への基金になるような仕組みになっていました。

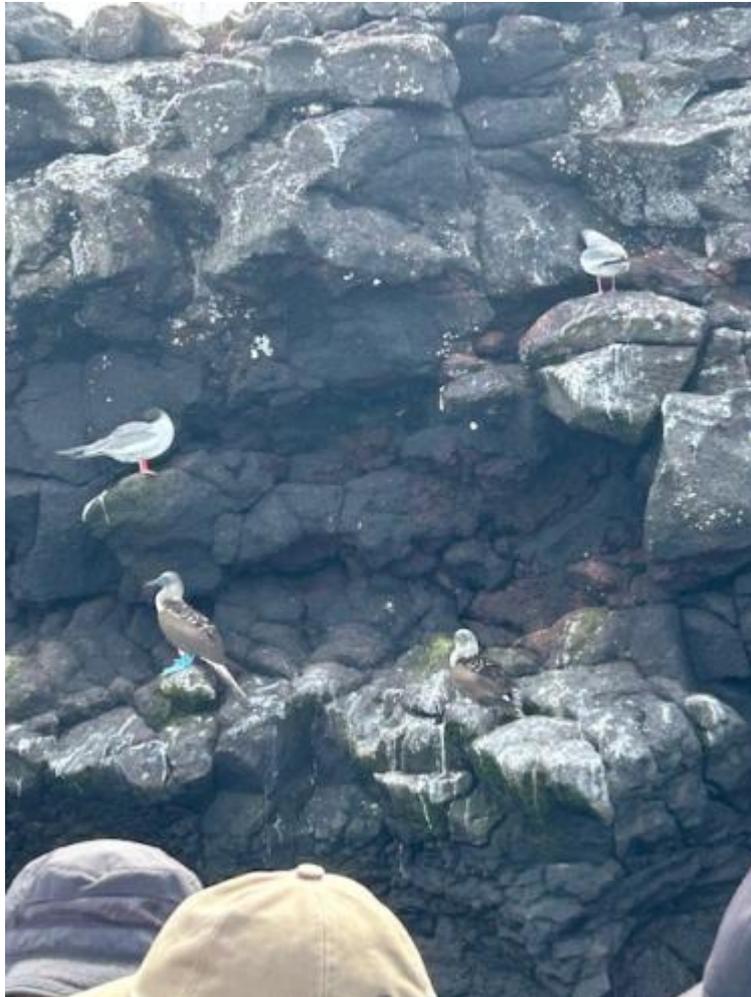


ガラパゴスといえば、陸上を闊歩するゾウガメです。しかし強い日差しにたまりかねたのか、水浴びする珍しいゾウガメを撮影しました。多くの生物群の食料になっているサボテン。熱帯地方の島の命となっていました。

いったい費用はいくらなの？

オーバーランドツアーの費用は、航海中の費用とは無関係ですべて別途の持ち出しです。ニューヨークから船と分かれ、太平洋のガラパゴス諸島で観光して空路パナマに戻ってきて本船と合流します。8泊9日で64万9千円。ホテル・食事・交通費すべてです。ガラパゴス諸島には4泊しました。

陽子さんは、大手企業に定年まで勤務してリタイア後は、好きな旅行を楽しんでいるとのこと。PEACE BOATには今回、3回目の乗船であり、うまくオーバーランドツアーにも参加できた嬉しさが伝わってきました。



さらばガラパゴス。野鳥の楽園にも別れを告げ、何度も振り返りながら帰途につきました。

「たくさんの写真を撮ってきました。孫たちに大自然に生きている動植物の命と地球の命の尊さを話し、聞かせたいと思っています」

船内では、あっちでもこっちでも、そんな話が広がっています。共に楽しむ旅のひとつコマであり、これもまた船旅の風景にもなっています。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 50

2024/07/11

オーバーランドツアーの興奮を再び知る

船旅も終盤に入ってきました。船内で行き交う人のお顔もほぼ知るようになり、お名前は分からないまでも、多くの方と目線で挨拶をするようになってきました。7階の中央ロビーのソファでゆったりと座っているとき声を掛けられました。西川（さいかわ）孝純さん(76)という方で、名刺をいただきびっくりしました。元共同通信社論説委員長を務めた方で、日常的に競い合うメディア関係者として健筆を振っていた方と分かり、いわば同業者のよしみで様々な話題で話は弾みました。

リビングストーンが発見したヴィクトリアの瀑布を見てきた

5月8日に南アフリカ(南ア)に寄港した際に3泊4日のオーバーランドツアーに参加して、世界三大瀑布の一つ、ヴィクトリア瀑布を見てきたというのです。しかも筆者が南アのサファリ公園で見た野生動物たちとはスケールが違う動物群の写真も見せられました。

筆者はヴィクトリア瀑布を是非とも見たかったのですが、オーバーランドツアーに申し込んだときはすでに定員満杯であり諦めていました。しかし西川さんはキャンセル待ちに登録していたので、出発数日前に船の中でアキが出たと報告を受けて勇躍参加したということでした。

筆者が少年時代「おもしろブック」という少年雑誌があり、巻頭に様々なカラーの絵巻を入れて大人気でした。その絵巻の中にイギリスのデイヴィット・リビングストーンがアフリカ探検中にこの瀑布を発見し、ヴィクトリア女王の名前を瀑布につけたのです。

毎月連載されたリビングストンのアフリカ探検記事を夢中になって読み、今でもリビングストーンが瀑布を目撃した光景の見開きの絵が記憶に残っています。

西川さんの撮影した数々の写真を見せられながら、アフリカ奥地で水煙と轟音を上げて爆流する瀑布を想像しては、行けなかったことに情けない思いをしました。



最大落差 108 メートル、轟音と共に滑り落ちる膨大な水量に、西川さんは度肝を抜かされたようです。「日光の華嚴の滝を横に数十本並べたような迫力を感じました」とも語っていました。



ヴィクトリア瀑布をバックに金婚式記念写真です。こんな写真を見せられて、筆者は西川さんと同じ年の奥様・治代さんご夫妻と一緒に went 行ったかったとの思いが募りました。キャンセル待ちをしておけば良かったと悔やみました。

雄大なサファリ公園もスケールが大きかった

瀑布に行く途中に国立公園のサファリを見学しました。ゾウ、キリン、カバなどアフリカ大陸に生息する大型動物の写真は、筆者が南アのサファリで見てきたものと大分、スケールが違っていました。

公園内を探検車でゆっくりと巡回しているとき、数メートル先のブッシュの中からゾウがぬっと出てきて驚いた瞬間もちゃんと撮影していました。



数メートル先のブッシュからぬっと現れたアフリカゾウにはたまげたそうです。車上から静かに観察していると、ゾウは何事もなかったように去って行きました。



カバの昼寝。餌は陸上の地べたに生えている草だけ食べているようです。草を食むときは、ひたすら地面を見ているだけですが、耳は発達しているので周囲の動きは音だけで判断し、しかも敏感だということです。



ゾウの水浴び。カバがいた水辺には、多くの動物と野鳥が群がり、動物天国でした。



キリンは遠くからでも目立つ動物です。ライオンなど肉食獣に襲われることもあるので、高い目線で監視しているようです。

金婚式と喜寿の前倒しのお祝い

西川さんはリタイアして世界一周を思いつき、PEACE BOATに乗船しました。政治部の記者時代、癌を告知され、リンパ節腫大の摘出手術を受けましたが、これを乗り越えた時期もありました。ご夫妻の金婚式がちょうど航海中にぶつかるので、そのお祝いもかねて乗船しました。金婚式当日の5月17日には、船のレストランでお祝い会をしていただき、シャンペーンを抜いて楽しんだそうです。ご夫妻はそろってことし76歳ですから、数えは77歳の喜寿です。祝い事は前倒しでやりますから、西川さんご夫妻の金婚式と喜寿は二重のお祝いだったのです。

さて、費用のことですが、オーバーランドツアーはお一人60万円ということで、ご夫妻で120万円でした。しかしそのコストに見合う光景を目蓋に焼き付け、楽しい旅の体験を身体に染みこませてきたことが、筆者との会話からにじみ出ていました。



PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 51

2024/07/12

メキシコから 1 週間かけてカナダのバンクーバーに接岸

人口約 250 万人のバンクーバーの港に着くと、ノルウェーとアメリカからの豪華客船 2 隻が先着で接岸しており、港周辺は上陸してきた観光客であふれかえっていました。人並みを整理していた女性に「どのくらいの人が上陸しているのか」と聞いても、首をかしげ、両手を広げるだけ。「大体、3000 人かな」とつぶやくように言いました。

筆者は、その昔、バンクーバーには何度も来ていますが、その当時はこれほど観光客が押しかけていませんでした。その話は最後に触れたいと思います。



30年ぶりに降り立ったバンクーバー。背後にある船はノルウェーの客船で、NYでも一緒でした。

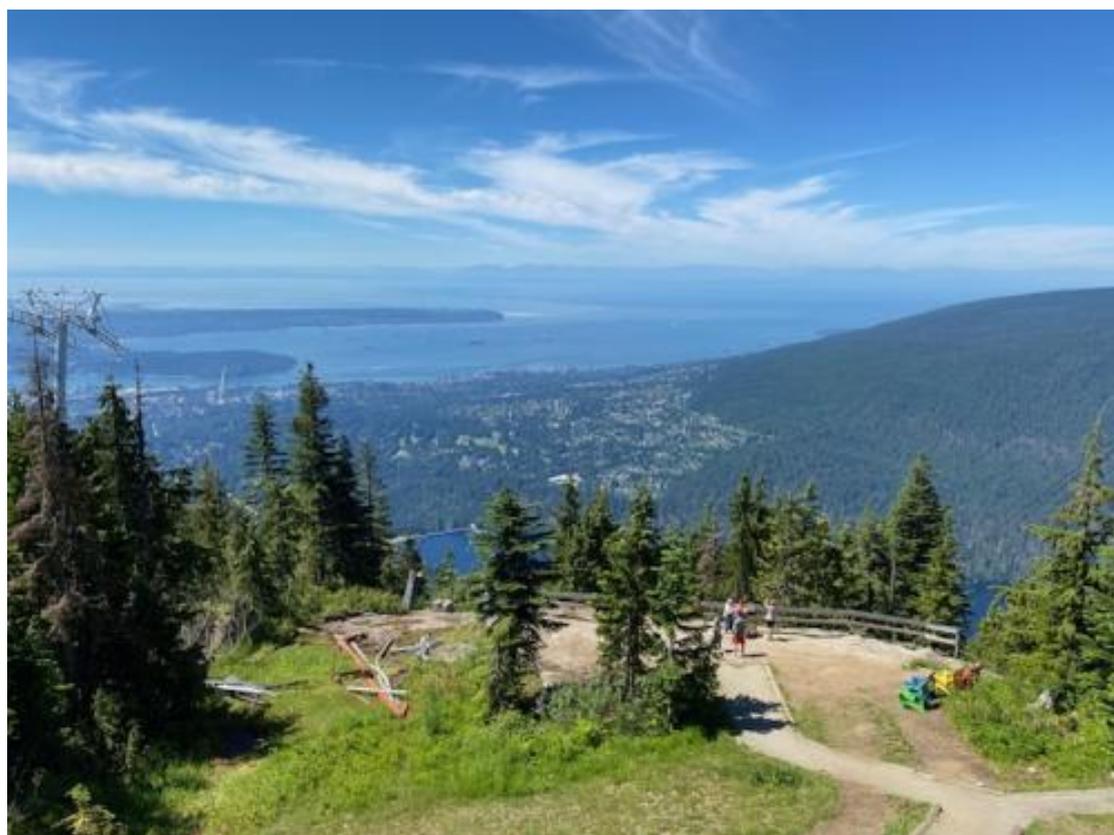
スタンレーパークでロープウェイに乗る

ツアーに参加すると、船からほどない距離のスタンレーパークに連れて行かれました。バンクーバー湾に面し鬱蒼とした森に囲まれた広大な公園です。バンクーバーは、豊富な森で生産される製材業と観光が主たる産業です。移動する大型バスも清潔でよく整備されていました。

このツアーの目玉は、パークからグラス・マウンテンの山頂に行く大型ゴンドラからの見物でした。山頂まで約10分の間、眼前に広がるパノラマは、遠くに広がるバンクーバー湾を臨んで、息を呑むような素晴らしい景観でした。



写真のような大型ゴンドラで山頂へ。山頂からの景観は素晴らしいの一語でした。



写真で撮影して見ても、実際の景観にはとうてい及びません。何事も実物に勝るものなしということでしょうか。山頂の景観を見ながら、配布されたランチボックスを広げて、しばし参加した乗船者らと歓談しました。

サケをシンボルとした環境運動

筆者は、40年ほど前にアメリカとカナダの行政マン、メディア関係者らと一緒に、なってサケをシンボルとした国際的な環境運動を展開したことがありました。サケは海から川に遡上し産卵して子孫をつないでいきます。日米加いずれも同じ習性であり、しかもサケが育つ海は北太平洋であり、共通の海で成長したサケたちが、3年後には生まれ故郷に向かってそれぞれの国に帰っていくというドラマチックな話で盛り上がっていました。

元々は、ロンドンのテムズ河が大西洋のサケの習性を利用して、汚濁したテムズ河の浄化キャンペーンにサケが再び遡上する河に戻そうという運動を展開したことを受けて始めたもので、日米加英の4カ国で同時期に始めた、地球規模の珍しい環境運動でした。

そんなことを思い出しながら、木こりが演じる木材切り競争などのアトラクションを見物したりしていうち、あっという間に帰途につく時間になりましたが、少々、時間に余裕があるので、港周辺の街に探索に出してみました。



原住民文化の木彫りの作品が、至る所で見かけました。宗教的な意味は薄く、表札代わりに建てていたと聞いたことがあります。

手頃なビアホールを見つけたので、生ビールとサンドイッチを注文して街行く人の観察を始めました。バンクーバーの途上を走る乗用車の多くが昼間からライトをつけています。後でガイドさんに聞いたら、昼間でもライトをつけていると事故が少ないデータがあるので、最近はエンジンを入れただけで昼夜問わず自動的にライトがつく車になっているとのことでした。

また、横断歩道では赤信号を無視して渡っていくジェイル・ウォーキング(jail walking,

刑務所に行くような違法な横断)意外と多いことに気が付きました。これも地元の方に聞いたところ認めていました。日本人は、車が来なくても信号が変わるまできちっと守っています。日本人の美德ではないかと思いました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 52

2024/07/13

アラスカのケチカン(Ketchikan)に上陸

バンクーバーを離陸し中1日置いてアメリカ・アラスカ州の最南端の港町のケチカン町に寄港しました。

人口は8千人余、先住民族はサケ漁で暮らしていましたが、1887年に白人が入植してから急速に発展してきました。当初はサケの缶詰工場が主産業でしたが、金鉱山が発見されてからゴールドラッシュの時代もあり、いまはサケ漁の本拠地であり風光明媚な景観を売り物にした観光都市として栄えています。

通常、船が接岸するとその地を見学するツアーが計画されますが今回はツアーはないため、乗船客は一斉に上陸してそれぞれの思いで、街に繰り出しました。筆者は同乗者の提案で「木こりショー」を見学に行きました。

木こりがアメリカ・カナダチームと二手に分かれて、木を切ったり、丸太乗りで相手を蹴落としたり、木登り競争をする対抗戦です。観客がアメリカ・カナダびいきの二手分かれ、声援合戦を繰り広げるというアトラクションショーです。会場を揺るがすような大声援と歓声で沸き立ち、一緒になって楽しみました。



木こりが演じるアトラクションは、観客席を巻き込んで楽しい対抗戦でした。



木登り競争もあり、大声援の中で競演していました。

かつてはゴールドラッシュで沸いた町という名残りなのか、多数の宝石・装飾類を販売するきれいな店舗が目につきました。一応、見学を兼ねて入りましたが、筆者には宝石を鑑定したり鑑賞する眼もなく、値段を見せられては驚くばかりの高価なものばかりでした。

指輪、ネックレス、イヤリングなど、おびただしい商品が陳列されていますが、それにも値札はなく、買うふりをして値段を聞いてみると、大きめの電卓に数字を入れて見せます。ドル建ての値段ですから頭の中で計算すると、眼が飛び出すような高価なものばかりです。



観光地だけに商店街は半分が宝石類販売の店舗でした。かつてのゴールドラッシュを思い出させましたが、値段の感覚が分からないので、お買い得なのかどうかさっぱり分からない値段ばかりでした。

試しに電卓を取り上げて、示された数字の半値を入れてみたら、相手は「冗談ではない」と眼を丸くして大げさな仕草で返し、こちらと電卓の数字を交互に入れ合

い、最初の値段の7掛けくらいまでまけてきました。こんな光景があちこちで展開されており、買わなくても大変友好的であり、楽しませてくれました。



ランチはご当地の名物、キングサーモンとカニにしました。どちらも大変美味でしたが、値段はやはり割高感であり、それでもビールを飲みながら乗船仲間と外の景観を楽しみ、アラスカへの8時間の上陸を満喫しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 53

2024/07/14

アラスカ湾に浮かぶおびただしい氷塊を見る

アラスカ州の最南端のケチカン接岸の翌日、さらに北行への航海が始まりました。次の寄港地はスワードで、この世界一周の航海の最後の接岸になります。船内では

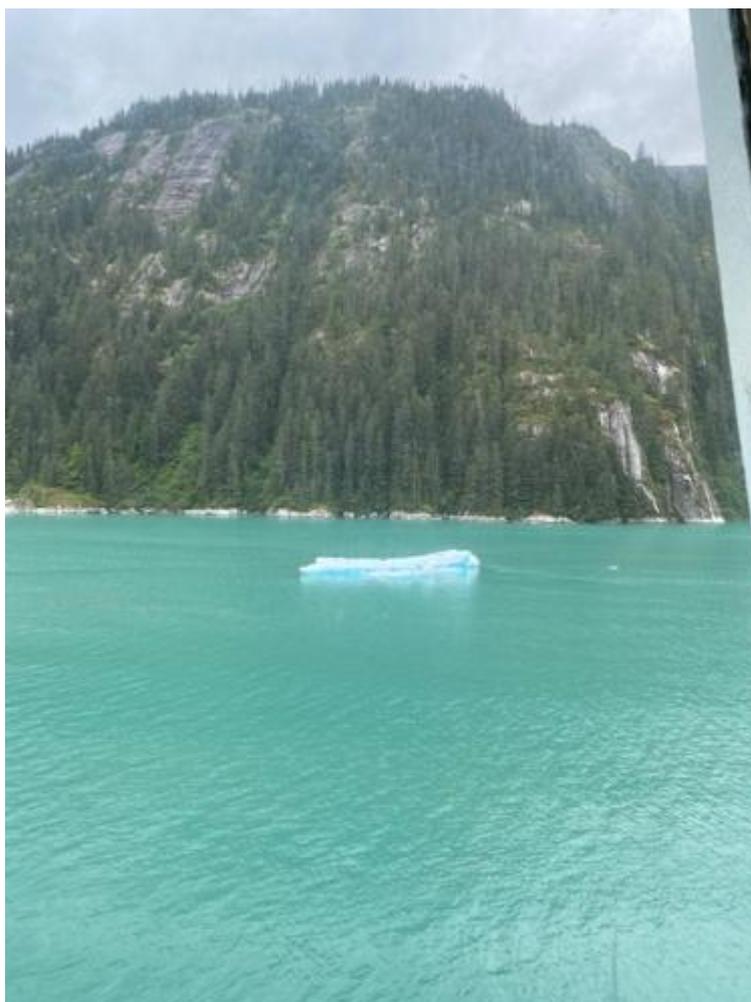
各種のイベント、趣味・道楽の集まり、文化・芸能活動、社交ダンス、楽器活動などの発表会が目白押しであり、船内はなんとなく慌ただしい雰囲気になっています。

船はアメリカ大陸の北側の入り組んだ沿岸の地形を見ながら北上していますが、長い歳月をかけて岩盤を鋭く削りとってつくったフィヨルド海岸と氷河から崩れ落ちてきた氷塊を見せるため、入り江に入って行きました。



船の7階デッキで氷河をバックに撮影しました。氷河と落下した氷塊は綺麗なブルーに染まっており、雄大な景観に見とれました。この日は、大村智先生のノーベル賞物語を講演する直前、突然、氷河が見られるという情報でデッキに出てきました。スーツ姿で写っているのはそのためです。

陸を見ると岩盤だけの山と樹木の繁茂する山とに分かれて見えますが、山と山の間を縫うように引いて落ちる滝のような流れがあちこちに見えます。氷河が見えてきました。船内放送で簡単な説明があり、船はしばらく氷河の見える地点で停船して見物する時間を作ってくれました。



氷河から崩れ落ちてきたおびただしい氷塊が、入り江からアラスカ湾へと出て行きます。地球温暖化が原因で氷河の崩壊が続いているということです。



長い歳月をかけて氷河から削りとられた岩石の山は、見るからにゴツゴツした鋭い岩石に見えます。まだ植物はほとんど生えていませんが、いずれ緑の山に変革していくでしょう。何年かかるのかわかりませんが、地球規模の歴史とは、想像を絶するものであることを実感しました。

会場には、おびただしい氷塊が浮いて流れていきます。中には岩盤をつけた氷塊も浮いており、陽光の具合で青く澄んだ色の氷塊も見えます。

クジラを目撃した幸運者がいた

氷塊がぶかぶか浮かぶ北洋の海にクジラが回遊しており、乗船者の何人かはその様子を目撃していました。数頭の群れも見た人がおり、写真撮影はなかなか難しかったようですが、地球上最大の哺乳動物の実物を目撃できるのは、やはり感動するようです。

船が沖合に出ると次第に波が高くなり、本航海最大の揺れを感じています。

大村智先生の講演を行う

氷河を船上から見物した後、大村智先生のノーベル賞物語を講演しました。千円札に登場した北里柴三郎の伝記の講演の続きにあたるもので、北里がノーベル賞を逸してから115年目にその無念を果たした大村先生の業績を語りました。



氷河を見物した後に講演会に参加した人も大勢いました。講演後に、大村先生の生き方と研究業績を初めて理解したという方がほとんどであり、先生の受賞から10年経ってしまうと、記憶から薄れてしまうことを感じました。研究業績だけでなく、人材育成でもすごい実績を残した生き方に、感銘を受けたようでした。

船での講演活動も残り1つとなりました。最後は「どうする日本 劣化し続ける国家と組織」のタイトルで締めくくります。チラシを作って配布していますが、多くの方から「是非、聞きたい」という期待の声をいただき、やや緊張して資料作りに取り組んでいます。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 54

2024/07/18

崩れるハーバード氷河を見る

船はアラスカのプリンスウイリアム湾内をクルーズしながら、次々と出てくる氷河を見せるため、停船しながら写真撮影のチャンスを作ってくれました。

湾内に注ぐ氷河には、ハーバード、エール、コロンビアなどアメリカ東部の名門大学の名前がつけられており、この日はハーバード氷河を眼前で観察する機会がありました。



氷河から落下してきたおびただしい氷塊が、海上を帯のように流れる光景は壮観でした。



ハーバード氷河を見学するため、船はしばらく停船して写真撮影の機会を作ってくれました。氷河崩れ落ちる瞬間を見せようという試みです。崩れる直前の氷河です。

湾内にはおびただしい氷塊が流れています。岩石や土をこびりつかせた氷塊もあり、いかにもいま氷河から崩れてきたと言わんばかりの印象です。

14階のレストランに詰めかけてきた乗船客の間から「あ、あ、あー！」というどよめきが、上がりました。目の前のハーバード運河の一角が崩れてきた瞬間です。白い雪煙をあげて崩れ落ちるその瞬間を筆者も目撃できたのですが、カメラで捉えることは出来ませんでした。

ところが一緒にデッキで観察していたご婦人が見事にその瞬間を撮影しました。快く提供していただいたのでアップします。その方はたまたま、筆者のオカリナの師匠である徳江裕先生(元小学校校長先生)の奥様の春美様と分かり、その奇遇に驚き大喜びした瞬間でもありました。

崩れ落ちる氷河の光景を見事、撮影したビデオは、ブログでアップが出来ないため Facebook にアップしました。そちらで見てもらえると嬉しいです。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 55

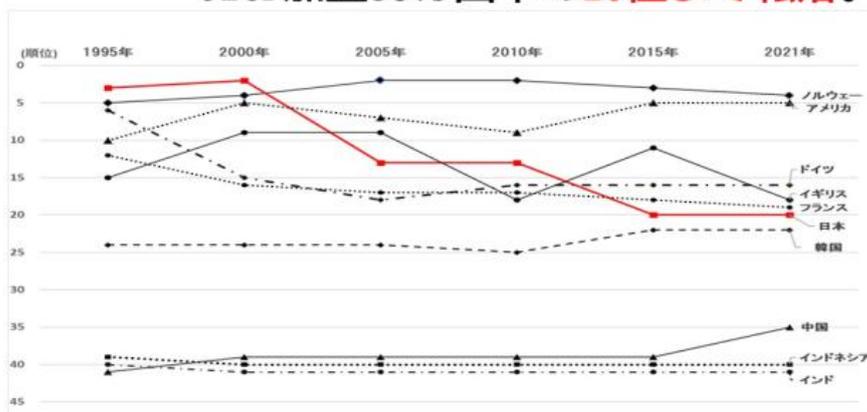
2024/07/18

劣化し続ける国家と組織を講演

PEACE BOAT の自主企画講演会は、今回が 9 回目となり、最後になりました。この講演テーマは、構想研究会でもたびたび筆者が強調してきた日本の国家と組織の劣化です。立法・行政・司法はもとより企業や様々な組織も劣化していると感じてきました。

国民一人当たりGDPの低下

2021年の国民1人当たりGDP
OECD加盟38カ国中の**20位まで転落。**



ノルウェー
アメリカ
ドイツ
イギリス
フランス
日本
韓国
中国

4

PEACE BOAT に乗船してから、様々な乗船客とこのテーマで話をする機会がりましたが、例外なく皆さんは同じ意見でした。「日本は確実に劣化している」。

そこで最後に、このテーマで講演することになり、会場には 200 人以上の方が来てくれて熱心に聞いていただきました。

GDPだけではない 平均賃金は28年間も横バイ

	1992年 平均賃金(\$)	2020年 平均賃金(\$)	(2020年)÷(1992年) %
アメリカ	48,389	69,392	143.4
ドイツ	42,562	53,745	126.2
日本	37,483	38,515	102.7
フランス	35,577	45,581	128.1
イギリス	33,306	47,147	141.5
韓国	23,796	41,960	176.3

7 国

際的なデータから見た国家の劣化

GDP やイノベーション競争力、教育への投資、科学技術投資など主なテーマで国際的な比較を見ると、この 25 年間、日本は着実に下降線をたどっています。特に安倍内閣から以降は下降線の一途です。さらに近年の円安は、直近でやや円高に振れているもののトレンドでは今後も円安に推移すると筆者は推量しています。

円安4つの問題点

1. 企業収益が増えても実質賃金が下がる。
国内消費は冷え込む。
2. 大企業と中小零細、大都市圏と地方の格差が拡大
3. 世界経済の動向次第で経済は動く。
円安のメリットだけで日本経済の動向を語れない。
4. 労働率分配から、トルクダウン(富めるものが富むと
貧しいものにも富が分配される)はあり得ない

「東洋経済」(2016年5月31日)などから作成

8

なぜ、こうなったのか。円安が企業の決算に好結果をもたらし、空前の企業収益黒字を計上しています。製造業で持っている国が、円安で儲かっています。儲かったカネは内部留保で備蓄しています。その内部留保額は、日本の国家の予算のなんと2年分と推測されています。

国家の財政は借金だらけで、後生にこのツケを回しています。国家はさびれ、企業だけ潤っている。このような現状を国民はどう理解すればいいのか。

アベノミクスを総括できない

安倍政権以来の劣化は、様々な数字で明らかです。ひところアベノミクスという経済政策で期待感を抱かせましたが、当時から疑問視する経済学者やそれを報道する経済誌がありました。失敗だったという講演を構想研でもしていただきました。

しかしその総括がきちんとされていません。日本は、歴史的な事実をしっかりと残し、その教訓を学ぼうとしていません。沖縄返還の密使密約外交が典型的であり、アメリカの公文書公開、日本の密使になった学者の暴露本、それを裏付けるアメリカの数々の文書などがあっても、国家としては未だに密約はなかったということにしています。国民はもっと真摯に歴史と政治に向き合わなければなりません。

アベノミクスは総括されたか

- ①大胆な金融政策、②機動的な財政政、③民間投資を喚起する成長

金融政策では、日銀が民間銀行等から国債を「爆買い」して円の信用を失墜させた。

*賃金が低下、*消費は伸びず、*GDP計算方式を勝手に変更してかさ上げ（明石順平「データが語る日本財政の未来」インターナショナル新書）

教育現場の劣化は、構想研創設 25 周年記念シンポジウムでも取り上げました。安西祐一郎先生は、「1000 人の海外留学生計画、5 年間で 1500 億円」という衝撃的な提言を発表しましたが、これも講演後の聴者からの感想の中で、共鳴者が多数いました。

かけ声だけのイノベーション政策

ユニコーン（株の時価総額が10億ドル以上、設立10年以内の非上場のベンチャー企業）数
 2023年世界全体1,215、アメリカ656、中国178、インド、英国、独、仏、韓国などより下位の17位。
 ・ハイテク貿易の医薬品、電子機器、航空宇宙分野の貿易状況。かつて第2位。今は中国、ドイツ、韓国に抜かれ第5位。
 ・特許出願件数
 中国、米国に引き離され、韓国に追いつかれつつある。

順位	国名	企業数
1	アメリカ	656
2	中国	178
3	インド	70
4	英国	51
5	ドイツ	29
6	フランス	25
7	イスラエル	24
8	カナダ	21
9	ブラジル	16
10	シンガポール	14
11	韓国	14
12	オーストラリ	8
13	メキシコ	8
14	インドネシア	7
〃	オランダ	7
〃	スウェーデン	7
17	アイルランド	6
〃	日本	6
〃	スイス	6

31

また、一人一票になっていない現実をアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどと比較したデータをしめしました、日本を除いてはすべて一人一票になっていますが、日本だけ、少数の得票率で多数の議員を獲得しているいびつな状況を示しました。これにも多くの共鳴者がいました。

日本は非人口比例選挙 半分以下の得票率で過半数の議員が当選

ドイツ	49.78%が50.1%の議員を選出、人口比例選挙
英国連邦	49.998%が過半数の326人を選出、人口比例選挙
フランス	議会議員選挙は人口比例選挙。 大統領選は1位58%、2位42% 人口比例選挙
アメリカ	State議会議員選挙(小選挙区)人口比例選挙 連邦議会議員選挙(小選挙区)人口比例選挙
日本	2021年衆院選(非人口比例選挙) 自公得票率47%が63%の議席を獲得 2022年参院選挙(非人口比例選挙) 自公得票率46%が59%の議席を獲得

司法の劣化は、たびたび筆者が公言してきましたが、特に行政訴訟ではまず勝てない現実。裁判所は国会と行政に寄り添う判決を出して、本来の役割を放棄している現実を語りました。

負のスパイラルからの脱却

- *政治・行政・司法に対し、本音で語る国民意識
- *本音の言動ができる女性の社会進出
- *正しい民主主義の教育
- *選挙制度の大改革（都道府県別を改革しブロック別で人口比例選挙が出来る）

45

押し寄せる技術革新の波を 乗り越えられるか

2045年問題

シンギュラリティ (Singularity) 問題とも
言われる

人間を上回る人工知能・知性が誕生する
(レイ・カーツワイル博士の予言)

機械学習、検証力などを世の中でどのよう
に活かすか。そのとき日本はどのようにするか

この講演内容は、いずれもう一度、構想研究会などで行って、劣化に歯止めをかける国民的な運動につなげたいと思っています。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 56

2024/07/19

アラスカ・スワードへ最後の上陸

PEACE BOAT の船旅の最後の寄港地はアラスカのスワードという小さな港町でした。この船旅で寄港した都市は、ここを含めて 20 都市でした。南アフリカのポートエリザバス、イギリスのティルベリー、ニューヨーク、パナマのクリストバルは 2 日間の接岸でしたが、残りの 16 都市はすべて 1 日だけの寄港地でした。

スワードは、アラスカ山脈を背後に控えた港町で人口は 3 千人。アラスカ鉄道の終着駅になっており、夏から秋にかけては観光客で賑わう町です。夏と言っても上陸した日は、濃い霧に包まれ、時折、雨が振る寒い日でした。



完全防寒スタイルで上陸しました。この時期、酷暑の日本では考えられない服装です。地球の大きさを知りました。

過酷な自然の中で生きる動物たち

鬱蒼とした針葉樹林帯とそれをまとった山々ですが、冬になれば雪と氷に覆われ、短い夏の期間でもこの日の天候のように肌寒く、霧や雨模様の日が多いようです。寒帯地帯の植物が濃い緑の重層の山並みをつくっており、際限なく自然景観が広がっています。雄大という言葉では表現できないような圧倒的な植物と山の中では、多くの動物たちが生息しており、野生動物保護センターを見学するツアーに参加しました。



アラスカの過酷な自然環境の中でも様々な動物たちが生息しており、それを保護する活動も知りました。和名は分かりませんが、長毛に覆われたバイソン、バカでかい角を持った大型のシカ、その他にもクマ、オオカミなどもオリの中に見えました。



保護センターの名の通り、何かの事情で保護された動物たちを保護し、健常になったらまた自然界へ戻すという活動のようですが、広い土地で飼育されている種類別の動物公園のようでした。

体毛の濃いアラスカバイソン、身の丈 3 メートルはありそうなクマ、オオツノジカなどがのんびりと草を食べていましたが、見物するこちらはセーターと厚手のコートかジャンパーを着込み、フードをかぶって縮こまりながらの見物でした。

山頂に立っても霧で何も見えず

標高約 2 千メートルの山までケーブルカーがあり、山頂まで行ってみました。しかし濃い霧の中ではぼんやりした山の景色が見えるだけで、お土産屋をのぞいてから早々に退散して麓のロッジへと帰ってきました。



ケーブルカーで山頂まで上りましたが、深い霧に覆われてほぼ何も見えず、寒さだけ身にしみるので早々に麓へ戻ってきました。



ここで出されたランチは、照り焼きにしたキングサーモンが美味しくて評判でした。あとは中華風の料理をバイキング方式でいただきましたが、滞在時間中は Wi-Fi 接続で写真やビデオなどデータ量の多いものを処理する作業に精を出しました。最後の寄港地でしたが見学する場所もなく、長い船旅の最後を飾るにはは暇つぶしの時間で費やすというさえない一日でした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 57

2024/07/22

空き家を改装してびっくりさせた中日ご夫妻

船には中国、韓国、台湾、シンガポール、インドネシアなど多彩な国籍の方が乗船しています。その中でもユニークな日中友好活動をしている中国人と日本人のご夫婦に出会い、それをどうしても報告したくなってアップすることにしました。



陸建洛さん(右端)と裕子さんから取材しました。

ご夫妻は同い年の 68 歳で上海市出身の陸建洛さんと西宮市出身の濱田裕子さんです。陸さんは、香港と中国の合弁大手港湾管理運営会社の技術スーパーバイザーを務めた方で、奥様は神戸市外国語大学中国語学科を卒業後、通訳翻訳業に入り、全国通訳案内士の資格を持っています。

2 人は 1995 年に結婚し、上海と西宮を拠点に日中間を往復しながら、日中の文化交流で精力的に活動しています。その延長線上でやっているのが、趣味の空き

家改装です。完成した「新築空き家」をギャラリーや憩いの場として人々に無料で開放することで社会貢献にもなっています。PEACE BOAT 乗船をきっかけに、憩いの場を「ピース ホーム」と名付け、さらに交流の輪を広げています。

朽ち果てたモデルハウスを新品同様にする

1970年代に阪急不動産のモデルハウスとして売り出した欧風3階建て、1階コンクリート、2、3階鉄骨構造の瀟洒な邸宅がありました。しかし家主が売りに出したときは、20年以上も使用していなかったのか家全体が朽ち果て、誰も買い手がなく2022年12月、陸さんが480万円で買い取りました。



買い取った邸宅は、見るも無惨に朽ち果て、屋敷も荒れ放題になっていました。



部屋の中もこのような状態でした。

陸さんは、農業と港湾労働者をしながら独学で様々な技術を学び、1991年の第2回世界青年発明コンクールで金賞を授与されるほどの才能のある方です。つまりモノの成り立ちを考えたり、構造を調べるのが得意であり生来、創造性に富んだ器用な方なのです。

元通りの瀟洒な邸宅にするために専門業4社に見積もりを依頼しましたが、どの会社も改修は不可能と言ってきました。最大の問題は急勾配の屋根にありました。

そこで陸さんは、自分で元通りに改修することを決心し、まず朽ち果てた家・屋敷の後片付けを始めました。可燃ゴミだけで45Lのゴミ袋が1500個以上、粗大ゴミは2tトラックに冷蔵庫4台、洗濯機3台、エアコン4台などを積み込み、ゴミ処理場に運びました。

一番苦労したのが、業者も尻込みした急勾配の屋根の修復でした。ハシゴを3つ
つないで作業場にのぼり、命綱をつけ、滑り止めの靴をはき、急勾配の屋根の修復
に1人で取りかかりました。家の中の廊下、壁、天井、引き戸、襖、障子などは、ネ
ットのオークションでできるだけ元のものと同じような材質を見つけて購入して取
り付けていきました。

あの朽ち果てた邸宅が、このように生まれ変わりました。



室内もこの通りピッカピカになりました。



1年かかって新築同様に改修完成

途中で上海に行ったりして留守にしましたが、前後合わせると正味ほぼ1年間で8室の改修を完成させました。周辺の民家に迷惑がかからないように電気工具類は一切使わず、手作業でやり遂げましたが、元の家主が見に来たときは、腰を抜かさばかりに驚いていたそうです。筆者は数々の写真を見せられただけでも腰を抜かしました。

少子高齢化社会を迎えて、日本ではいま全国で約20%の住宅が空き家状態です。これを安く買ってリニューアルすれば、自分の持ち家として活用できるし再販すればビジネスにもなります。陸さんは、いまの時代は空き家再生がビジネスになるチャンスであることを社会に訴えていくと言います。

日中草の根美術・芸術交流でも実績

陸さんの活動の本体は、中国友好のための書画、芸術品の展示会などのイベント活動です。先の改修した邸宅を公開して展示コーナーとして使用したり、宿泊施設としても利用しています。陸さんが長年集めてきた中国の絵画、書道などの作品は数千点にのぼり、それを展示したり、ご夫婦で各種のイベントなどにも積極的に参加して日中の芸術交流を通じたイメージ向上に取り組んできました。

中国の書画展は定期的で開催し、広く知られるようになっていきました。こうした活動が注目を集めて新聞・雑誌で紹介されたり、神戸港開港 140 年記念イベントに招待されて展覧会を開催しました。中国のイベントでも紹介され、「地球の歩き方」にも掲載されるなど、いまや有名人になっています。



陸さんは何でも独学で学ぶことが好きで、上海の独学キャンペーンでは、10年連続個人優秀賞を授与され、また「上海独学者の星 ベストテン」にも選出されました。

た。裕子さんも、中国語に堪能な才能を活かしながら日中文化交流を展開しており、ご夫妻のユニークな活動はますます広がっていくでしょう。



1991年世界青年发明特别金奖 (1991年青年发明コンクールで特別金賞)

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 58

2024/07/23

濃霧と時化と強風で荒れるアリューシャン列島の海

船は一路横浜を目指して毎日、南西へ向かっています。アリューシャン列島から千島列島沿いに航海していますが、海上はほぼ終日霧に包まれており、島影は見え、海は時化しています。船の屋上の甲板に出ると冷たい風が容赦なく吹いており、

冬支度でないと1分とられない過酷な環境です。夕食の食卓が賑やかになっているとき、同席している共同通信社元論説委員長の西川孝純さんが「5分間講話をしましょう。アッツ島とキスカ島のことです」と発言しました。

濃霧に包まれた海は終日時化しており、アリューシャン列島の島影を見ることは出来ませんでした。終日、大揺れの航海が続き、北方海域の過酷な海の世界を体験しました。

玉砕と撤退・アッツ島とキスカ島

西川さんはいま、船が通過しているアリューシャン列島のアッツ島とキスカ島が、先の太平洋戦争で正反対の運命をたどった戦争ドラマを語って聞かせました。

太平洋戦争が始まって半年を過ぎた1942年6月から、アメリカ軍は当時、日本が占領していたアッツ島の奪還のために戦艦、空母などの大部隊で包囲し、1万人を超える兵力を投下して守備隊わずか2500人のアッツ島に上陸してきました。その壮絶な戦いと最後の場面は、筆者も実録伝記を読んで知っていましたが、今回の航海でその島の脇を通過して帰路につくとは思いませんでした。



戦力・兵員・装備ともに圧倒的に上回る米軍に激しく抵抗する日本守備隊でした

が、ほどなく守備隊は全滅の悲運をたどり、日本国内ではこれを「玉砕した勇猛な兵士たち」として報じられました。玉砕という戦死者を称える言葉を使った最初の出来事でした。

続いて米軍は、隣にあるキスカ島も海軍部隊で包囲し、殲滅作戦を始めました。キスカ島には 6000 人の守備隊がいたのです。このとき日本の大本営本部は、北方の過酷な自然条件の中で占領を続けていた守備隊を放棄する判断に傾き、アッツ島はいわば「見捨てる」戦略をとり、キスカ島守備隊には撤退するように命令しました。

6000 人の守備隊は、濃霧の中をキスカ島に接近してきた巡洋艦「竹隈」を旗艦とする艦隊に次々と乗り込み、わずか 1 時間足らずの中で全員の撤退に成功して離脱し、この作戦は成功したのです。濃霧と荒れる北海海域で起きた玉砕と撤退。二つの命運を決めたのは当時の戦争指導者であり、大本営の作戦本部でした。正しい判断と素早い決断と実行さえあれば、国の命運をも変えることができることを教えた出来事でした。

北海道出身者多数が犠牲者になった

船がアリューシャン列島を抜けるころ、ランチの食卓で筆者は窓から海を見ながら「晴れていれば、この向こうにアッツ島が見えたかもしれませんね」と独り言のように語りました。するとすぐ右隣りにいたご婦人が「玉砕した島ですよ」と反応したのでびっくりしました。

玉砕という言葉を知っているとは驚きでしたが、いろいろ話をするうちにご婦人は札幌にお住まいの昭和 9 生まれでした。アッツ島で玉砕した戦死者の英霊を北海道神宮(当時は北海道護国神社と呼んでいたそうです)に納めるため、神社に向かう行列がしずしずと進んでいく光景が忘れられないと語りました。北の守りを固めるということから、多くの北海道出身兵士がアッツ島の守備隊にいたということでした。

遅すぎる決断と実行

日本は、いつの時代でも国家として先を見通した正しい戦略とその結論に基づいた決断と実行が出来ないことを 80 年前の大戦の中でも数多く見る事が出来ます。21 世紀になってから、デジタル技術革新が急速度で始まり、IT 産業革命が勃発しました。100 年後に今日を振り返って総括すれば、間違いなく第 3 次産業革命のど真ん中にいたことを認識することが出来るでしょう。

デジタル化した技術が教育・研究、社会、企業、組織、国家を急進展で変えていき、人の考えも価値観も文化も何もかも変えてきました。途上国・先進国に関係なく世界同時進行で進んだことに、前 2 回の産業革命とは大きな違いがありました。日本人、とりわけ国家・行政・企業の指導者たちは、時代認識をしっかりと持ち、先を見通した技術革新を先導する国家を作る責任があるでしょう。同時にそれは、筆者たち国民にも相応の責務を課せられたことにもなるのです。

世界一周の旅で感慨を持った様々な出来事の中でも、西川さんの講話から思い起こした「玉砕と撤退」の史実は、重い課題を背負って帰国する機会になったのでした。

世界一周の旅の報告は、ここで区切りをつけ、次回はこの船旅の総括を書きます。



船のラテン系バンドで人気のある「Joy&アップスタート」のファイナル演奏を聴きに行ったら、「アッツ島とキスカ島の史実」を講話してくれた西川さんご夫妻とバツタリ。記念写真に収まる栄誉をいただきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅—その 59(総括その 1)

2024/07/25

総括その 1 105 日間の船旅の仕組み

PEACE BOAT105 日間の船旅で 21 寄港地、18 カ国で下船・上陸しました。上陸していた総期間は 23 日間。残り 82 日間は船に乗っていたこととなります。寄港地に降りて飛行機で数日間から 9 日間ほどの「オーバーランドツアー」が用意されており、陸に上がって飛行機などで各地を観光し、PEACE BOAT に戻ってきて合流するというものでした。陸で観光している数日から 9 日の間に、PEACE BOAT の航海は続いており、ツアーはそれを追いかけて、次の寄港地に接岸したところで合流するというものでした。

オーバーランドツアーには、2 つの問題点がありました。第 1 に船を離れてホテルに宿泊をして観光するので数十万円から 100 万円余分の費用がかかりました。これは高いという評判がほとんどでした。2 つめの問題点はツアーに参加している間、陸上のホテル代を負担するので、船の宿泊代と二重の宿泊代がかかることです。当たり前と言えそうですが、それなら船にのらないで別途、目的を立てて旅行すればその値段より安く行けるのではないか。そういう意見でした。ただし、自分ですべて計画立案して実行するのは大変なので、別途、日本からのツアーに参加する形式がベターという意見でした。



西回りにインド洋からアフリカ喜望峰を回って大西洋に抜けて北上し、アイスランドから北大西洋の向こう側を東に回って北米・ニューヨークへ行きます。それから中南米・南米まで南下してパナマ運河を通過して太平洋に出て北上し、アラスカを経て西下して横浜に寄港するコースです。

つまり船旅というものは、船にいる間の観光はなく、甲板から海を見るか遠く陸の景観を見るだけであり、観光は寄港地で上陸したときの短時間ツアーか、オーバークランドツアーで飛行機などで各地を観光して、数日後に船に合流するというものです。

乗船後、初めてその仕組みを実感として知りました。筆者もオーバークランドツアーの応募開始から1ヶ月後に申し込みましたが、そのときにはすでにどのツアーは満杯でした。キャンセル待ちにしておけば、チャンスはあったかもしれませんが、満杯と聞いてすっかり諦めてしまいました。

印象に残った上陸観光のビッグ3

船内での生活ぶりは、このブログでも何度か報告してきましたが、総括として筆者が最も感じた3つの雑観を書いてみます。

第1は、ロンドン郊外にあったストーンヘンジ遺跡の見学でした(ブログではその31で報告)。バスに揺られて3時間ほどの距離にあった平原の中にそれはありま

した。子どものころの少年雑誌で読んでいたので、その遺跡には非常に興味がありました。先史時代の人々が、何の目的で遠く離れた場所からこの巨岩を運んできたのだろうか。様々な意味づけがされてきましたが、今なお謎が解けないままになっています。

今回のガイドの説明では、亡くなった人の墓標とか記念碑とかそういうことが最も可能性があるという説が有力になっているようです。遺跡を取り囲んだ大きな円形の見学路を 1 時間ほどかけて一回りしますが、どの地点から見ても遺跡群の景色は違ったものに見えました。

この先、ほぼ永遠にこの謎は解けないままに残されるのでしょうか。ロンドンのホテルに一泊したツアーだったこともあり、印象に残る観光でした。



快晴で日差しの強い日でした。実物の遺跡を見るという長年の夢を果たして大満足のツアーでした。

貧しい国になった日本と日本人

第 2 の雑観はアイスランド観光のときのものです(ブログではその 36 で報告)。

日本には多くの外国人観光客が押し寄せています。極東の島国であり世界の中でも経済大国として知られ、数々の独自の歴史と文化を持っている国としても魅力ある観光地です。それだけではなく最近の円安によって「何でも安くて、食べ物も美味しい国」として人気急上昇を外国人観光客から聞いて知りました。

その真逆なことをこの船旅で体験しました。アイスランドの首都、レイキャビクに上陸したときの体験からでした。人口 38 万人、国土面積は北海道より少し広い小さな国です。地熱発電、風力発電でエネルギーは余っているので輸出しています。ところが、お土産屋を覗いてびっくりしました。日本で 300 円程度かなと思う板チョコが 2000 円でした。この国の通貨アイスランド・クローナは、そのまま日本円と同じ価格なので、値段表の数字がそのまま円価格になるのが便利でした。

ご婦人たちは、洒落たショールやセーター、装飾品類の値札をみて、驚いた表情です。「日本で買った方が安いよね」というささやきがあちこちで流れていました。PEACE BOAT の案内パンフレットを見たら、日本でのハンバーガーは 450—550 円ですが、アイスランドでは同じものが 1700 円から 2000 円と書いてありました。



アイスランドは地熱発電(写真)、水力発電でクリーンエネルギー国家として世界トップクラス。海底ケーブルを敷いて電気をイギリスに輸出しています。福祉政策も行き届いた素晴らしい国作りをしていました。

一人あたり GDP は、アメリカとほぼ同じ約 8 万ドル。日本は約 7 万ドルなので抜かれています。年金の平均は、約 70 万円だそうで(現地ガイドの説明)、税金が高いので生活はそれほど楽ではないそうですが、医療費・学費、暖房・給湯費はタダ。福祉厚生が行き届いているので住みよい国であり、福祉国家として、存在感があります。世界の広さを感じました。

熱帯雨林地帯にあったヨーロッパ人の国

地図を見ると北米大陸と南米大陸の間をいくつもの国でくねくねと細く結んでいる、中南米諸国の中の南の方に位置しているコスタリカを訪問しました(ブログではその 46 で紹介)。

港から首都サンホセまでのバスに乗り、2 時間以上もかけて市街地のショッピング・センターにつれていかれそこで「放置」されました。現地の案内はナシ。夕方、迎えに来るバスで船に戻るだけ。これで「2 万 6000 円は高いよね」と参加者はブツブツ言いながら、バスを降りました。

雨期に入っているため外は雨。筆者は仕方なくまず、広々としたセンター内を見学してみました。有名な世界のトップブランドの店舗があちこちに点在しています。センター内は、ピッカピカでゴミ一つありません。分別ゴミ用のジュラルミン製のゴミ箱があちこちに設置されています。コーヒーショップに座り込んで Wi-Fi 接続し、PC 操作をしながらこの国の人々の観察をしてみました。

男女とも背が高く整った顔立ち、女性は均整のとれた金髪夫人。世に言う美男美女群です。子どもの団体が来ました。こちらも整った顔立ちで、みなきれいな服装です。おしゃべりしながら時にふざけ合って歩いている光景は、万国共通です。どこかヨーロッパの近代的な都市に来たような錯覚を覚えました。



バスの車窓から見た熱帯雨林の雨期の風景は、首都のサンホセに行くまで、写真のような光景が続きました。いまでも少数の原住民が、この森の中を移動しながら生活しているそうです。高速道路のインフラは、しっかりしたものでした。

コスタリカは軍隊を持たない国とその程度の知識しかありませんでしたので、ネットで外務省の情報などから国情を急ぎよ調べてみました。するとこんなことが判明しました。

- 人口は 515 万人、面積は日本の九州と四国を合わせた程度。
- 1949 年から現在まで、選挙により政権交代が行われており、中南米で安定した民主主義体制を持つ国。報道の自由度も確保されている。
- 識字率 98%(2018 年 UNESCO)という高い教育水準を持っており、教育費と医療費はタダ。
- 1994 年憲法で軍の非保有を宣言して常備軍を持たず、1983 年に「永世非武装中立」宣言し、87 年にはノーベル平和書を受賞している。

- 国民性が温厚で、物価が割安。交通インフラが発達し温暖な気候で住みやすく、イギリスのシンクタンクの調べで、世界一幸せな国の指標でトップになるなどこの種の世界ランキングでたびたび世界一になっている。

この情報にはびっくりしました。産業は良質なコーヒー、バナナ、パイナップルなどの栽培輸出で地方の雇用を支え、近年は特区に世界のハイテク企業を誘致して世界の医療機器の製造拠点になってきており、日本にもカテーテルなどを輸出しているとあります。ソフトウェア開発や生命科学産業も発展しているとあります。

ぶったまげた本当のコスタリカ方式

何よりも驚いたのは、日本の衆議院選挙で採用されている「コスタリカ方式」のいわれを知ったときです。コスタリカは選挙区内の有権者と議員との癒着を防ぐ目的で、国会議員の同一選挙区での連続再選を禁じており、大統領選挙でも再選を禁じていました。大統領で再選を目指すには退任後 8 年間の空白を置いて再出馬できるとなっていますが、これまで再出馬した大統領候補はいないようです。

日本では衆院選で「コスタリカ方式」というものを採用しています。小選挙区比例代表並立制では、同じ政党または友党に競合する候補者が存在する選挙区では、1人を小選挙区に、もう1人を比例区に単独で立候補させ、選挙ごとにこれら2人を交代させる方式をいいます。コスタリカの再選を禁じた選挙制度にあやかって名前だけ勝手に使っているようです。

コスタリカの清廉潔白な政治目標の中で実施しているコスタリカの選挙制度を知り、名前だけすっかり拝借し、似ても似つかない選挙制度をしている日本は「恥を知れ」と思いました。

豊かな自然で人気上昇中の国

コスタリカはアメリカ人の好感度ナンバーワンと聞いており、近年、移住者が増えているようです。多彩な植物・鳥類の生息地域として有名でウミガメの世界産卵地

になっています。国土の4分の1を環境保護区に指定しており、映画「ジュラシックパーク」の舞台にもなったということです。

ショッピング・センターのレストランやコーヒーショップをハシゴしながらネットで調べ、人々を観察し、船に帰るバスに乗り込んだときには、すっかりコスタリカファンになっていました。

PEACE BOATで世界一周の旅—その60で最終回(総括その2止)

2024/07/28

乗船客とスタッフを入れて総勢1500人

これだけの人間を乗せて衣食住すべてまかなう船は、日常的に生活している町が海上を動いていくようなものです。あるいは12階建てのマンションが海上に浮かんで動いていくということでしょうか。

乗ってみて意外感があったのは、車いすの方や歩行が困難な方がかなり目についたことです。手押し車で移動する方も相応にいました。乗って間もなく、風邪がはやりインフルエンザ、コロナ罹患者も出て筆者も気管支炎にかかり1週間ほど船室でゴロゴロしていました。

航海中に緊急ボートやヘリコプターで退船した方もおり、船内で亡くなった方も4人と言われています。平均年齢が73歳とも言われ、最高齢は95歳とか101歳とも言われていました。いずれの数字も食卓などで噂話として語られたことですが、筆者は大体そんなことではないかと信じていました。

船は築30年です。船内の温度コントロールは、うまく作動しているようには思えませんでした。筆者の船室も、寒かったり暑かったりで、エアコンダイアルはまったく不能であり、レストランは総じて寒い環境でした。



毎朝の食事。上が和食、下が洋食。写真の中のすべてを食べるわけではなく、適宜選んだものだけを食べます。



PEACE BOAT に乗船した目的は何ですか？

こういう問いかけが乗船客の間でよく出てくる言葉でした。なぜ、世界一周とうたった 105 日間の長い船旅に乗船したのか。単なる観光目的なのか、はたまたまにか目的があったのか。筆者が自問しても、回答は見つかりませんでした。強いて言えば、自転車操業のように続けてきた仕事一筋の生活、生き方に一つの区切りをつけたいということでしょう。しかし時間的に余裕を持った観光も旅の楽しみ方も、思ったようには出来ませんでした。

なぜか？ それは自分の年齢と関係があることに気が付きました。今年 11 月の誕生日を迎えると 84 歳です。見かけは年齢より若く見られますが、糖尿病を抱えておりその他には特段の病気を持っているわけではないのですが、年相応に発散するエネルギーが低下していることを感じるが多くなりました。つまり馬力がなくなったのです。往時、最も活発に仕事をしていた時代に比べると 3 分の 1 程度の出力エネルギーになっているでしょう。

船の寄港地のツアーでも、楽な方を選んでいたように思います。昔ならツアーなどに参加しないで真っ先に自分勝手に見聞をするために、地図を片手に街に飛び出したと思います。周囲をみていると、リタイアして間もない方が、生き生きと旅を楽しんでいる様子が見えました。そういえば 60 歳から 70 歳までの 10 年間、筆者が最も充実した仕事に明け暮れていた年代でした。

船内活動に精を出す

船内活動では、最も期待して乗り込んだのが社交ダンスでした。これは身体を動かすので、それなりの運動量を確保できると踏んだのですが、これとて上手くはいきませんでした。ダンスは講習会形式が多いので初心者と踊ることが多くなります。しかし、ダンス教師に教えてもらうことだけで過ごしてきたので、いきなり教える立場にはなれません。教え方が分からないのです。

フリーのダンス会が毎日開かれています、これに出てくる方は、千差万別なので筆者がペアとなって踊れる方はほとんどいませんでした。そんなこともあって、後半はダンスにも行かなくなり、もっぱら本を読んだり乗船客とお茶をする時間が増えました。

そんな中で自主企画という講演会を 9 回も行ってしまったのです。

* 学校給食は世界一のソフトパワー

* 沖縄返還を巡る密使・密約外交の真実(上下 2 回)

* 沖縄返還と日本の民主主義のあり方(PEACE BOAT と共催)

* イバルメクチンがコロナ特効薬になれなかった事情

* 野口英世はノーベル賞をつかみかけていた

* 新札千円札に登場した北里柴三郎のノーベル賞物語

* 北里の無念を晴らした大村智先生のノーベル賞物語

* 25 年間劣化し続ける国家と組織

沖縄返還の「密使・密約外交と日本の民主主義」の講演については、PEACE BOAT 事務局が支援してきたものです。会場は最初の学校給食の講演だけは、大きなオープンスペースでしたが、その他はすべて船の中で 2 番目に大きなビスタラウンジという劇場型の会場でした。毎回、200 人内外の聴者が来てくれました。



沖縄の日に合わせて、「沖縄返還の密使密約外交と日本の民主主義」について講演しました。多くの方から反響をいただきました。

負のスパイラルからの脱却

負のスパイラルから脱却するため 認定NPO法人21世紀構想研究会の提示

- * 人材育成のための教員の確保、教育投資の抜本的拡大
- * 科学技術イノベーションを進める人材育成に必要な投資の抜本的拡大
- * 推進への組織体制の抜本的な改革
- * 政界・官界・学界・経済界が全力で取り組むよう訴える。

エビデンスに基づいた主張を展開し、広く各界に訴え、活動ができる火種を絶やさないようにする。

「国家と組織の劣化」の講演では、筆者の主宰する認定NPO法人21世紀構想研究会の活動に言及し、船を降りてからも日本の劣化の歯止めへ提言活動を続ける覚悟を語りました。

講演後の反響の大きさを筆者の実感として上げると、「劣化する国家と組織」がトップで、「沖縄返還の密使・密約外交」の3回の講演が同列で続きました。また野口・北里・大村のノーベル賞がらみの話もそれなりに好評であり、筆者としては満足するものでした。

この講演活動は、PEACE BOAT 乗船体験者からのアドバイスもあり、事前にPEACE BOAT から相談があったので持参したPCには、過去の講演資料やデータ類などを入れてきました。それを基にしたリニューアル・パワーポイントを作成して講演しました。

やり残したオカリナと短編小説

乗船する前に目標があったオカリナ演奏のマスターと、書きかけていた短編小説の完成は出来ませんでした。オカリナは、講習会の集まりがあったので参加しまし

だが、参加者はいずれもそれなりに習熟している人ばかりであり、筆者のような初歩クラスの人はいないのでオカリナは捨てることにしました。ところが何かのきっかけで初級者に教えてくれる先生がいると聞いたので、そこに参加してなんとか「ふるさと」だけはほぼ一人前に吹くことが出来るようになりました。習い事の発表会があり、そこで「初級者のオカリナ演奏」グループ 5 人の 1 人として壇上で演奏する機会もいただき、成果らしきことをやり遂げた気持ちでした。

小説執筆の方は、頭の中で展開を考えることはたびたびありましたが、PC に向かって執筆していく気分にはならず、そのまま帰国することになりました。



オカリナ発表会では、壇上に並んで「ふるさと」などを演奏しました。

費用対効果は？

食卓で知らない同士で話をすると、乗船費用の話になることがあります。4人、3人、2人部屋、個室、セミスイート、スイートなどですが、4人部屋1人100万円から

個室は350万円くらい。その上は不明でした。契約の時期によって、大きく違っていました。コロナ前に予約した方と直前に予約した方では「割引」が違っています。総じて早めに申し込めば「早割」で安く済んだようです。

このほか、船内のアルコール飲料などは自己負担ですが、フルコースの洋食、ビュッフェスタイルの食事などは費用ゼロ。上陸して観光するオーバーランドツアーについてはすでに書いたので省きますが、様々な観光コースを用意したオプションツアーは、すべて相応の費用がかかりました。

105日間の旅は、乗船内容によって差が出ますが、ざっと200万円から500万円程度でしょうか。これが高いか安いかは、乗船者それぞれの価値判断になりますが、筆者が聞いた方からは、そうじて「楽しかった」「まあ、よかった」というご意見が多く、「もうごめんだ」という方もごく少数いました。筆者は「満足でした」という感想で締めくくります。

これを含めて60回の旅の報告を発信しました。多くの方から好意あるコメントをいただき、筆者の励ましになりました。皆さんに感謝の気持ちをお伝えして、PEACE BOATのブログに幕を引きたいと思います。ありがとうございました。



乗船仲間が筆者の船室に集まってお別れ会をしました。